

「親と子のあゆみはぐくむプロジェクト」

成果報告書

平成22年3月

大阪府福祉部子ども室

報告書目次

第1章 プロジェクトの概要	5
第1節 プロジェクトの概略	5
1. プロジェクト実施の背景と目的	5
2. プロジェクトの内容	5
第2節 プロジェクトの対象となる子育て家庭の現状	7
1. 児童家庭相談件数から見た大阪府の現状	7
2. 子育て支援者が「気になる」と感じる子育て家庭	7
3. プロジェクトの対象となる子育て家庭	9
第2章 子育て支援者が「気になる」と感じる子育て家庭に関する調査	13
第1節 調査の目的と概要	13
1. 調査の目的	13
2. 調査の概要	13
3. 子育て支援者が「気になる」と感じる項目の作成と分析方法	13
第2節 調査の結果	16
1. 調査対象者の属性	16
2. 子育て支援者が「気になる」と感じる項目の調査結果	18
3. 属性による分析	20
第3章 支援プログラムに関する調査	29
第1節 調査の目的と概要	29
1. 調査の目的	29
2. 調査の概要	29
3. 支援プログラムの効果を測定する項目の作成と分析方法	30
第2節 支援プログラムの概要と調査結果	32
1. 摂津市 ファンフレンズプログラム	32
2. 枚方市 トリプルPプログラム	40
3. 富田林市 子育て応援講座 ～気づきのワークショップ～	45
4. 河内長野市 親子であそぼ	50
5. 河内長野市 子育て家庭ほっと支援事業	55
6. 熊取町 ノーバディズ・パーフェクトプログラム	59
7. 熊取町 ざっくばらんに！親育ちサロン（大阪府親学習プログラム）	64

第4章 地域における子育て支援 ―「つながり」を中心にした取り組み―	71
第1節 調査の目的と概要	71
1. 調査の目的	71
2. 調査の概要	72
第2節 ヒアリングの結果	73
1. 摂津市	73
2. 枚方市	76
3. 富田林市	78
4. 河内長野市	81
5. 熊取町	85
第5章 地域における子育て支援のあり方に関する課題	91
第1節 支援を必要とする家庭の把握	91
1. 支援者自身の自己覚知	91
2. 子育て家庭からの「気づいて」サイン ～支援者相互での「気になる」感じ方の把握～	92
第2節 支援を必要とする家庭への対応	93
1. 支援プログラムの分析・評価	93
2. まとめ	96
第3節 地域の連携	96
1. 目的に応じた連携	96
2. 地域住民や地域で活動する団体との連携	98
3. まとめ	99
第4節 地域で取り組む子育て支援に求められる課題	99
1. 「社会的包摂」(social inclusion)と子育て支援	99
2. 「社会的包摂」の視点から捉える子育て支援の課題	100
巻末資料	
資料1 子育て支援者から見た「気になる子育て家庭」に関するアンケート調査	
資料2 子育てに関するアンケート（効果測定事前調査）	
資料3 子育てに関するアンケート（効果測定事後調査）	
資料4 アンケート回答者属性集計	
資料5 検討経過	

第 1 章

プロジェクトの概要

第1章 プロジェクトの概要

第1節 プロジェクトの概略

1. プロジェクト実施の背景と目的

近年、社会構造やライフスタイルの変化等により、家庭や地域における子育て機能が低下していると言われて久しい。地域や福祉・教育の現場で、周囲から孤立している家庭、子育ての不安を強く抱えている家庭、子育てに無関心な家庭など、周囲が「気になる」と感じる子育て家庭が増加している。

都市型の生活環境や人間関係の希薄化、加えて昨今の経済情勢の厳しさは、子育てをより困難なものにしており、そのことが、以前は一部の特別な家庭の問題として捉えられていた虐待や子育て不安、経済的貧困等、保護や支援を必要とする事象を、今やどこの家庭でも起こりうるものになっていると考えられる。

子育て支援の現場では、子どもの健全な育ちや子育て環境の充実を目的として、周囲が「気になる」と感じる子育て家庭に体系的な支援を行う必要があると認識している。しかし、このような子育て家庭に対する体系的な支援は、ほとんどの地域で確立されておらず、子育て支援の現場では、支援の方策やノウハウ等をどのようにして明らかにし、共有したらよいのか模索している状況である。大阪府内においても「つどいの広場事業」や「こんにちは赤ちゃん事業」など拠点型支援や訪問型支援が各地域で公民間問わず多様になされているが、それぞれの地域での取り組みという色合いが強く、必ずしも府内全域での支援の方策やノウハウ等の共有には至っていない。

このような状況をふまえ、大阪府では、子育て支援者が「気になる」と感じる子育て家庭への効果的な支援の方策等について、摂津市、枚方市、富田林市、河内長野市、熊取町と共同で調査・研究を行う「親と子のあゆみはぐくむプロジェクト」を発足させた。

本プロジェクトでは、複数のモデル地区を設定のうえ、地域や福祉・教育の現場で取り組まれている多様な支援プログラムの効果やその特性などについて調査・研究を行うとともに、個別で実施されがちなこのような取り組みを、どのようにして有機的にとり結んだらよいのかを検討する。また、これらの調査・研究の成果を各市町村が共有し、相互に学び合うことで、府内全域の子育て支援環境をより一層充実することを目指す。

2. プロジェクトの内容

(1) 子育て支援者が「気になる」と感じる子育て家庭の具体的なイメージについての検証

未就学児のいる家庭を対象とした支援が行われている現場で、子育て支援者に「気になる」と感じる子育て家庭の具体的な特徴を尋ね、子育て支援者が「気になる」と感じる子育て家庭の具体的なイメージについて検証を行った。

（２）支援プログラムの実施と検証

１）支援プログラムの実施

モデル地区において、平成21年９月から平成22年２月にかけて次の７つの支援プログラムを実施した。

類型	支援プログラムの対象者	支援プログラムの名称
拠点型	親	トリプルPプログラム（枚方市）
		子育て応援講座・気づきのワークショップ（富田林市）
		親学習プログラム（熊取町）
		ノーバディズ・パーフェクトプログラム（熊取町）
	親・子ども	親子であそぼ（河内長野市）
	子ども	ファンフレンズプログラム（摂津市）
訪問型	親・子ども	子育て家庭ほっと支援事業（河内長野市）

２）支援プログラムの効果検証

支援プログラムの実施前後に、支援プログラムの参加者（子どもを対象にした支援プログラムについては親）に対するアンケート調査を行い、育児不安感がどれくらい軽減したのか、行動・考え方にどのような変化があったのかなどを分析し、支援プログラムの効果検証を行った。

（３）「つながり」を中心とした地域における子育て支援の事例紹介

本プロジェクトのモデル地区における地域の連携や協働など、「つながり」を中心とした子育て支援の取り組みを紹介した。

第2節 プロジェクトの対象となる子育て家庭の現状

1. 児童家庭相談件数から見た大阪府の現状

図表 1－1 主な都道府県内の市区町村における児童家庭相談件数と児童虐待相談件数（平成 20 年度）

	受付件数		
	総件数(a)	うち児童虐待相談(b)	b/a (%)
大阪府内の市町村合計	24,409	8,196	33.6
東京都内の市区町村合計	29,424	4,705	16.0
兵庫県内の市町合計	32,306	3,257	10.1
神奈川県内の市町村合計	33,557	2,597	7.7
全国合計	270,364	51,620	19.1

出典：厚生労働省「市町村の児童家庭相談業務の状況及び要保護児童対策地域協議会の設置状況等について（平成 21 年 4 月現在）」から作成

厚生労働省「市町村の児童家庭相談業務の状況及び要保護児童対策地域協議会の設置状況等について（平成21年 4 月現在）」によると、平成20年度に全国の市町村が受け付けた児童家庭相談の件数は、約27万件であり、このうち、大阪府の件数は24,409件（図表 1－1）である。そのうち、児童虐待に関する相談受付件数は8,196件あり、2 番目に多い東京都の4,705件をはるかに超え全国で最も高い件数となっている。さらに、受付総件数に対する児童虐待相談件数の割合をみると33.6%になり、この数字もまた全国では最も高い数字になっている。

このことから、虐待等の行動を引き起こすリスクを一定程度有している家庭もまた、かなりの数に上っていると考えられる。

2. 子育て支援者が「気になる」と感じる子育て家庭

（1）子育て支援者が「気になる」と感じる子育て家庭の例

子育て支援者に、「気になる」と感じる子育て家庭について話を聞いてみたところ、話題に尽きないほど様々な事例が挙げられる。例えば、ベビーカーに子どもを乗せたまま、携帯電話の利用に夢中になっている親の姿は珍しくない光景となっている。また、生活スタイルの変化を理由に、午後から集まる子育てサークルが増加している。さらに、座って食事をすることができない子どもや、生活費を切り詰めてそのお金を自らの遊びのために使ってしまう親、離乳食は市販のものを買わないと自分ではつukれない親、子どもとのコミュニケーションにストレスを抱える親、子育てを頑張りすぎて子どもに執着しすぎる親なども、地域の子育て支援者が「気になる」と感じる子育て家庭の例である。

多くの子育て支援者が「気になる」事例として、前述のような指摘をするものの、これらの事例が具体的に親と子どもの今後にどのような問題としてつながっていくのか見当もつかないまま、子育て支援者自身の印象に留められているのが実態であろう。

子育てについての自覚や責任が薄い親、あるいは、社会人として未熟である親が、今までは自然に育つ、身に付くと思われてきた子どもの育ちに様々な影響を及ぼしていると考えられる。先ほどのような「気になる」事例は、統計化こそされないものの、日常生活の当たり前の光景になりつつあることに、危機感を抱いている子育て支援者は少なくない。

（２）子育て支援者が「気になる」と感じる子育て家庭の把握と支援の例

子育て支援者が「気になる」と感じる子育て家庭が、自立した家庭生活を営めなかったり、虐待等の子どもの健全な育ちに影響を及ぼすリスクは、地域や社会の支援方法やその度合いによって、高くも低くもなる。以下に、子育て支援者が、長年の経験の中で、「気になる」と感じる子育て家庭をどのように把握したり、支援しているかについて、例を紹介する。

大阪府内A市では、児童家庭実相談件数は、15年間で3倍以上に増加している。虐待に関する相談も数多くあるが、虐待は密室の中での行為であるだけに、発見するのが容易ではなく、様々な虐待予防プログラムに取り組み、親支援に努めてきた。しかし、中には問題を抱えていても支援を受け付けない親もいるが、このような場合であっても、子どもの健康な育ちを阻害する要因を取り除かれるまで、子どもをそのままにはしてられない。一方で、たとえ子どもが困難な状況に置かれていたとしても、子どもに回復力や、自尊感情を損なわないような力を付けていれば、子どもの健康な育ちを保ち続けることは可能である。このような視点から、子ども自身に直接働きかけるプログラムを実施するに至った。その結果、今まで知ることが難しかった「気になる」と感じる子どものつらい気持ちや、落ち着きのない行動の意味を子ども自身から知ることができた。

大阪府内B市のNPO法人が実施する「つどいの広場」は、子育てを支援するだけでなく、子育て家庭の生活を支援する場にもなっている。そもそも、子育ては生活の一部であり、くらしそのものと連動している。転居したばかりで地域の事情がわからない親に、病院や商店、子どもの遊び場など身近できめ細かい情報を提供したり、経済的困窮や精神的不安を抱える親を行政が実施する相談やサービスにつなぐ役割を担ったりと、子育て支援だけでなく生活支援も積極的に行っている。

大阪府内C町では、1歳7ヵ月健診後に、相談等を行った家庭の件数が、平成19年度から20年度にかけて5.4%の増加を示している。その中で、人間的コミュニケーションの成立を示す「指差し」の獲得が困難になってきていることが特に懸念されている。また、要保護児童対策地域協議会が何らかの問題を抱えていると認識している児童数は、町内児童人口の5%近くまで増加している。

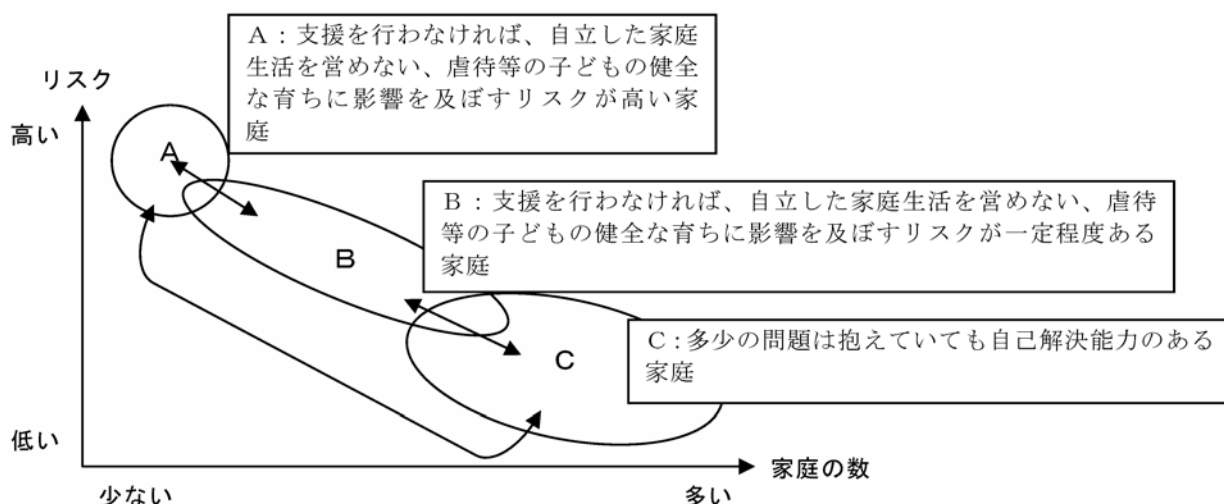
これらの事例は、単に乳幼児のいる子育て家庭が抱える問題というだけではなく、子どもたちが成長した後の、登校拒否やいじめ、学力低下、ひきこもり、就労格差など、学校生活や社

会生活にも様々な影響を及ぼす可能性をもっていることを認識する必要がある。

3. プロジェクトの対象となる子育て家庭

本プロジェクトでは、たとえ多少の問題は抱えていても自己解決能力のある家庭、支援を行わなければ自立した家庭生活を営めなかったり、虐待等の子どもの健全な育ちに影響を及ぼすリスクを一定程度もつ家庭など、そのリスクの程度の度合いが低～中程度の家庭を対象としている。リスクの高低と家庭の位置を視覚化すると、図表1-2のように示される。

リスクの高低と家庭の位置は、それぞれ固定されたものではなく、地域や社会とのかかわりやその支援の方法や度合いにより、どの家庭もリスクが高くなったり低くなったりと状態が変化することがある。



図表1-2 リスクの高低と家庭の位置

第2節1. で述べたように、大阪府は、虐待相談受付件数が全国の中でも突出して多い。このことから、虐待等の行動を引き起こすリスクを一定程度有している家庭もまた、かなりの数に上っていると考えられる。虐待等の行動を引き起こすリスク以外にも、地域の中で孤立して話し相手がいない、自分の時間が持たなくてイライラしている、育児がわからなくて自信がない、経済的に苦しく子育てに余裕がないなど、自分の子どもをかわいいと思えない、子育てが辛い、苦しいなどの思いを抱えている家庭は、想像以上に多いと思われる。そして、このような子育て家庭は、周囲と相互に関わりあう中で、「辛い」「苦しい」等の思いを抱えるに至ったと考えられる。つまり、このような子育て家庭に対して、子育て支援者が「気になる」と感じる元を正せば、その多くは、親自身の資質というよりも、地域や社会の子育て支援の環境に要因があると考えるのが自然であろう。

大阪府内には子育て支援のための多様な人的・物的資源が存在するが、必ずしもこれらの資源が有機的に機能しているわけではない。資源の活用方策等を調査・研究することを通して、「子育てが楽しい、充実している」「子どもが生き生きと遊んでいる、生活している」まちづく

りを目指して、総合的かつ重層的な子育て支援の取り組みを実施することが求められている。

第2章

子育て支援者が「気になる」と 感じる子育て家庭に関する調査

第2章 子育て支援者が「気になる」と感じる子育て家庭に関する調査

第1節 調査の目的と概要

1. 調査の目的

保育所、子育て支援センター、保健センター、幼稚園、つどいの広場、家庭児童相談室など地域の現場では、多様な子育て支援者が支援活動を行っている。しかし、子育て支援者がどのような状況にある家庭を「気になる」と感じているのかについては、それぞれの職種や専門性、あるいは子育て経験の有無などの当事者性によって異なるため、必ずしも子育て支援者の間で共有されているわけではない。

このため、子育て支援者がどのような状況にある家庭を「気になる」と感じるのかに焦点を当て、統計的手法により客観化することを目的に、以下のような内容で調査・研究を実施した。

- ①子育て支援者の主観による回答を求めることで、どのような状況にある家庭を子育て支援者が「気になる」と感じているのかを検証する。
- ②職種や専門性、子育て経験の有無など子育て支援者の属性が「気になる」感じ方にどのような影響を及ぼしているのかを分析する。

なお、調査・研究の成果について、子育て支援者が相互に、「気になる」感じ方に違いがあることを認識し、学び合うために活用してもらいたいと考えている。しかし、調査・研究の結果を基に、家庭をチェックするためのリストを作成して現場で使用するようなことは想定しておらず、そのようなことを奨励するものでもないということを改めて確認しておきたい。

また、本調査の考察については、第5章で行う。

2. 調査の概要

調査対象者は、本プロジェクトに参加している5市町において、未就学児がいる家庭を対象に支援を行っている子育て支援者としている。1市町につき、行政機関・組織に属する子育て支援者30名と民間組織に属する子育て支援者30名の合計60名を対象として、5市町合わせて300名に、平成21年11月から12月にかけて調査紙を配布し、自記式の回答を求めた。

調査対象者への調査紙の配布、回収はプロジェクトメンバーが行った。回収数は284部である。

なお、実際の配布数は地域の事情により若干の増減があった。

3. 子育て支援者が「気になる」と感じる項目の作成と分析方法

(1) 項目作成の手順

まず、どのような家庭が「気になる」と感じるのかについて、プロジェクトメンバーによるブレインストーミングを行うとともに、各市町内における子育て支援者による意見交換を行い、「気になる」と感じる項目として挙げられた344事項を小項目とした。次に、プロジェクトメン

バーにより、344の小項目の内容を検討し、内容が類似している項目を28項目に分類して、中項目とした。さらに中項目を再検討して統合し、16の大項目を設定した。その際、小項目についても再度精査を行い、同義項目をまとめた。

その結果、図表2-1のように、「子どもの状態」、「子どもに対する暴言」、「子どもから見た親子関係」、「親から見た親子関係」、「子育てへの関心の低さ」、「生活の中の段取り」、「生活習慣の乱れ」、「支援者との関係」、「親の精神的な問題」、「心身の疾患」、「人との関わり」、「経済的問題」、「転入・転勤」、「急な変化」、「家族関係」、「地域の中での孤立」という16の大項目と、これらの下位項目として55項目をおくこととした。

この55項目を質問項目として、子育て支援者が「気になる」と感じる項目に該当するかを、調査対象者に6件法（「非常によくあてはまる」「あてはまる」「ややあてはまる」「ややあてはまらない」「あてはまらない」「まったくあてはまらない」）で質問した。

図表2-1 子育て支援者が「気になる」と感じる項目

	項 目	大項目
1	よく泣く、笑わないなど子どもの情緒が不安定である	子どもの状態
2	子どもにアレルギーや発達心配事がある	
3	子どもがかむ、ひっかく、突くなど問題を起こす	
4	子どもへの言葉がけが乱暴である	子どもに対する暴言
5	言葉より先に手や足が出る親	
6	子どもが親の目を気にしすぎる	子どもから見た親子関係
7	子どもが親の所に行かない	
8	子どもに干渉しすぎる	
9	子どもをお人形のように着飾る	親から見た親子関係
10	年齢に応じた子どもとの関わり方・遊び方が分からない	
11	自分の子がかわいくないと言う	
12	子どもに視線を向けていない	
13	子どもが泣いていても抱っこしない	
14	子どもの発達の遅れを気にしながらも目をそらす	
15	子どもをでき愛しすぎる	
16	小さいときからたくさんの習い事をさせる	
17	入浴や歯みがきなどの世話が十分でない	子育てへの関心の低さ
18	子どもの服がいつも汚れている	
19	子どもの体調が悪くても仕事や自分の用事を優先する	
20	家の中が片付けられていない	生活の中の段取り
21	連絡なしで欠席する	
22	持ってくるもの、行事など忘れる事が多い	
23	状況に即した臨機応変の対応ができない	生活習慣の乱れ
24	夜遅くなっても子どもを寝かしつけない	
25	子どもに朝食を食べさせていない	

	項 目	大項目
26	場にそぐわない身なりをしている	
27	支援が必要な状態なのにそれを認めたがらない	支援者との関係
28	日中のかなりの時間を子育て支援機関で過ごす	
29	苦情や要望が多い	
30	わざわざ問題を起こして支援者の対応を試す親	
31	子どもの発達や環境を気にしすぎる	親の精神的な問題
32	同じ事を何度も確認する親	
33	他人の目を気にしすぎる親	
34	ギャンブルや薬物・お酒等への依存傾向が強い	
35	自己否定されたという被害妄想を抱きやすい親	
36	親が体調面で不安定である	心身の疾患
37	親が精神的に不安定である	
38	親に自信がなさすぎる	
39	よい親になることに縛られる	
40	主体性に乏しく人に合わせすぎる親	人との関わり
41	人の話を集中して聞けない親	
42	相手に直接話すよりも、メールに頼る	
43	困ったことがあっても自分から相談しない親	
44	親同士の交流をもちたがらない	
45	あいさつなど人とのコミュニケーションがうまくとれない親	
46	経済的に苦しく、生活や子育てに余裕がない	経済的問題
47	転入や転勤で近所に知り合いがいない	転入・転勤
48	親の言動、表情、容姿等に急激な変化が見られる	急な変化
49	子どもの言動、表情、容姿等に急激な変化が見られる	
50	夫または妻の親との関係がうまくいっていない	家族関係
51	親がDVを受けている	
52	夫婦関係が上手くいっていない	
53	父親が子育てに協力的でない	
54	多胎あるいは年子で親の負担が大きい	
55	地域の中で孤立した親子	地域の中での孤立

(2) その他の質問項目

その他の質問項目は、次の3つの視点から作成している。

- ①性別、年齢、資格などの基本属性
- ②子どもの有無、子育て経験などの当事者性
- ③地域範囲の認識、地域連携など地域活動に関するもの

（３）分析方法

図表２－１で示した55項目について、各項目における回答の平均値と調査対象者の属性に関するt検定を行い、調査対象者の属性の違いにより「気になる」感じ方に違いが見られるかを分析した。

第２節 調査の結果

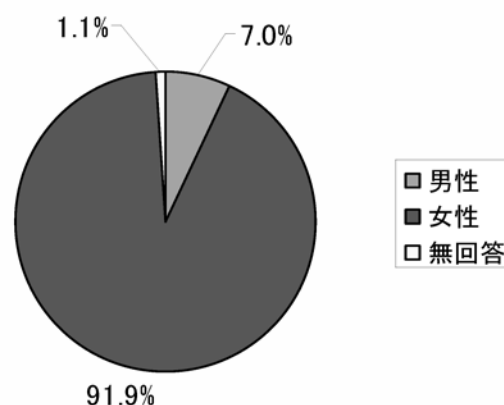
１．調査対象者の属性

（１）性別

女性が91.9%と大半を占めている。

図表２－２ 性別

項 目	度数	パーセント
男性	20	7.0
女性	261	91.9
無回答	3	1.1
合計	284	100.0

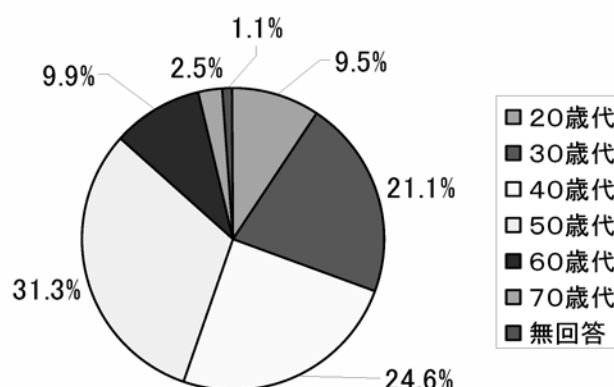


（２）年齢

最も多い年代は「50歳代」31.3%、次いで「40歳代」24.6%、「30歳代」21.1%となっている。「20歳代」「60歳代」はともに10%弱である。

図表２－３ 年齢

項 目	度数	パーセント
20歳代	27	9.5
30歳代	60	21.1
40歳代	70	24.6
50歳代	89	31.3
60歳代	28	9.9
70歳代	7	2.5
無回答	3	1.1
合計	284	100.0

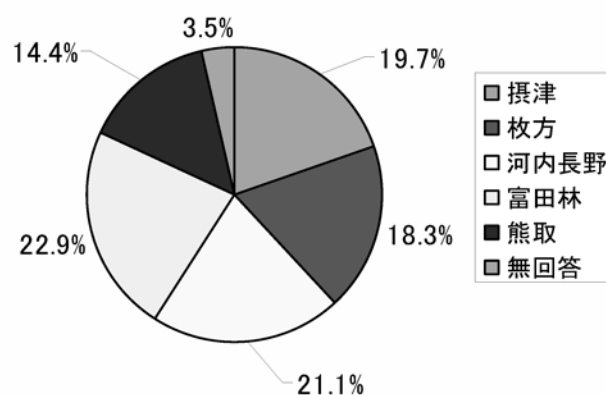


(3) 活動地域

熊取町の人数が若干少ないが、ほぼ20.0%前後という、均等な割合となっている。

図表 2-4 活動地域

項 目	度数	パーセント
摂津市	56	19.7
枚方市	52	18.3
河内長野市	60	21.1
富田林市	65	22.9
熊取町	41	14.4
無回答	10	3.5
合計	284	100.0

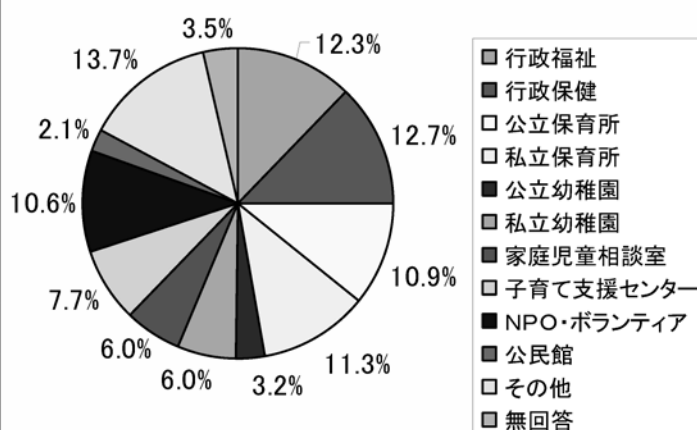


(4) 所属機関・組織

所属機関・組織については、福祉・保健部門を合わせた行政機関が25.0%で最も多い。次いで公立・私立を合わせた保育所が22.2%となっている。「その他」の内訳には、民生委員児童委員会、地区福祉会などが含まれている。

図表 2-5 所属機関・組織

項 目	度数	パーセント
行政福祉	35	12.3
行政保健	36	12.7
公立保育所	31	10.9
私立保育所	32	11.3
公立幼稚園	9	3.2
私立幼稚園	17	6.0
家庭児童相談室	17	6.0
子育て支援センター	22	7.7
NPO・ボランティア	30	10.6
公民館	6	2.1
その他	39	13.7
無回答	10	3.5
合計	284	100.0

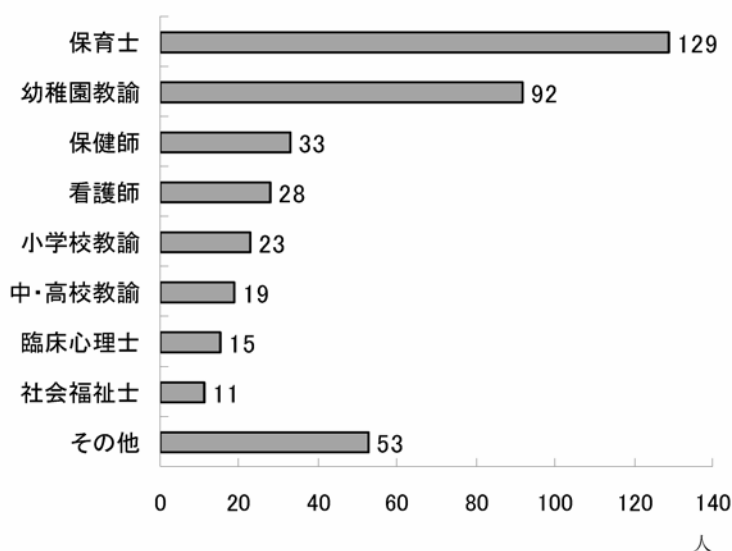


（５）資格

資格・免許の所有について質問をしたところ、１人で複数の資格を所有している場合があるため複数回答となっている。最も多い資格・免許所有者は「保育士」で45.4%、次いで「幼稚園教諭」32.4%となっている。「その他」の内訳には、社会福祉主事、精神保健福祉士、養護教諭などが挙げられる。

図表２－６ 資格

項 目	度数	パーセント
保育士	129	45.4
幼稚園教諭	92	32.4
保健師	33	11.6
看護師	28	9.9
小学校教諭	23	8.1
中・高校教諭	19	6.7
臨床心理士	15	5.3
社会福祉士	11	3.9
その他	53	18.7



２．子育て支援者が「気になる」と感じる項目の調査結果

調査紙の55項目について、「非常によくあてはまる」を6点、「あてはまる」を5点、「ややあてはまる」を4点、「ややあてはまらない」を3点、「あてはまらない」を2点、「まったくあてはまらない」を1点として換算したところ、全項目の平均値は4.32（中央値は3.50）となった。各項目の平均値を高得点順にまとめたものを図表２－７に示す。

平均値が最も高い項目とその値は、「親が精神的に不安定である」で5.11、次いで「子どもに視線を向けていない」で5.02となっている。

最も低い項目は「子どもをお人形のように着飾る」と「小さいときからたくさんの習い事をさせる」で、ともに平均値は3.50であるが、この値は、6件法の中央値に相当している。

これらの結果から、調査対象者は図表２－１の55項目に対して、「非常によくあてはまる」、「あてはまる」、「ややあてはまる」を多く選択して回答しており、図表２－１の55項目を「気になる」と感じる項目としている傾向が強い。

この傾向について、項目全体の信頼性統計量（Cronbachの α 係数）を測定したところ、測定値は0.974となり、図表２－１の55項目全体が、調査対象者が「気になる」と感じる項目として適切なものであることが確認できた。

図表 2-7 子育て支援者が「気になる」と感じる項目についての回答の平均値

項 目	平均値
親が精神的に不安定である	5.11
子どもに視線を向けていない	5.02
親がDVを受けている	4.98
ギャンブルや薬物・お酒等への依存傾向が強い	4.94
子どもの言動、表情、容姿等に急激な変化が見られる	4.93
言葉より先に手や足が出る親	4.91
自己否定されたという被害妄想を抱きやすい親	4.85
親の言動、表情、容姿等に急激な変化が見られる	4.84
経済的に苦しく、生活や子育てに余裕がない	4.77
地域の中で孤立した親子	4.77
支援が必要な状態なのにそれを認めたがらない	4.71
あいさつなど人とのコミュニケーションがうまくとれない親	4.71
親が体調面で不安定である	4.69
よく泣く、笑わないなど子どもの情緒が不安定である	4.63
自分の子がかわいくないと言う	4.63
子どもの発達の遅れを気にしながらも目をそらす	4.56
子どもの服がいつも汚れている	4.55
子どもが泣いていても抱っこしない	4.51
子どもへの言葉がけが乱暴である	4.48
子どもに朝食を食べさせていない	4.47
子どもが親の目を気にしすぎる	4.46
夫または妻の親との関係がうまくいっていない	4.43
わざわざ問題を起こして支援者の対応を試す親	4.41
夫婦関係が上手くいっていない	4.41
夜遅くなっても子どもを寝かしつけない	4.37
人の話を集中して聞けない親	4.35
子どもの体調が悪くても仕事や自分の用事を優先する	4.31
子どもが親の所に行かない	4.31
子どもがかむ、ひっかく、突くなど問題を起こす	4.30
困ったことがあっても自分から相談しない親	4.28
苦情や要望が多い	4.26
家の中が片付けられていない	4.21
父親が子育てに協力的でない	4.19
親同士の交流をもちたがらない	4.18

項 目	平均値
入浴や歯みがきなどの世話が十分でない	4.18
状況に即した臨機応変の対応ができない	4.16
年齢に応じた子どもとの関わり方・遊び方が分からない	4.14
親に自信がなさすぎる	4.13
子どもの発達や環境を気にしすぎる	4.13
連絡なしで欠席する	4.07
子どもに干渉しすぎる	4.07
よい親になることに縛られる	4.06
子どもにアレルギーや発達の心配事がある	4.04
転入や転勤で近所に知り合いがない	4.02
持ってくるもの、行事など忘れる事が多い	3.97
相手に直接話すよりも、メールに頼る	3.95
他人の目を気にしすぎる親	3.95
多胎あるいは年子で親の負担が大きい	3.88
同じ事を何度も確認する親	3.83
子どもをでき愛しすぎる	3.79
日中のかなりの時間を子育て支援機関で過ごす	3.70
場にそぐわない身なりをしている	3.62
主体性に乏しく人に合わせすぎる親	3.61
子どもをお人形のように着飾る	3.50
小さいときからたくさんの習い事をさせる	3.50

3. 属性による分析

(1) 子どもの有無と平均値の比較

各項目の平均値を、調査対象者に子どもがいるかいないかに分けて比較し、有意差が認められた21項目について図表2-8に示す。

すべての項目において、子どものいる調査対象者の平均値が、子どものいない調査対象者の平均値を上回っている。

特に平均値の差が大きい項目として、「親がDVを受けている」（平均値の差：0.60）、「相手に直接話すよりも、メールに頼る」（平均値の差：0.56）、「親の言動、表情、容姿等に急激な変化が見られる」（平均値の差：0.50）などが挙げられる。

なお、図表2-8における有意差の水準はすべて5%である。

図表 2－8 子どもの有無と平均値の比較

項 目	群別	度数	平均値
あいさつなど人とのコミュニケーションが うまくとれない親	有	206	4.80
	無	64	4.44
子どもに視線を向けていない	有	198	5.11
	無	65	4.72
相手に直接話すよりも、メールに頼る	有	196	4.09
	無	64	3.53
子どもの言動、表情、容姿等に急激な変化が 見られる	有	201	5.02
	無	64	4.63
親の言動、表情、容姿等に急激な変化が見られる	有	197	4.96
	無	65	4.46
困ったことがあっても自分から相談しない親	有	200	4.35
	無	63	4.05
親に自信がなさすぎる	有	197	4.21
	無	64	3.91
子どもの発達の遅れを気にしながらも目をそらす	有	199	4.65
	無	62	4.26
地域の中で孤立した親子	有	199	4.88
	無	64	4.42
親がDVを受けている	有	196	5.12
	無	60	4.52
転入や転勤で近所に知り合いがいない	有	196	4.11
	無	62	3.73
自己否定されたという被害妄想を抱きやすい親	有	201	4.94
	無	64	4.59
人の話を集中して聞けない親	有	201	4.45
	無	64	4.06
わざわざ問題を起こして支援者の対応を試す親	有	197	4.53
	無	62	4.05
親同士の交流をもちたがらない	有	200	4.29
	無	63	3.84
同じ事を何度も確認する親	有	200	3.94
	無	64	3.48
子どもをでき愛しすぎる	有	200	3.88
	無	64	3.53
支援が必要な状態なのにそれを認めたがらない	有	200	4.82
	無	64	4.38

項 目	群別	度数	平均値
小さいときからたくさんの習い事をさせる	有	197	3.60
	無	64	3.17
日中のかなりの時間を子育て支援機関で過ごす	有	194	3.79
	無	62	3.42
夫婦関係が上手くいっていない	有	196	4.50
	無	60	4.12

（２）未就学児の養育状況と平均値の比較

各項目の平均値を、調査対象者に未就学児を育てているかいないかに分けて比較し、有意差が認められた５項目について図表２－９に示す。

すべての項目において、未就学児を育てている調査対象者の平均値が、育てていない調査対象者の平均値を上回っている。

なお、図表２－９における有意差の水準はすべて５％である。

図表２－９ 未就学児の養育状況と平均値の比較

項 目	群別	度数	平均値
苦情や要望が多い	している	31	4.68
	していない	170	4.27
場にそぐわない身なりをしている	している	31	4.03
	していない	165	3.60
入浴や歯みがきなどの世話が不十分	している	31	4.58
	していない	167	4.13
子どもをお人形のように着飾る	している	31	4.00
	していない	170	3.51
夜遅くなっても子どもを寝かしつけない	している	30	4.70
	していない	164	4.32

（３）子育ての「つらさ感」、「楽しさ感」の経験と平均値の比較

各項目の平均値を、調査対象者自身の子育ての「つらさ感」と「楽しさ感」の経験に分けて比較し、有意差が認められた８項目について図表２－１０に示す。

そのうち、７項目で子育て経験を「楽しかった」とする調査対象者の平均値が、「つらかった」とする調査対象者の平均値を上回っている。

「他人の目を気にしすぎる親」の項目については、子育て経験を「楽しかった」とする調査対象者の平均値が、「つらかった」とする調査対象者の平均値を下回っている。

すべての項目で、平均値に０.５以上の差がみられたが、特に平均値の差が大きい項目として、「子どもの服が汚れている」（平均値の差：１.１０）が挙げられる。

なお、表 2－10における有意差の水準はすべて 5 %である。

図表 2－10 子育ての「つらさ感」、「楽しさ感」の経験と平均値の比較

項 目	群別	度数	平均値
子どもの言動、表情、容姿等に急激な変化が見られる	楽しかった	140	5.08
	つらかった	13	4.23
子どもが親の所に行かない	楽しかった	141	4.44
	つらかった	13	3.62
親がDVを受けている	楽しかった	136	5.20
	つらかった	13	4.38
子どもの服が汚れている	楽しかった	141	4.72
	つらかった	13	3.62
子どもが泣いてもだっこしない	楽しかった	139	4.61
	つらかった	13	3.77
言葉より先に手や足が出る親	楽しかった	139	5.04
	つらかった	13	4.23
子どもが親の目を気にしすぎる	楽しかった	140	4.56
	つらかった	13	3.85
他人の目を気にしすぎる親	楽しかった	140	3.99
	つらかった	12	4.67

(4) 資格と平均値の比較

各項目の平均値を、調査対象者の資格の有無に分けて比較した結果を図表 2－11に示す。

有意差が認められたのは、「保育士」の 3 項目、「看護師」の 14 項目、「保健師」の 27 項目、「社会福祉士」の 2 項目、「臨床心理士」の 3 項目、「幼稚園教諭」の 13 項目、「小学校教諭」の 6 項目である。

「看護師」、「保健師」、「小学校教諭」の有資格者の平均値は、無資格者の平均値を上回っているのに対して、「保育士」、「幼稚園教諭」の有資格者の平均値が、無資格者の平均値より下回っていることが注目される。

特に、「場にそぐわない身なりをしている」の項目については、「保育士」、「幼稚園教諭」の有資格者の平均値は、中央値より下回っている。

また、「保健師」の資格の有無により、「場にそぐわない身なりをしている」(平均値の差:1.11)、「子どもが泣いていても抱っこしない」(平均値の差:0.91)の項目で、平均値に大きな差が生じている。

なお、図表 2－11における有意差の水準は、表中の平均値が太字のものは0.1%、その他は5%である。

（５）所属機関・組織と平均値の比較

各項目の平均値を、所属機関・組織別に分けて比較した結果を図表 2－12に示す。

有意差が認められたのは「行政福祉部門」の11項目、「行政保健部門」の41項目、「保育所」の13項目、「幼稚園」の14項目、「家庭児童相談室」の2項目、「子育て支援センター」の12項目、「NPO・ボランティア」の14項目である。

「行政福祉部門」、「行政保健部門」、「子育て支援センター」では、所属者の平均値が非所属者の平均値を上回っているのに対して、「保育所」、「幼稚園」、「NPO・ボランティア」では、所属者の平均値は非所属者の平均値より下回っている。

特に、「子どもをでき愛しすぎる」、「小さいときからたくさんの習い事をさせる」の項目では「保育所」の所属者の平均値が、「同じ事を何度も確認する親」、「場にそぐわない身なりをしている」「日中のかなりの時間を子育て支援機関で過ごす」の項目では「幼稚園」の所属者の平均値が、それぞれ中央値より低くなっている。

また、「行政保健部門」への所属の有無により、「場にそぐわない身なりをしている」（平均値の差：1.14）、「自分の子がかわいくないと言う」（平均値の差：0.97）、「子どもが泣いていても抱っこしない」（平均値の差：0.93）、「わざわざ問題を起こして支援者の対応を試す親」（平均値の差：0.90）の項目で、平均値に大きな差が生じている。

なお、図表 2－12における有意差の水準は、表中の平均値が太字のものは0.1%、その他は5%である。

図表 2-11 資格と平均値の比較

	資格有無	保育士		看護師		保健師		社会福祉士		臨床心理士		幼稚園教諭		小学校教諭	
		度数	平均値	度数	平均値	度数	平均値	度数	平均値	度数	平均値	度数	平均値	度数	平均値
子どもに視線を向けていない	有					33	5.39								
	無					230	4.96								
相手に直接話すよりも、メールに頼る	有							11	3.55						
	無							249	3.97						
夫または妻の親との関係がうまくいっていない	有	116	4.25	27	4.81	33	4.85					83	4.19		
	無	140	4.58	229	4.38	223	4.37					173	4.54		
親が体調面で不安定である	有			27	5.11	33	5.36			14	5.14				
	無			238	4.64	232	4.59			251	4.67				
ギャンブルや薬物・お酒等への依存傾向が強い	有					33	5.42			15	5.60				
	無					226	4.87			244	4.90				
経済的に苦しく、生活や子育てに余裕がない	有	123	4.60	27	5.44	33	5.55					89	4.51		
	無	145	4.92	241	4.70	235	4.66					179	4.91		
子どもの言動、表情、容姿等に急激な変化が見られる	有											88	4.63		
	無											174	4.95		
親に自信がなさすぎる	有			26	4.62	33	4.48								
	無			235	4.08	228	4.08								
子どもが親の所に行かない	有			27	4.85	33	5.03								
	無			238	4.25	232	4.21								
多胎あるいは年子で親の負担が大きい	有					33	4.39								
	無					225	3.81								
子どもの発達の遅れを気にしながらも目をそらす	有									15	3.93				
	無									246	4.60				
地域の中で孤立した親子	有													21	5.19
	無													242	4.74
親がDVを受けている	有			27	5.37							85	4.71	21	5.38
	無			229	4.93							171	5.12	235	4.94
転入や転勤で近所に知り合いがいない	有													21	4.48
	無													237	3.97
子どもの服がいつも汚れている	有			27	5.07	33	5.21								
	無			237	4.49	231	4.46								
自己否定されたという被害妄想を抱きやすい親	有					33	5.24					89	4.66		
	無					232	4.80					176	4.95		
子どもが泣いていても抱っこしない	有			27	4.96	33	5.30								
	無			236	4.45	230	4.39								
親が精神的に不安定である	有					33	5.58					89	4.90		
	無					235	5.05					179	5.22		
人の話を集中して聞けない親	有					33	4.73								
	無					232	4.30								
よく泣く、笑わないなど子どもの情緒が不安定である	有					33	5.18								
	無					229	4.55								
わざわざ問題を起こして支援者の対応を試す親	有			27	5.04	33	5.12					85	4.04		
	無			232	4.34	226	4.31					174	4.60		
子どもへの言葉がけが乱暴である	有					33	4.91								
	無					232	4.42								
家の中が片付けられていない	有					33	4.67								
	無					229	4.14								
苦情や要望が多い	有					33	4.64					87	3.99	22	4.64
	無					232	4.21					178	4.40	243	4.23
状況に即した臨機応変の対応ができない	有					33	4.76								
	無					225	4.08								
子どもに干渉すぎる	有					33	4.52					85	3.86		
	無					227	4.00					175	4.17		
言葉より先に手や足が出る親	有					33	5.27								
	無					229	4.86								
子どもがかむ、ひっかく、突くなど問題を起こす	有					33	4.73								
	無					227	4.24								
子どもが親の目を気にしすぎる	有											87	4.15		
	無											177	4.61		
同じ事を何度も確認する親	有					33	4.18								
	無					231	3.77								
子どもをでき愛しすぎる	有											86	3.55		
	無											178	3.91		
持ってくるもの、行事など忘れる事が多い	有			27	4.30										
	無			238	3.93										
自分の子がかわいくないと言う	有			27	5.26	33	5.36								
	無			238	4.56	232	4.53								
場にそぐわない身なりをしている	有	117	3.46	26	4.38	32	4.59					86	3.38		
	無	141	3.74	232	3.53	226	3.48					172	3.73		
日中のかなりの時間を子育て支援機関で過ごす	有							11	4.27					20	4.20
	無							245	3.67					236	3.66
入浴や歯みがきなどの世話が十分でない	有			27	4.78	33	4.82							21	4.67
	無			235	4.11	229	4.09							241	4.14
夫婦関係が上手くいっていない	有			26	4.92	33	4.88					83	4.22		
	無			230	4.35	223	4.34					173	4.50		

*有意差のあるものだけを記述しており、太字が0.1%水準、その他は5%水準である

図表 2-12 所属機関・組織と平均値の比較

	所属機関	行政福祉部門		行政保健部門		保育所		幼稚園		家庭児童相談室		子育て支援センター		NPO・ボランティア	
		度数	平均値	度数	平均値	度数	平均値	度数	平均値	度数	平均値	度数	平均値	度数	平均値
あいさつなど人とのコミュニケーションがうまくとれない親	有													30	4.37
子どもに視線を向けていない	有	35	5.34	35	5.49									240	4.75
相手に直接話すよりも、メールに頼る	有	228	4.96	228	4.94					16	3.25				
夫または妻の親との関係がうまくいっていない	有			36	4.81			24	3.79	244	4.00				
親が体調面で不安定である	有			220	4.37			232	4.50						
ギャンブルや薬物・お酒等への依存傾向が強い	有	35	5.37	36	5.47	58	4.31								
経済的に苦しく、生活や子育てに余裕がない	有	224	4.87	223	4.85	203	5.08			16	5.50				
子どもの言動、表情、容姿等に急激な変化が見られる	有	35	5.23	36	5.47					243	4.90				
親の言動、表情、容姿等に急激な変化が見られる	有	233	4.70	232	4.66										
子どもの発達や環境を気にしすぎる	有	35	5.29	36	5.42							21	4.62		
親に自信がなさすぎる	有	230	4.87	229	4.85							242	4.09		
子どもが親の所に行かない	有	35	5.17	36	5.28										
多胎あるいは年子で親の負担が大きい	有	227	4.79	226	4.77										
子どもの発達の遅れを気にしながらも目をそらす	有			35	4.49										
地域の中で孤立した親子	有			226	4.08										
父親が子育てに協力的でない	有			36	5.08							22	4.91	28	3.89
親がDVを受けている	有			229	4.19							243	4.26	237	4.36
転入や転勤で近所に知り合いがいない	有			35	4.54	56	3.52								
子どもの服がいつも汚れている	有	223	3.78	202	3.99										
自己否定されたという被害妄想を抱きやすい親	有			36	4.97										
子どもが泣いていても抱っこしない	有			225	4.49										
親が精神的に不安定である	有			36	5.19			26	4.15						
人の話を集中して聞けない親	有			227	4.70			237	4.84						
よく泣く、笑わないなど子どもの情緒が不安定である	有			36	4.56			26	3.69						
わざわざ問題を起こして支援者の対応を試す親	有			223	4.13			233	4.25						
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			36	5.50	58	4.60								
家が片付けられていない	有			220	4.90	198	5.09								
苦情や要望が多い	有					57	3.74								
状況に即した臨機応変の対応ができない	有	35	5.03	36	5.28	58	4.21								
子どもが泣いていても抱っこしない	有	229	4.48	228	4.44	206	4.65								
親が精神的に不安定である	有			36	5.31										
よく泣く、笑わないなど子どもの情緒が不安定である	有			229	4.78										
わざわざ問題を起こして支援者の対応を試す親	有			36	5.31			26	4.00			22	4.95	28	3.89
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			227	4.38			237	4.56			241	4.46	235	4.58
子どもが泣いていても抱っこしない	有			36	5.56										
親が精神的に不安定である	有			232	5.04										
よく泣く、笑わないなど子どもの情緒が不安定である	有			36	4.78										
わざわざ問題を起こして支援者の対応を試す親	有			229	4.29										
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			36	5.25							22	5.05	29	4.07
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			226	4.54							240	4.60	233	4.70
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			36	5.19	58	4.02								
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			223	4.29	201	4.53								
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			36	5.00			26	4.04					29	4.10
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			229	4.40			239	4.53					236	4.53
子どもへの言葉がけが乱暴である	有	35	4.57	36	4.78									28	3.61
子どもへの言葉がけが乱暴である	有	227	4.15	226	4.12									234	4.28
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			36	4.81			26	3.85						
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			229	4.18			239	4.31						
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			36	4.75										
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			222	4.07										
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			36	4.58	58	3.79								
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			224	3.99	202	4.15								
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			36	5.42			26	4.46					27	4.48
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			226	4.83			236	4.96					235	4.96
子どもへの言葉がけが乱暴である	有	35	4.83	36	4.83	56	3.84							28	3.75
子どもへの言葉がけが乱暴である	有	225	4.22	224	4.22	204	4.43							232	4.37
子どもへの言葉がけが乱暴である	有														
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			36	4.83	57	4.18							22	4.64
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			228	4.40	207	4.54							241	4.14
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			36	4.39			26	3.38						
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			228	3.74			238	3.87						
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			36	4.17	57	3.40								
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			228	3.73	207	3.90								
子どもへの言葉がけが乱暴である	有	35	5.09	36	5.06										
子どもへの言葉がけが乱暴である	有	229	4.66	228	4.66										
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			36	4.33							22	4.45	28	3.50
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			229	3.91							243	3.93	237	4.03
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			36	5.47	59	4.32					22	5.05	28	3.96
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			229	4.50	206	4.72					243	4.59	237	4.71
子どもへの言葉がけが乱暴である	有					55	3.20					22	4.00		
子どもへの言葉がけが乱暴である	有					206	3.58					239	3.45		
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			35	4.60			26	3.12					27	2.93
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			223	3.46			232	3.67					231	3.70
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			36	4.44										
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			227	3.98										
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			36	4.39			26	3.54			22	4.55		
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			225	3.88			235	4.00			239	3.90		
子どもへの言葉がけが乱暴である	有							26	3.81						
子どもへの言葉がけが乱暴である	有							237	4.37						
子どもへの言葉がけが乱暴である	有							26	3.23						
子どもへの言葉がけが乱暴である	有							230	3.75						
子どもへの言葉がけが乱暴である	有	35	4.60	36	4.86									27	3.59
子どもへの言葉がけが乱暴である	有	227	4.11	226	4.07									235	4.25
子どもへの言葉がけが乱暴である	有														
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			36	4.53			26	3.65						
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			225	4.08			235	4.20						
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			36	5.00			24	3.67						
子どもへの言葉がけが乱暴である	有			220	4.31			232	4.49						
子どもへの言葉がけが乱暴である	有	34	4.68	36	4.69									28	3.93
子どもへの言葉がけが乱暴である	有	223	4.32	221	4.31									229	4.42
子どもへの言葉がけが乱暴である	有													28	3.57
子どもへの言葉がけが乱暴である	有													234	4.13

* 有意差のあるものだけを記述しており、太字が 0.1%水準、その他は 5%水準である

第3章

支援プログラムに関する調査

第3章 支援プログラムに関する調査

第1節 調査の目的と概要

1. 調査の目的

各市町村では、子育て支援者が「気になる」と感じる子育て家庭に対する、様々な支援プログラムが実施されている。しかし、各種の支援プログラムが、このような家庭に対してどれぐらい効果を及ぼすのかについては、統計的に分析・評価されていることは少なく、子育て支援者が、長年の経験に基づく自身の感覚や経験により、判断していることが多い。

このため、支援プログラムの実施効果について、一定の指標を用いて統計的に分析・評価することを目的に、以下のような内容で調査・研究を実施した。

①すでに信頼性や妥当性について検証がなされている評価指標を用いて、支援プログラムの実施前後で効果の差を測定の上、効果に関する分析を行う。

②支援プログラムに関する自由記述の内容にテキストマイニングを実施し、支援プログラムの特徴を把握し分析・評価を行う。

なお、本調査の考察については、第5章で行う。

2. 調査の概要

支援プログラムの参加者を対象に、支援プログラムの実施前後に調査紙を配布し、自記式の回答を求めた。なお、摂津市の「ファンフレンズプログラム」は子ども向けプログラムのため、親にプログラムの内容と趣旨を説明し、回答を求めている。また、河内長野市の「子育て家庭ほっと支援事業」では、参加者が記入できない場合、訪問者が記入している。

参加者への調査紙の配布、回収はプロジェクトメンバーが行った。

それぞれの支援プログラムにおける回収数は図表3-1の通りである。

図表3-1 支援プログラム別の回収数

支援プログラムの名称	実施前 回収数	実施後 回収数
ファンフレンズプログラム（摂津市）	102	77
トリプルPプログラム（枚方市）	15	14
子育て応援講座・気づきのワークショップ（富田林市）	20	17
親子であそぼ（河内長野市）	34	35
子育て家庭ほっと支援事業（河内長野市）	12	15
ノーバディズ・パーフェクトプログラム（熊取町）	9	9
親学習プログラム（熊取町）	7	7

3. 支援プログラムの効果を測定する項目の作成と分析方法

(1) 項目の作成

支援プログラムの効果を統計的に測定する指標について、プロジェクトメンバーで検討を行った結果、すでに信頼性や妥当性についての検証がなされている牧野¹⁾が作成した育児不安尺度を用いることとした。図表3-2のように、育児についてポジティブな意識を尋ねる6項目と、図表3-3のように、育児についてネガティブな意識を尋ねる8項目の合計14項目を質問項目として、支援プログラムの実施前後で、参加者に4件法（あてはまる、ややあてはまる、あまりあてはまらない、あてはまらない）で質問した。

その他、性別、年齢、職業、同居者、子どもの年齢、現住所での居住期間等についても質問した。

また、支援プログラム実施後には、支援プログラムの良かった点や改善してほしい点、支援プログラムに参加することで親や子どもの考えや行動にどのような変化が起きたのかについて、自由記述で回答を求めた。

図表3-2 育児についてのポジティブな意識を尋ねる項目

1	朝、目ざめがさわやかである
2	毎日、はりつめた緊張感がある
3	生活にゆとりを感じる
4	自分は子どもをうまく育てていると思う
5	子どもは結構一人で育っていくものだと思う
6	育児によって自分が成長していると感じられる

図表3-3 育児についてのネガティブな意識を尋ねる項目

1	毎日くたくたに疲れる
2	考えごとがおっくうでいやになる
3	子どもがわずらわしくてイライラしてしまう
4	子どものことで、どうしたらよいかわからなくなることがある
5	子どもをおいて外出するのは心配で仕方がない
6	自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう
7	毎日毎日、同じことのくり返ししかしていないと思う
8	子どもを育てるためにがまんばかりしていると思う

1) 牧野カツコ「乳幼児をもつ母親の生活と（育児不安）」家庭教育研究3、1982、p 34-56

（２）分析方法

１）効果測定

図表３－２の６項目については、「あてはまる」を１点、「ややあてはまる」を２点、「あまりあてはまらない」を３点、「あてはまらない」を４点として換算し、図表３－３の８項目については、「あてはまる」を４点、「ややあてはまる」を３点、「あまりあてはまらない」を２点、「あてはまらない」を１点として換算し、合計を育児不安感得点とした。

支援プログラムごとに、育児不安感得点と各項目における回答の平均値について、実施前と実施後に関するｔ検定を行い、効果を測定した。なお、分析には、支援プログラムの実施前後の両方ともに回答している参加者のデータのみを採用した。

２）自由記述にみる支援プログラムの特徴

調査紙の自由記述欄の「よかった点」に記述された内容を分析することにより、支援プログラムの特徴を捉えるとともに評価を行う。そのために、次の２つの方法から分析する。

①自由記述の内容を要約して文章化し、プログラムが参加者にどのように受け止められていたかを捉える。

②SPSS Text Analysis for Surveys を使用して、自由記述に記載されているすべての文章を対象に、テキストマイニングを行い、その結果をWebグラフとして視覚化し、自由記述にどのような内容が多く記載されたかを分析する。

Webグラフでは、各ノード（グラフ中の●）はグループ化された言葉（カテゴリ）の個数を表わし、ノードが大きく表示されるほど、記述された内容の中にそのカテゴリの個数が多いことを示す。また、カテゴリを結ぶ線の太さは、記述された内容の中に共通してあるカテゴリの個数を表わし、線が太く表示されるほど、記述された内容の中にこれらのカテゴリが多いことがわかる。

なお、分析には、支援プログラム実施後に記述のあるすべてのデータを採用した。

第2節 支援プログラムの概要と調査結果

以下では、予め、プロジェクトメンバーが設定した、支援プログラムの実施場所や期間等の概要のほか、プログラムを実施した成果や課題などの質問項目について、調査研究チームが取りまとめた内容を記載している。また、プログラムごとに、前節で実施した調査結果についてもあわせて記載している。

1. 摂津市 ファンフレンズプログラム

(1) 概要

「ファンフレンズプログラム」は、困難に対処し立ち直る力を意味する“レジリエンス”を子どもに養うことを目的に、オーストラリアで開発された子ども向けのプログラムであり、子どもが生活の浮き沈みに上手に対応し、将来の生活に役立つようなスキルを身につけることを支援するプログラムである。

1) 実施場所

〔ファシリテーター関係〕

- ・フレンズ研修会、養成講座、フォローアップ研修：男女共同参画センター
- ・ファシリテーター研修（プログラム実施後）：市庁舎第2会議室

〔保護者関係〕

- ・保護者説明会、保護者向け研修：市立せつつ幼稚園

〔子ども関係〕

- ・プログラム：摂津市総合子育て支援センター保育所（①②）、市立鳥飼保育所（③）、市立せつつ幼稚園（④⑤⑥）

2) 実施期間

〔ファシリテーター関係〕

- ・フレンズ研修会：平成21年10月14日
- ・養成講座：平成21年11月11日、11月18日
- ・フォローアップ研修：平成21年11月20日、11月21日
- ・ファシリテーター研修（プログラム実施後）：平成22年3月3日

〔保護者関係〕

- ・保護者説明会：平成21年11月12日
- ・保護者向け研修：平成21年12月15日、12月16日

〔子ども関係〕

- ・プログラム：①平成21年12月8日～平成22年2月9日
②平成21年12月9日～平成22年2月9日

③平成21年11月25日～平成22年2月3日

④平成21年11月24日～平成22年1月26日

⑤平成21年11月25日～平成22年2月3日

⑥平成21年12月22日～平成22年2月23日

3) 対象者及び対象者数

- ・フレンズ研修会：公私立保育所職員、幼稚園教諭、小学校教諭
- ・養成講座：公私立保育所保育士 14名、地域子育て支援センター保育士 1名
こども育成課保育士 1名、公立幼稚園教諭 3名、小学校支援教室教諭 3名
- ・保護者説明会：幼稚園保護者 約90名
- ・保護者向け研修（両日で）：幼稚園保護者 約70名
- ・プログラム：① 5歳児30名、② 4歳児29名、③ 5歳児22名、④⑤ 5歳児36名、⑥ 5歳児20名

4) 講師又は実施者の概要

- ・フレンズ講習会：トレーナー 1名
- ・養成講座：トレーナー 2名
- ・保育者講習会：トレーナー 1名
- ・実施者：トレーナー 3名、養成講座修了者 22名、ファシリテーター 3名
コーディネーター 1名

5) 実施目的

就学前の子どもの行動や情緒の問題は、適切に対応しないと集団不適應や非行など深刻な問題に発展するといわれている。一方で今、学校や幼稚園、保育所の現場では、理解に苦しむ行動を取る子どもの対応に追われ、市の相談機関にもそうした子どもの相談が次々と寄せられている状態である。

ファンフレンズプログラムは、子どもが困難や不安に出会ったとき効果的に対応する、生涯にわたって使えるスキルを身につけることを支援するプログラムである。そこで、日頃の保育の中に本プログラムを取り入れ、ティーチャーズパワーを最大限に活用し、子どもの損なわれた自尊感情を高め、レジリエンス（回復力）をもたらし、社会性を高めることによって、子どもの情緒不安や問題行動を軽減し、より深刻になることを防ぐことができる。

6) 実施内容

ファンフレンズの言葉が意味するものは、次のとおりである。

F フィーリング 自分の感情に気づく

R リラックス

I I can!

E いいプランを見つけよう

N ナウ 自分にほうび!

D ドウ 練習するよ

S スマイル どんな時も対処できるよ

また、次の10セッションのプログラムで構成されており、各セッションは1回45分～60分で行う。

・セッション1 「家族とわたし・ぼく」

お互いを知り、一緒に活動する。違いを理解し、認め合うゲーム。シェアする。

・セッション2 「自分の気持ちを理解する」

いろいろな気持ちを理解する。ロールプレイで気持ちを表す。いやな気持ちとさよならする。

・セッション3 「人の気持ちを理解する」

人の気持ちに気づく。誰かの役に立つのはいい気持ち。

・セッション4 「体が出すヒントを理解する」

体がだすサインに気づく。ゆっくり呼吸するミルクシェイク呼吸法を体得する。リラックスするゲームを行う。

・セッション5 「赤と緑の考え方ー人はいろいろな考えがあってよいー」

自分が前向きになるのに役に立たない「赤」の考えはストップ。役に立つ「緑」の考えはゴー。

・セッション6 「緑の考えを大きくし、赤の考えを小さくする」

「赤」の考えと「緑」の考えについて理解を深める。役に立たない「赤」の考えを「緑」にかえる。

・セッション7 「ハッピーステップを登るのはみんなできるよ」

どうするのか学ぶ。小さなステップを助けてもらいながら登る。

・セッション8 「家族、幼稚園・保育所、近所、友達」

ロールモデルをさがす。モデリング、エンパワー、アイデンティティ。

・セッション9 「自分の周りにおける愛情と友情」

助け合い。ひとりじゃないよ。

・セッション10「修了のお祝い」 エピローグ

修了を祝う。

※プログラム終了後は、実際の保育活動の中で展開する。

プログラム実施前後等にアセスメントを実施し、効果を測定し、可能であれば、1年後等に追跡調査し、その効果もみていきたい。

なお、親が子どもをサポートする方法や、子どもへの接し方について学ぶため、本プログラムを保育現場等で実施する前に、親向けの研修会を実施した。

7) 参加者の申し込み方法

ファンフレンズは、すべての子どもを対象に実施することが基本であり、今回は実施可能な保育所2ヵ所を選定した。

幼稚園については、30人のグループをつくるため、事前に保護者説明会を開いて、希望者から申し込みを募った。

8) その他特記事項

今回初めて、ファンフレンズプログラムに取り組んだ。本プログラムの実施にあたって、教育と福祉、公立と民間が相互に連携したことにより、短期間の内に事業が実施できたことが何よりの励みになった。

なお、本プログラムの実施の様子を、市広報により市民に紹介した。

(2) 成果と課題

1) 物理的条件（場所、実施期間、対象者人数など）について

プログラムのスケジュールが非常に短期間であったため、実施期間が年末年始を挟み、保育所や幼稚園の行事とも重なり、調整が大変であった。また、インフルエンザの時期とも重なって、休みの子どもへのフォローもあり、大変な面があった。しかし、各保育所や幼稚園の協力で、無事プログラムを終了することができた。次回実施する時は保育の行事等を配慮できる期間にしたい。

対象者人数については、当初幼稚園では1グループ30人の募集予定であったが、保護者説明会を実施したところ、年長クラス92人中72人の申し込みがあり、結局全員に実施することになった。(元々、すべての子どもを対象としたプログラムであるので、全員に実施できたことは非常に良かった。)

2) 対象者の設定について（募集の方法、メンバーの構成など）

今回はファシリテーター養成講座から、プログラム実施まで時間が短かったため、実施場所をプログラム実施に協力していただける3ヵ所の保育所、幼稚園に限定した。事前の保護者説明会を実施できたのは、保護者が参加できる機会のあった幼稚園のみであった。事前の説明会があった方が、保護者のプログラムへの参加意識は大きかったと思われる。

ファシリテーター養成講座については、プログラムを実施した保育所や幼稚園では、複数の

先生に受講してもらった。

当初、対象者を5歳児に限定していたが、保育所で4歳児に実施したところ、5歳児と遜色なく実施することができたため、4歳児で第1回目を実施し、次年度にも同じプログラムを実施すると、より効果が上がるのではないかという意見もファシリテーターから出ていた。

ファンフレンズを体験した親から、小学生の子どもにも受けさせたいという要望が多数寄せられたため、今後は、小中学生にも実施できたら良いと思う。

3) 支援者、講師について（人数、人材の育成、報酬など）

プログラム実施にあたっては、全体活動とグループ活動を行う。1グループは6人位で構成するので、そのためには、1カ所に5～6人のファシリテーターが必要となる。

今回、本プログラムを実施するために、他の学校や保育所、幼稚園の先生が実施場所に集まり、協力してくれた。しかし、今後もこのプログラムを実施するとなると、他所からこれほど多くのファシリテーターに集まってもらうことは困難であることから、それぞれの施設で数人のファシリテーターを養成することが可能であれば、行事などを調整しながら、普段でも実施可能になると思われる。

また、プログラムの実施後に、年1～2回研修会を開催し、ファシリテーターがプログラムをより深く理解したり、プログラムの工夫を話しあったりすることが理想である。

4) 支援プログラムの内容に関して

ファシリテーターからは、「海外で考案されたものなので、多少違和感を感じる部分もあった。（例えば、体温計を口に挟んで熱を測っている絵が、脇で測ることが多い子どもたちにとっては、コアラのお父さんがタバコを寝ながら吸っているように見えた等）」との意見もあった。

しかし、マイナスの考えをプラスの考えに変えることや、ミルクシェイク呼吸法など感情のコントロールを覚えたり、一人ではないということを意識させるなど、今後も役立つ内容のものになっていて、大変良かったとのことであった。

また、養成講座を受けただけでは想像できなかったドラマのような様々な出来事が、プログラムの実施中に起き、プログラムの多様な側面に触れた思いがした。

5) 支援プログラムを実施するにあたっての各組織、各機関との連携について

養成講座実施前の研修会には、各機関から多数の参加があった。養成講座も、始めは保育所のみで行う予定であったが、小学校・幼稚園からの受講希望があり、教育委員会からもプログラム実施にあたって職員の派遣などの協力をもらった。

プログラムは業務時間内に毎週1回、8週間にわたって実施したが、他の幼稚園や保育所に outward 許可を各機関が快諾し、協力していただいたことで、小学校・公私立保育所・公立幼稚園と連携し、遂行することができた。

6) 利用者評価（利用者アンケート、苦情、問い合わせ等も含む）の把握とその後の扱いについて

「子どもに、自身の置かれた環境に適応して生きていく能力を身につけさせていかなければならないと思うので、それをサポートするためのファシリテーターの養成は、引き続き実施することが望ましい」「この資格を取得させていただき、今後の仕事に生かさなければならないと感じている」との声が受講ファシリテーターからあった。

今回、実施期間が短期間であり、保護者への研修を十分に実施できなかった。そのため、保護者の中には「プログラム内容は、子どもの話と教材から理解できたが、もっと内容を知っていれば適切な援助ができたのと思う」という意見があった。

プログラム実施終了時、ファンフレンズの先生たちと別れるのを惜しんで泣いている子どもや、「楽しかった」と先生に手紙をくれた子どももいた。また、「自分のお父さんが夜になるとお酒を飲んで汗をかいて怒る。緑の考えにどうしたらなるの?」との問いを手紙に書いてきた子どももいた。子どもの多くの悩みに、今後どう大人が応えていけるのかは大きな宿題である。

7) 成果

- ・遊びの中で子どもがけんかになった時、「ぼくは〇〇な気持ちや」とか「それは赤の考えやで。緑にかえようよ」と互いにフレンズプログラムを使って仲なおりをするという風に日頃の生活にとり入れることができてきた。
- ・子どもが相手の気持ちを考えるようになったと、親から多くのよろこびの声が寄せられた。
- ・私立保育所や小学校でも次年度の実施が考えられるなど、市の中での取り組みが着実に広がりつつある。
- ・短期間にもかかわらず教育部門と福祉部門がすぐに連携して事業を実施できたことは、日頃の担当者間の密接なネットワーク活動の成果だと思われる。

（３）支援プログラムの調査結果

１）支援プログラムの効果測定結果

「子どもがわずらわしくてイライラしてしまう」「子どもは結構一人で育っていくものだと思う」で有意差が見られた。「子どもがわずらわしくてイライラしてしまう」では、実施後に平均値が下がり、「子どもは結構一人で育っていくものだと思う」では、実施後に平均値が上がった。

図表３－４ 支援プログラム実施前後の平均値の比較

質問項目		度数	平均値	
毎日くたくたに疲れる	実施	59	2.49	
	実施	59	2.53	
朝、目ざめがさわやかである	実施	59	2.47	
	実施	59	2.49	
考えごとがおっくうでいやになる	実施	58	2.17	
	実施	58	2.14	
毎日、はりつめた緊張感がある	実施	57	1.70	
	実施	57	1.79	
生活にゆとりを感じる	実施	59	2.29	
	実施	59	2.41	
子どもがわずらわしくてイライラしてしまう	実施	56	2.05	*
	実施	56	1.88	
自分は子どもをうまく育てていると思う	実施	57	2.35	
	実施	57	2.35	
子どものことで、どうしたらよいかわからなくなることがある	実施	59	2.36	
	実施	59	2.41	
子どもは結構一人で育っていくものだと思う	実施	59	2.15	*
	実施	59	2.42	
子どもをおいて外出するのは心配で仕方がない	実施	59	3.05	
	実施	59	2.93	
自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう	実施	58	1.72	
	実施	58	1.60	
育児によって自分が成長していると感じられる	実施	59	3.08	
	実施	59	3.17	
毎日毎日、同じことのくり返ししかしていないと思う	実施	58	2.14	
	実施	58	2.22	
子どもを育てるためにがまんばかりしていると思う	実施	58	1.86	
	実施	58	1.97	
合計得点	実施	52	34.06	
	実施	52	33.23	

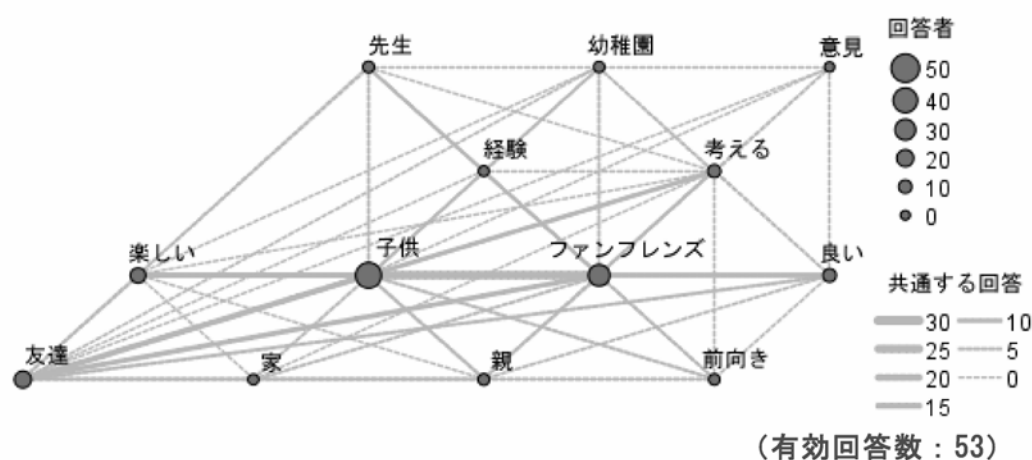
* 5 %水準の有意差あり

2) 自由記述にみる支援プログラムの特徴

子どもの姿勢が「前向き」になり、「さらに積極的」になった。そして、「他のクラスのお友達」が増えて「色々な友達と遊ぶ」ようになり、「自分の気持ちの伝え方が上手」になって、「子どもの笑顔が多くなり、いろんなことを報告してくれるようになった」と、社会性やコミュニケーション力に関する記載があった。また、「気持ちを切り替える方法」を具体的に教わり、「友だちみんなも赤と緑を理解して、気持ちを変えている」「困難にぶつかった時、それを克服する力を身に付けた」「思い通りにならなくてもすぐに泣かなくなった」などと、自己コントロールできるようになったことが挙げられた。「人のいい所をたくさんみつけている」「子どもが自分のことも人のことも考えてくれるようになった」「家族みんなで人の気持ちを考えるようになった」と、子どもの思いやりの気持ちは家族にまで影響を与えている。

プログラムについては、「友達と一緒に楽しみながらの自然体の勉強会」であり、「子どもが考える時間をもてた」「幼稚園の保育とは違う事を体験できた」の他、「魅力的なプログラム」であるため、「親や小学生の兄弟にもぜひ実践」して欲しいとの希望もあり、好評であったことがうかがえる。

図表 3-5 テキストマイニングによるWebグラフ



2. 枚方市 トリプルPプログラム

(1) 概要

「トリプルPプログラム」は、「前向き子育てプログラム」と訳されるオーストラリアで開発された親向けの参加体験型の学習プログラムであり、子どもの問題を親がどのように捉えて、どんな関わりをもったら子どもの問題が改善されるのか、子どもの発達が上手に促されるのか、それぞれの親子に合わせた方法に変えていくための考え方や具体的なスキルを学ぶプログラムである。

枚方市においては、次の2種類に分けて実施した。

- ①今年度新規でプログラムを実施（2グループ）
- ②昨年度プログラムを実施したグループ（4グループ）の交流会

1) 実施場所

- ①枚方市家庭児童相談所 面接室及びプレイルーム
- ②枚方市ラポールひらかた 大会議室

2) 実施期間

- ①平成21年11月9日～12月21日
午前グループ：10時～12時 午後グループ：13時30分～15時30分
- ②平成21年12月8日 10時～12時

3) 対象者及び対象者数

- ①保育所が主催する地域交流などに参加する幼児を持つ親
- ②昨年度実施したトリプルPを受講した親

4) 講師又は実施者の概要

- ①②トリプルPのファシリテーターとして、NPO法人タドル和歌山のスタッフを招いた。

5) 実施目的

- ①幼児を持つ親を対象にプログラムを実施し、親子関係をより円滑にしていくことにつなげる。
- ②昨年度実施したトリプルPを受講した親の交流会を開催し、1年後の状況を把握する。

6) 実施内容

- ①幼児を持つ親を対象にグループによるプログラムを実施し、具体的で前向きな子育てを学ぶ。
(全8セッション、うち3回の電話セッションを含む。)

- ②昨年度実施したトリプルPを受講した親の交流会を開催し、ファシリテーターのワークショップ及びグループ間交流を行い、プログラムの有効性について話し合う。

7) 参加者の申し込み方法

- ①地域の公立保育所・民間保育園等を通じて案内文を配布し、FAX・郵送により申し込みを募った。
- ②昨年度実施したトリプルPを受講した親に対して案内文を送付し、FAX・郵送により申し込みを募った。

8) その他特記事項

- ①午前グループは参加者10名、午後グループは参加者4名であった。
- ②4グループ38名に案内を送付し、参加者は20名であった。
- いずれも参加費は無料である。
- なお、プログラムに参加する市の職員をファシリテーターとして養成した。

(2) 成果と課題

1) 物理的条件（場所、実施期間、対象者人数など）について

- ①幼児を持つ親を対象にしたが、幼稚園や小学校低学年の兄弟がいることから、午後のグループに参加者が少なく、バランスをとることが難しかった。

2) 対象者の設定について（募集の方法、メンバーの構成など）

- ①事業の周知を行うにあたって、広くPRをし過ぎると多数が参加できないことになるため、広報の加減が難しかった。
- また、プログラムを受講することが望まれる親に対して、保育所が直接勧めることは、親との関係性を配慮すると容易ではなく、案内文の配布方法に配慮を要した。

3) 支援プログラムを実施するにあたっての各組織、各機関との連携について

- ①保育担当者との打ち合わせの時間や、プログラム終了後に情報を共有する時間が十分に持てなかったことから、丁寧に話し合いをする時間が十分にあれば、効果についてもっと共有化できたと思う。

4) 利用者評価（利用者アンケート、苦情、問い合わせ等も含む）の把握とその後の扱いについて

- ①今回の調査とトリプルPのアンケートの両方を実施したため、アンケートの調査項目が多く、最後まで記入してもらえずに無効となる評価項目がいくつかあった。

②アンケートに自由記述欄を設けなかったため、自ら記入してもらった人以外は、感想を十分に得ることができなかった。

5) 成果

- ・親が漠然と抱えている子育ての行き詰まりや何気なく行っている子育て方法について、関係性や要因を整理できるプログラムであったため、日頃の子育てを見直し、グループ内で自分の子育てを客観的に話し合える機会となった。また、具体的なスキルを学ぶ機会にもなった。
- ・毎回、学んだことを実践して報告しあうことで、身に付けたスキルの確認ができて自信につながった。また他の人の効果的な方法を知ることができ、スキルの向上にもつながった。
- ・具体的なスキルを学び、グループで励ましあいながら実践していく中で、回を重ねるごとに表情が良くなっていく姿が、印象的であった。
- ・保育付きの講座であったことから、子どもたちの保育の中で、いつも一緒にいる親と離れることや少人数のグループ保育を通して、親への思いを認識したり、終わったら迎えに来てくれるといった見通しをもてるようになり、子どもの成長にもつながった。
- ・昨年度プログラムを実施したグループの交流会では、受講者側から「親側が少しの工夫をすれば子どもの反応も変化することを実感したことで、子育てを主体的に前向きに行えるようになった」ことが語られていた。
- ・受講後すぐには効果を実感できなかった人も、プログラム内容を振り返ることで、学んだスキルを生活の中で使用していることに気づき、即効性がない人にも、緩やかに定着することもわかった。

（３）支援プログラムの調査結果

１）支援プログラムの効果測定結果

「子どもがわずらわしくてイライラしてしまう」で有意差が見られ、実施後に平均値が下がった。（実施前後の比較は、①のみ）

図表３－６ 支援プログラム実施前後の平均値の比較

質問項目		度数	平均値
毎日くたくたに疲れる	実施前	13	2.69
	実施後	13	2.69
朝、目ざめがさわやかである	実施前	13	2.23
	実施後	13	2.08
考えごとがおっくうでいやになる	実施前	12	2.75
	実施後	12	2.67
毎日、はりつめた緊張感がある	実施前	13	2.38
	実施後	13	2.38
生活にゆとりを感じる	実施前	12	1.92
	実施後	12	2.25
子どもがわずらわしくてイライラしてしまう	実施前	13	3.00
	実施後	13	2.31
自分は子どもをうまく育てていると思う	実施前	12	1.92
	実施後	12	1.92
子どものことで、どうしたらよいかわからなくなることがある	実施前	13	3.23
	実施後	13	2.85
子どもは結構一人で育っていくものだと思う	実施前	13	2.31
	実施後	13	2.23
子どもをおいて外出するのは心配で仕方がない	実施前	13	2.85
	実施後	13	2.85
自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう	実施前	13	2.31
	実施後	13	2.62
育児によって自分が成長していると感じられる	実施前	13	2.54
	実施後	13	3.15
毎日毎日、同じことのくり返ししかしていないと思う	実施前	13	2.92
	実施後	13	2.54
子どもを育てるためにがまんばかりしていると思う	実施前	12	2.75
	実施後	12	2.33
合計得点	実施前	10	40.90
	実施後	10	38.70

*

* 5%水準の有意差あり

2) 自由記述にみる支援プログラムの特徴

「自分を冷静な状態」に保ち、「子育てを振り返り、考える」ことができるようになった。また、「他の人の意見、思い、子育てへの取り組み方」を聞き、「みんな同じだと思って安心」し、「ゆとりをもって子育てできそう」との感想がみられた。

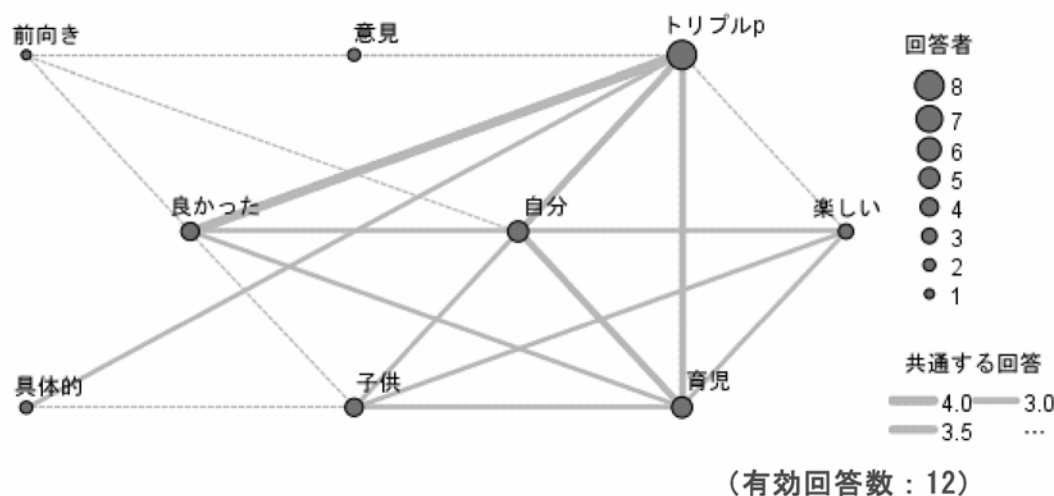
「具体的な対応、実践的な取り組み方」を知ることにより、「叱り方、ほめ方」などが上手くできるようになり、それを「解決、発展」させて「子どもと楽しく過ごせる時間」が増えた。

学びを実践して、今まで「なかなか行動が出来なかったが、改めて実行できた」と、行動を通して、「子育てが楽しくなり、自分も楽」と思えるようになり、「育児に自信」が持てるようになった。

さらにこの体験から、「前向きな気持ち」になり、「実際にストレスが減り、子どもに目を向け親子共に穏やかになった」という記載がみられた。

子どもは別室にて保育されるため、子どもと離れることにより、親は集中してプログラムを受けることができ、しかも「少人数でみんながゆっくり発言、質問」できるという密度の濃い学びの環境により、満足感を得ている様子がうかがえる。

図表 3-7 テキストマイニングによるWebグラフ



3. 富田林市 子育て応援講座 ～気づきのワークショップ～

(1) 概要

親がそれぞれの子育て体験をグループワークで語るとともに、親自身の自己肯定感、自尊感情を高めることを目的として、NPO法人ふらっとスペース金剛が富田林市と共催して実施するプログラムである。

1) 実施場所

富田林市消防署 視聴覚室と講堂

2) 実施期間

①平成21年11月26日、11月27日（2日間連続で実施）

②平成21年12月7日、12月14日（1週間空けて実施）

3) 対象者及び対象者数

①②とも、つどいの広場事業の利用者（おもに0歳～3歳の子どもを持つ親）と富田林市広報を見て希望した親を対象。

①の講座参加者数は、親11人、保育こども数は13人。

②の講座参加者数は、親10人、保育こども数は13人。

4) 講師又は実施者の概要

富田林市子育て支援課職員2名。講座のファシリテーターは、NPO法人ふらっとスペース金剛スタッフ2名。保育スタッフ4名。

5) 実施目的

- ・保育付きの講座として実施し、親が子どもと少し離れ、自分の時間を持つことでリフレッシュを図る。
- ・親自身の肯定感、自尊感情を高める。
- ・それぞれの子育て経験を語ることで、多様な子育てパターンを知る。
- ・孤立の予防となる子育ての仲間づくりをする。

6) 実施内容

1回2時間の講座を2回実施する連続講座である。

- ・1回目 テーマ「まずは自分を抱きしめて」

まず最初にプレアンケートを実施した上で、ありのままの自分を受けとめるワークショップをグループワークで行う。最後に、その日の振り返りを全員で共有する。

・ 2回目 テーマ「自分とこどもとうまくつきあう」

“アイ・メッセージ”を使って、コミュニケーションの取り方の練習をロールプレイで行う。また、子育て支援情報として、富田林市子育て支援課から資料を配布し、説明する。最後に、その日の振り返りを全員で共有した上で、ポストアンケートを実施する。

7) 参加者の申し込み方法

募集期間を決めて、富田林市広報、NPO法人ふらっとスペース金剛のニュース、ホームページに掲載し、また、つどいの広場事業参加者に広く参加を呼びかけ抽選を行った。

(2) 成果と課題

1) 物理的条件（場所、実施期間、対象者人数など）について

富田林市と共催で実施したことによって、消防署という公の場所を確保できたことや、講座参加者にとっても、内容について公共性が高く、あらかじめ安心して参加できたという効果があった。また、対象者数は10人程度と少数だったので、グループワークで話す内容が濃くなって良かった。

2) 対象者の設定について（募集の方法、メンバーの構成など）

広報に掲載して広く対象者に案内することができたのは良かった。

子育て支援者からみて「気になる」と感じる子育て家庭に参加してもらえるよう、広く広報を行う一方、つどいの広場の中で参加をなにげなく呼びかけたり、抽選をするなどの工夫をした。

小学生の親が参加していたが、募集の段階で0歳から3歳の子どもを持つ親に限定するなど、対象者の幅をもう少し絞り込んでも良かったという課題が残る。

3) 支援者、講師について（人数、人材の育成、報酬など）

普段、つどいの広場事業で関わっているスタッフと、本プログラムのファシリテーターとは別の人の方が、講座参加者が安心して別の一面を気兼ねなく話せるのではないかという課題を発見した。一方で、顔見知りのスタッフが会場にいるという安心感もあったようである。

ファシリテーターの養成講座を実施するなどして、人材を確保することが課題である。保育を実施する費用も必要である。

4) 支援プログラムの内容に関して

自分のことについて深く掘り下げたり、話をしたりするので、守秘義務等のルール設定や、知り合いを同じグループに配置しないような配慮がいる。また、参加メンバーに応じてプログラム内容を柔軟に進めていく必要があるので、その場に対応できるファシリテートの技能が必

要になる。

5) 支援プログラムを実施するにあたっての各組織、各機関との連携について

富田林市が実施している子育て支援事業「つどいの広場事業」と、運営や役割分担などの面においてうまく連携がとれた。また、具体的な支援が必要なケースを、適切な行政制度につなぐことができた。講座を通して「つどいの広場事業」をはじめ富田林市の子育て支援制度の案内ができたので、講座実施後のフォローにつなぐことができる。単発的な講座で終わるのではなく、継続的に講座を実施していき、連携を図っていく必要性がある。

6) 利用者評価（利用者アンケート、苦情、問い合わせ等も含む）の把握とその後の扱いについて

子どもの体調に左右されるので、小さい子どもを持つ親にとって2回連続で参加するのはプレッシャーが大きいとの意見があった。

7) 成果

「まずは自分を抱きしめて」というテーマどおり、自分を見つめ直す機会になった、という声が多かった。また、自分ではちゃんと伝えていると思っていたことが、実は本当に言いたいことを伝えられていなかったということに気づいた参加者も多かった。私だけできていないと思っていたが、同じような悩みを周りの人も持っていると感じられたという感想もあり、そのことが仲間づくりのきっかけになった。

（３）支援プログラムの調査結果

１）支援プログラムの効果測定結果

「自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう」で有意差がみられ、実施後に平均値が上がった。これはプログラムの特性として、自分をみつめなおすことを参加者に求めたためと思われる。

図表３－８ 支援プログラム実施前後の平均値の比較

質問項目		度数	平均値
毎日くたくたに疲れる	実施前	14	2.86
	実施後	14	2.64
朝、目ざめがさわやかである	実施前	14	2.29
	実施後	14	2.36
考えごとがおっくうでいやになる	実施前	13	2.54
	実施後	13	2.46
毎日、はりつめた緊張感がある	実施前	14	2.00
	実施後	14	2.00
生活にゆとりを感じる	実施前	14	2.21
	実施後	14	2.29
子どもがわずらわしくてイライラしてしまう	実施前	13	2.54
	実施後	13	2.54
自分は子どもをうまく育てていると思う	実施前	14	2.21
	実施後	14	2.29
子どものことで、どうしたらよいかわからなくなることがある	実施前	14	2.79
	実施後	14	2.64
子どもは結構一人で育っていくものだと思う	実施前	14	2.43
	実施後	14	2.64
子どもをおいて外出するのは心配で仕方がない	実施前	14	2.71
	実施後	14	2.71
自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう	実施前	14	1.86
	実施後	14	2.36
育児によって自分が成長していると感じられる	実施前	14	3.21
	実施後	14	3.29
毎日毎日、同じことのくり返ししかしていないと思う	実施前	14	2.50
	実施後	14	2.86
子どもを育てるためにがまんばかりしていると思う	実施前	14	2.43
	実施後	14	2.71
合計得点	実施前	13	36.15
	実施後	13	36.54

*

* 5 %水準の有意差あり

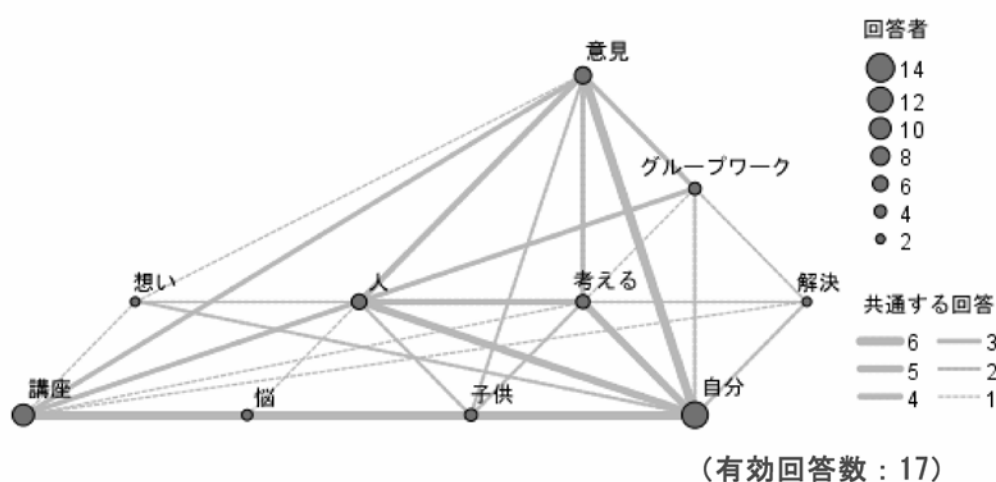
2) 自由記述にみる支援プログラムの特徴

保育付き講座ということにより、安心して子どもを預けることができ、母子分離の状態自分自身の時間を持ち、自分自身を見つめて考え、多くの気づきを得ていたことが挙げられた。

プログラムに関しては、少人数制の良さとともに、「テーマがシンプルなため、じっくりロールプレイして意見を言える」こと、「具体的な内容ですぐに実践」できること、「他の方の考え方や生き方を聞くことが勉強」になり、「悩んでいるのは自分だけではない」と、一人ではないことを認識している様子がみられた。また、「コミュニケーションができてよかった」「自分を客観的に見ることが出来、自分を再認識できた」などの他、グループワークを通して、「みなが人のことを解決しようと一生懸命考えて、いい雰囲気」の中で、じっくりと考えられたことへの記載がみられた。

「自分の良いところを認め、ほめることが大切」「自分の気持ちを大切にしよう」など、自尊感情の芽生えとともに、「言ってはいけないと思っていたことは実は言っていたいいことだった」「我慢してあきらめていたことを、前向きに考えられるようになった」など、自分の心を解放し、意欲的な姿勢に転ずる様子がうかがえる。

図表 3-9 テキストマイニングによるWebグラフ



4. 河内長野市 親子であそぼ

(1) 概要

親子で遊んだり、同年代の子どもを持つ親同士が情報交換を行い、日ごろ抱えている悩みなどを一緒に考えるためのグループワークを実施するプログラムである。

1) 実施場所

河内長野市市民交流センター（集会室・イベントホール・会議室）、寺ヶ池公園、子育て支援センターかわちながの

2) 実施期間

- ①ながの 平成21年10月6日～12月22日
ちよだ 平成21年10月7日～12月16日
- ②ながの 平成21年9月29日～12月15日
ちよだ 平成21年9月30日～12月9日

3) 対象者及び対象者数

- ①平成19年9月30日以前生まれ 各12組の親子
- ②平成19年10月1日～平成20年4月1日生まれまで 各12組の親子

4) 講師又は実施者の概要

子育て支援センターちよだだい・かわちながのスタッフが各回4名で実施し、第5回のみ心理相談員、または保健師が加わる。

5) 実施目的

同年齢の子どもとその親が集まって、親子同室のプログラムを行う。

プログラムの内容は、主に親子の関わりが持てるようなプログラムと子育て中の親同士が情報交換をしたり、問題を一緒に考えたりするグループワークを行い、プログラムを通して子育て仲間をつくる。

6) 実施内容

- ・第1回：身体測定・フルーツバスケット・自己紹介
- ・第2回：寺ヶ池公園へ遠足
- ・第3回：サーキット遊び・グループワーク（一問一答クイズ）
- ・第4回：感触遊び・グループワーク（聞いてみたい事）
- ・第5回：グループワーク ①心理相談員 ②保健師

・第6回：身体測定・手作りおもちゃ作り・グループワーク(振り返り)

※2回目から5回目の内容は季節や会場の都合で内容が前後する場合もある。

※予備日として、サークルを作る希望があればもう1回、日を設定のうえ集まって話し合う。

7) 参加者の申し込み方法

河内長野市の広報誌と子育て支援センターだより「キラ☆キラ」で希望者を募り、申し込み者多数の場合は抽選とする。ただし、初めての参加者を優先するように配慮している。

8) その他特記事項

参加費は無料

(2) 成果と課題

1) 物理的条件(場所、実施期間、対象者人数など)について

新型インフルエンザの流行により、子育て支援センターちよだだいの保育施設内での開催が出来なくなり、参加者決定後の開催場所が変更になった。今後は保育所内では開催せず、地域の会場にて開催することを検討する。

子育て支援センターかわちながのは常設のセンターのため、開催場所の変更はしなかった。

2) 対象者の設定について(募集の方法、メンバーの構成など)

クラスは幼児の年齢に合わせて2組にしている。2歳未満のクラスは、1歳半～2歳を対象としている。しかし2歳以上のクラスの場合には、年長児が含まれることもあるため、応募者によっては同年齢の友達探しが出来ない場合もある。

3) 支援者、講師について(人数、人材の育成、報酬など)

子育て支援センタースタッフが、ファシリテーター・コファシリテーター(共同ファシリテーター)・保育係を担当する。特別な人材育成や研修はしていないが、グループ担当者の打ち合わせや全体の振り返りによって支援プログラムの質を保てるよう努めている。

母子同室のため、母親がグループワークをしている様子を、保育スタッフが保育しながら観察することができ、スタッフ全体でその内容を共有する。

4) 支援プログラムの内容に関して

プログラムは親子の遊びと、母親のグループワークで構成されている。

親子の遊びのプログラムとしては、体を動かす遊びをする、紙芝居などを見る、遠足に行く、手作りおもちゃを作る、感触遊びをするなど、毎回趣向の違う内容で遊べるように企画している。

遊びの後に母親のグループワークがあり、簡単な今の困っていることや、他の家庭の場合ではどうしているのかなどの疑問を、その場で情報交換をしたり、考えて解決する。ただし、2歳以上クラスのみ、心理相談員との相談日を1回設けて、別室保育にて実施している。

課題は、各年齢とも親子が別室になり、じっくり話し込める回が必要ではないかと、次回に向けて検討している。

5) 支援プログラムを実施するにあたっての各組織、各機関との連携について

保健センターからの紹介を受けて申し込みがあるときは、優先的に取り扱う。

6) 利用者評価（利用者アンケート、苦情、問い合わせ等も含む）の把握とその後の扱いについて

「親子であそぼ」終了後に、グループがサークル活動を希望する場合があります、部屋の貸し出しや運営の相談などの援助をしている。

「親子であそぼ」を開催中に、親からの質問や悩みについては、グループワークの中で解決できるように導いている。

7) 成果

なかなか家から外に出ることができなかった親子が、足を運び参加することができるようになったことが挙げられる。また、子ども同士の関わりができ、参加することを楽しみにしていること、親同士のつながりもでき、情報交換などが活発に行われるようになったことも、成果と考えている。

（３）支援プログラムの調査結果

１）支援プログラムの効果測定結果

「子どもは結構一人で育っていくものだと思う」で有意差がみられ、実施後に平均値が上がった。

図表３－１０ 支援プログラム実施前後の平均値の比較

質問項目		度数	平均値
毎日くたくたに疲れる	実施前	21	2.38
	実施後	21	2.29
朝、目ざめがさわやかである	実施前	21	2.67
	実施後	21	2.67
考えごとがおっくうでいやになる	実施前	21	1.81
	実施後	21	1.76
毎日、はりつめた緊張感がある	実施前	20	1.50
	実施後	20	1.35
生活にゆとりを感じる	実施前	20	2.65
	実施後	20	2.75
子どもがわずらわしくてイライラしてしまう	実施前	20	1.55
	実施後	20	1.65
自分は子どもをうまく育てていると思う	実施前	20	2.45
	実施後	20	2.60
子どものことで、どうしたらよいかわからなくなることがある	実施前	21	2.19
	実施後	21	2.29
子どもは結構一人で育っていくものだと思う	実施前	21	2.62
	実施後	21	3.14
子どもをおいて外出するのは心配で仕方がない	実施前	20	3.00
	実施後	20	3.10
自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう	実施前	21	1.52
	実施後	21	1.38
育児によって自分が成長していると感じられる	実施前	21	3.52
	実施後	21	3.38
毎日毎日、同じことのくり返ししかしていないと思う	実施前	20	2.35
	実施後	20	2.15
子どもを育てるためにがまんばかりしていると思う	実施前	21	1.90
	実施後	21	1.95
合計得点	実施前	19	31.11
	実施後	19	30.58

*

* 5%水準の有意差あり

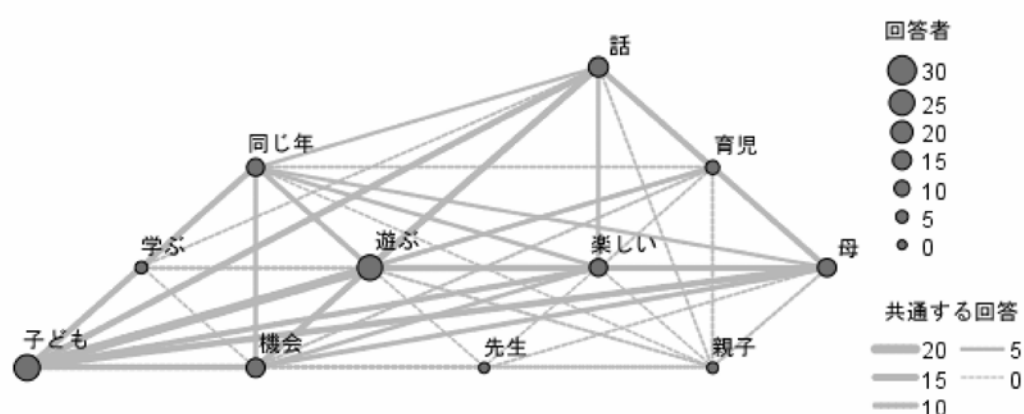
2) 自由記述にみる支援プログラムの特徴

「他の親と、子育てについての情報交換ができた」「母親の仲間作りに先生方が働きかけてくれた」「話を聞いて、考え直すきっかけになった」などがあったが、特に「引越ししてきて、知り合いが少ない」場合には、この事業が仲間と知り合うための大切なきっかけとなっていた。

プログラムについては、「毎回、違うテーマで楽しい遊びを設定」「親子が色々な体験をさせてもらって、充実」「外出して親子ともに遊び、気分が変わって良かった」など、親子で楽しめたとする感想の他、「子どもの遊び方や、遊びのヒントが得られた」など、満足感がうかがえる記載がみられた。また、子どもが、「同年代の子どもと一緒に遊べる」「色々な遊び方を覚えて、家でも一人で遊ぶ時間が増え、妹との遊び方も上手になった」「色々なことに興味」「遊びの中で、ゆずりあうことなどを学べた」、また「母親から離れて遊べる機会」が得られ、「子どもが親から離れて、友人と遊ぶ姿を見ることができた」など、「子どもが少しずつ成長」する姿についての記載もみられた。

「子育て支援センターに来やすくなった」の記載からは、参加者が子育て支援センターを、より身近な相談機関として認識していることがうかがえる。

図表 3-11 テキストマイニングによるWebグラフ



(有効回答数：31)

5. 河内長野市 子育て家庭ほっと支援事業

(1) 概要

河内長野市子育て支援センターのスタッフが、在宅家庭を中心に、4ヵ月健診で訪問依頼のあった家庭や、育児不安やひきこもりなど孤立しがちな家庭を訪問し、育児支援や情報提供を行うプログラムである。

1) 実施場所

河内長野市在住の就学前の子どもを持つ家庭へ訪問

2) 実施期間

通年

3) 対象者及び対象者数

河内長野市在住の就学前の子どもを持つ家庭

4) 講師又は実施者の概要

- ・子育て支援センターちよだだい スタッフ 3 名
 - ・子育て支援センターかわちながの スタッフ 5 名
- 合計 8 名のうち 2 名で訪問する。

5) 実施目的

ひきこもりがちな家庭など、行政の支援が行き届きにくい在宅の子育て家庭へ保育士が訪問することにより、子育てに対する不安感や負担感の軽減を図ることを目的とする。

6) 実施内容

訪問を希望された家庭に子育て支援センターのスタッフ(保育士)が 2 名で訪問し、自宅内で母親との会話から育児の心配ごとや単なる話し相手、その他必要とする情報の提供を行い、孤立感を軽減する。それをきっかけに地域の広場や子育て支援センターなどに出かけて来られるようにし、孤立や不安、負担感を軽減する。

7) 申し込み方法

- ・ 4ヵ月健診での申し込み
- ・ 保健師からの依頼
- ・ 育児相談の電話から訪問へ

8) その他特記事項

利用料は無料。

(2) 成果と課題

1) 物理的条件（場所、実施期間、対象者人数など）について

3歳以下の特に4ヵ月以降の赤ちゃんと上に2歳くらいのきょうだいがいる在宅家庭からの要望が多い。しかし、他の事業との兼ね合いやスタッフの人員の問題があり、一度の訪問に時間がかかるため、一日に訪問できる数は限られる。

2) 対象者の設定について（募集の方法、メンバーの構成など）

河内長野市在住の就学前の子どもを持つ家庭のうち、4ヵ月健診の際に申し込みをしてくれた家庭、保健師より訪問依頼のあった家庭、育児相談から訪問になるケースを対象としているが、まだまだ、広く知られているとは言えない。

広報することで、より多くの方に事業を知ってもらい、気軽に訪問依頼が出来るようにしていきたい。

3) 支援者、講師について（人数、人材の育成、報酬など）

訪問するのは子育て支援センターのスタッフ・保健師であり、支援センター内で研修を行っているが、特にマニュアル的なものはなく、スタッフ同士の伝承による部分が強い。そのため、今後、マニュアル化する必要がある。

4) 利用者評価（利用者アンケート、苦情、問い合わせ等も含む）の把握とその後の扱いについて

家庭訪問後、支援事業に参加されない方には、電話で様子を聞き、依頼があれば訪問している。スタッフ間の情報共有と調整会議の時間の確保が課題である。

5) 成果

育児相談で今すぐにでも会って話をしたいと思う人に対して、訪問できることを伝えるだけでも安心される。

なかなか外には出て行けなかった家庭を訪問することで、親子ともに楽しみに待っていてくれたり、きょうだいへの子育てでイライラしていた方に、一時的にほっとしてもらえた。

また、支援センターに出向くことの不安を訪問時に解決することにより、自ら支援センターに出向ていくことのきっかけとなった。

家庭訪問後、支援センター主催の事業に参加して、親同士の交流で子育て情報を得たり、悩みの解消ができた。

（３）支援プログラムの調査結果

１）支援プログラムの効果測定結果

今回の調査では、有意差はみられなかった。

図表３－１２ 支援プログラム実施前後の平均値の比較

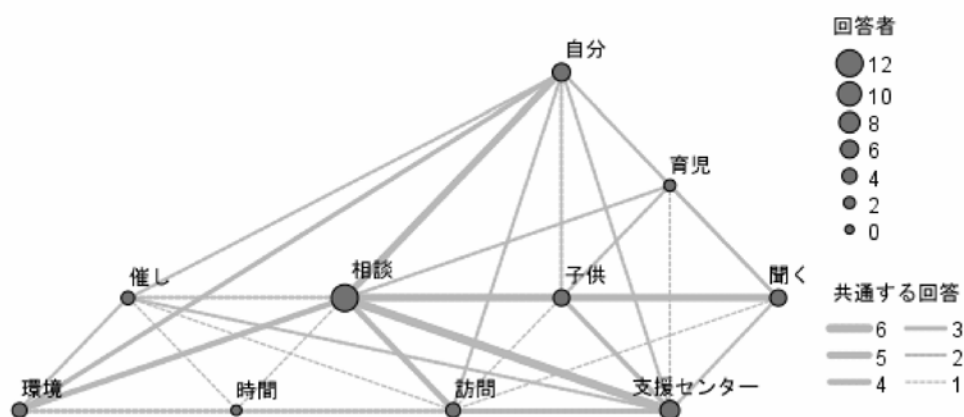
質問項目		度数	平均値
毎日くたくたに疲れる	実施前	5	2.20
	実施後	5	2.60
朝、目ざめがさわやかである	実施前	5	2.00
	実施後	5	2.20
考えごとがおっくうでいやになる	実施前	5	2.40
	実施後	5	1.60
毎日、はりつめた緊張感がある	実施前	4	2.25
	実施後	4	1.75
生活にゆとりを感じる	実施前	5	1.80
	実施後	5	2.00
子どもがわずらわしくてイライラしてしまう	実施前	5	1.80
	実施後	5	1.60
自分は子どもをうまく育てていると思う	実施前	5	2.00
	実施後	5	1.80
子どものことで、どうしたらよいかわからなくなることがある	実施前	4	2.75
	実施後	4	2.75
子どもは結構一人で育っていくものだと思う	実施前	5	2.20
	実施後	5	2.80
子どもをおいて外出するのは心配で仕方がない	実施前	5	2.60
	実施後	5	3.20
自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう	実施前	5	2.40
	実施後	5	2.00
育児によって自分が成長していると感じられる	実施前	4	3.25
	実施後	4	3.50
毎日毎日、同じことの繰り返ししかしていないと思う	実施前	5	3.00
	実施後	5	2.80
子どもを育てるためにがまんばかりしていると思う	実施前	5	2.80
	実施後	5	2.20
合計得点	実施前	2	37.00
	実施後	2	32.50

2) 自由記述にみる支援プログラムの特徴

「下の子が小さいので支援センターに行けなかったが、育児に関することを直接聞くことができた」「支援センター等の催しに参加したくとも外出できないが、訪問事業のおかげで時間にも余裕ができ、質問や相談も気軽にできる」「当時は引っ越して間がない頃で誰も知らず、土地勘もなく、子育てに悩んでいた時なのですごく助かった」などと、外に出にくい状況のときに、支援センターからの訪問は利用者にとって有難かったことが綴られていた。

「相談できる場所があると思っただけで、気持ちがとても楽」「自分の思い込みに別の考え方があったことがわかり、少し楽になった」「子どものありのままの成長を認められて、子どもの今の状態に満足する感情が芽生えてきた」「自分の環境や状態を客観的にみることができた」などの他、「ファミリー・サポート・センター」の情報を得たり、イベントの紹介を受けて参加することにより、「日中、一人きりの子育て時に外の空気にふれ、子育て中の母親と話す機会ができて気分転換になった」「私自身のストレスが発散でき、子どもたちも喜ぶ」と、外に向かって気持ちや足が向くようになった親子の様子も記載されていた。

図表 3-13 テキストマイニングによるWebグラフ



(有効回答数: 13)

6. 熊取町 ノーバディズ・パーフェクトプログラム

(1) 概要

「ノーバディズ・パーフェクトプログラム」は、親が自分の長所に気づき、健康で幸福な子どもを育てるための前向きな方法を見つけ出せるよう手助けすることを目的に、カナダで開発された親向けのプログラムである。参加者それぞれの悩みや関心についてグループで話し合いながら、自分にあった子育ての仕方を学ぶことを支援する。

1) 実施場所

- ・熊取町立第8保育所

2) 実施期間

- ・平成21年10月23日～12月10日（7回）

3) 対象者及び対象者数

- ・対象者：2～3歳児の子どもを育てている親
- ・参加者数：11名

4) 講師又は実施者の概要

- ・ノーバディズ・パーフェクトプログラム ファシリテーター（町立保育所保育士）

5) 実施目的

親たちに、安心して出会える場と自分たちの生活や子ども、親としての役割について考える機会を提供する。また、保育所における子育て支援の充実を図る。

6) 実施内容

- ・事前面接：参加の動機や、日頃子どもを育てていて楽しいことや困ったこと、プログラムに期待すること等について、参加者の話をファシリテーターが聞く。
- ・テーマをもとに、グループワークやテキスト学習などを実施し、参加者それぞれの悩みや関心についてグループで話し合いながら、自分にあった子育ての仕方を学ぶ。

第1回のテーマ「互いに知り合う」

第2回のテーマ「食事について」

第3回のテーマ「生活リズムについて」

第4回のテーマ「子どものイヤイヤについて」

第5回のテーマ「イライラするとき」

第6回のテーマ「子どもとの接し方について」

7) 参加者の申し込み方法

町広報にて募集するとともに、2歳6ヵ月児健診及び3歳7ヵ月児健診の際、一人ひとりに声をかけて内容について説明し、参加を受け付ける。

8) その他特記事項

- ・参加費としては茶菓子代を1回につき100円徴収している。テキストは町から貸与可能。
- ・プログラム中の子どもの保育は町立保育所の「保育体験」として実施している。保育体験中の子どもの様子について、親と保育士が話をする時間を設けている。在宅で子育て中の親が、保育所入所児の食事や排泄、生活全般について直接体験し、学ぶ機会として好評である。
- ・「専門職や子育て経験者が親に対して指導する」という親支援から、「親自身が力を獲得していく」という親の自立に向けた支援への転換を図るために導入した。

(2) 成果と課題

1) 物理的条件（場所、実施期間、対象者人数など）について

保育所は安全で安心して子どもを預けられる条件が整っており、親も安心してプログラムに参加することができる。また、プログラム実施中の保育を「保育所体験」と位置づけ、子どもが保育所生活を体験するとともに、親も他の子どもの成長・発達や生活状況を体感する機会、または、保育士に相談できる機会となり、親育ちを支える要素が複合的に存在する条件が整っている。

実施期間は年1クール（8回で1クール）の実施であり、今後は、保育体制の確保等条件が整えば、春～秋期にもう2クール実施することも検討している。

対象者人数はプログラムの効果から、12名前後が適当な人数と判断している。

希望者はテキストを購入（1,890円）できるが、町から貸与もしている。

2) 対象者の設定について（募集の方法、メンバーの構成など）

乳幼児健診において一人ひとりに声をかけ募集する方法は、対象者にプログラムの内容を適切に届け、参加希望を確認し、対象者を確定する上で効果的な方法と考える。広く住民全体へのPRを行う方法としては、町広報が適当と考える。

3) 支援者、講師について（人数、人材の育成、報酬など）

町でファシリテーター養成講座の受講を事業化し、人材育成を図っている。これまで6名の町立保育所保育士が資格を取得しており、ノーバディズ・パーフェクトプログラムの視点や方法論を活用して、保育所における子育て支援機能の充実を図っている。なお、プログラムは町

立保育所の保育士が実施するため報酬等の費用は発生しない。

4) 支援プログラムの内容に関して

再受講希望者が多く、また、プログラム終了後の仲間づくりにつながっていることなどから、プログラムの内容は、子育て中の親に広く受け入れられていると考える。

また、プログラムの内容やファシリテーターの力量形成については、「NPO法人こころの子育てインターねっと関西」の支援があるため、安心してプログラムを実施できる。

町では、子育て支援は「子どもを育てる親」としての成長を支えることに留まらず、親自身が人生を振り返り、人間として成長することを支援することと位置づけており、プログラムは、その目的の導入部分として成果を上げていると考えている。

5) 支援プログラムを実施するにあたっての各組織、各機関との連携について

次世代育成支援対策地域行動計画における「親としての経験や成長ができる条件整備」の一事業という位置づけで実施している。また、子ども家庭課・町立保育所主催の事業であるが、募集等は健康課の協力を得ながら行っている。

6) 利用者評価（利用者アンケート、苦情、問い合わせ等も含む）の把握とその後の扱いについて

プログラム参加者にアンケートを実施している。また、アンケート等を基にプログラムの実施方法などの検討を行うとともに、全体のまとめとして報告書を作成している。さらに、「保育所取り組み報告会」等で実践内容を報告し、町全体の評価としている。

7) 成果

親にとっては、子どもを理解し、子育てについて学ぶ機会となっている。また、子育ての悩みを共有できる仲間に出会うことができる場となっており、自分自身の価値観やそれが子育てにどう影響しているか考える機会となっている。

また、保育士が、「親に指導する」という親支援のスタイルを改め、「親自身が力を獲得していくため」の支援の方法とその力量を養うことにより、保育所全体で子育て支援の方向転換・拡充が図られつつある。

（３）支援プログラムの調査結果

１）支援プログラムの効果測定結果

「考えごとがおっくうでいやになる」で有意差がみられ、実施後に平均値が上がった。これはプログラムの特性として、しっかりと考えることを参加者に求めたためだと思われる。

図表３－１４ 支援プログラム実施前後の平均値の比較

質問項目		度数	平均値
毎日くたくたに疲れる	実施前	8	2.75
	実施後	8	2.25
朝、目ざめがさわやかである	実施前	9	2.89
	実施後	9	2.67
考えごとがおっくうでいやになる	実施前	9	2.00
	実施後	9	2.78
毎日、はりつめた緊張感がある	実施前	9	1.67
	実施後	9	1.67
生活にゆとりを感じる	実施前	9	2.56
	実施後	9	2.22
子どもがわずらわしくてイライラしてしまう	実施前	9	2.33
	実施後	9	2.33
自分は子どもをうまく育てていると思う	実施前	9	2.22
	実施後	9	2.44
子どものことで、どうしたらよいかわからなくなることがある	実施前	9	3.00
	実施後	9	3.33
子どもは結構一人で育っていくものだと思う	実施前	9	2.56
	実施後	9	2.67
子どもをおいて外出するのは心配で仕方がない	実施前	9	2.33
	実施後	9	2.56
自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう	実施前	9	1.89
	実施後	9	1.89
育児によって自分が成長していると感じられる	実施前	9	3.56
	実施後	9	3.56
毎日毎日、同じことのくり返ししかしていないと思う	実施前	9	2.78
	実施後	9	2.67
子どもを育てるためにがまんばかりしていると思う	実施前	9	2.11
	実施後	9	2.33
合計得点	実施前	8	34.00
	実施後	8	35.25

* 5 %水準の有意差あり

2) 自由記述にみる支援プログラムの特徴

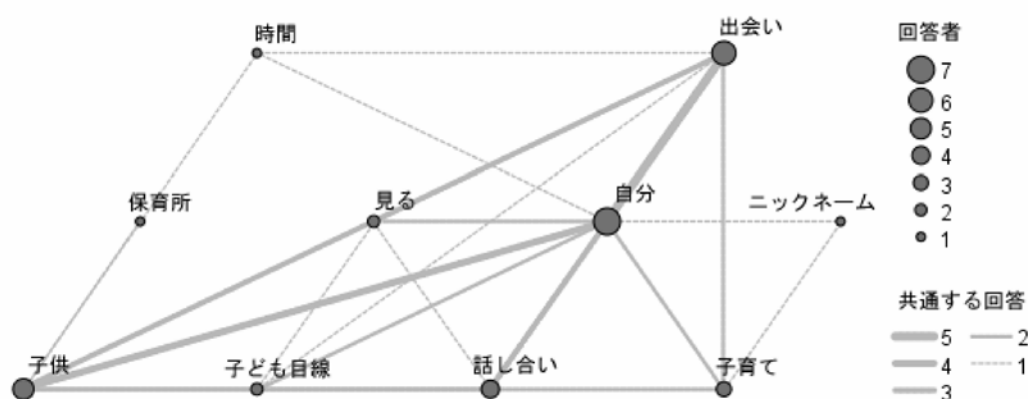
「保育所内で預かってもらえる」環境に安心して、久々に子どもと離れて自分の時間をもつことができ、「親子でなく、一人の女同士として」出会えたことや「友達ができた」こと、「客観的に自分を見る」機会が得られたことなどが良い点として挙げられた。

プログラムについては「テーマごとに話し合いができた」ことや、「参加者をニックネームで呼び合う」ことにより、話しやすい雰囲気の中で行われたことが記載されていた。

また、「多くの方との出会い」により、「子育てについて、同じような悩みをもつ母親たちとの意見交換」をする中で、このような悩みは「自分一人じゃないと思って安心」し、「自分自身を見直し」、頑張る気持ちが出てきた様子がうかがえる。

子どもに対しては、「子ども目線で対応でき、前向きになれた」「今まではイライラするとつい子どもを叱っていたが、子どもの気持ちを考えられるようになった」と、プログラムがよい親子関係に結びついている効果が記載されていた。

図表 3-15 テキストマイニングによるWebグラフ



(有効回答数：9)

7. 熊取町 ざっくばらんに！親育ちサロン（大阪府親学習プログラム）

（１）概要

「大阪府親学習プログラム」は、親同士の対話や交流を促し、親自身が様々なことを学び、成長していくことを目的に、大阪府教育委員会が開発したプログラムである。

１）実施場所

- ・熊取交流センター（煉瓦館）

２）実施期間

- ・＜前期＞平成21年6月3日、6月17日、7月1日
- ・＜後期＞平成21年9月30日、10月7日、10月14日

３）対象者及び対象者数

- ・対象者：乳幼児～小中学生の子どもを持つ保護者
- ・参加者数：＜前期＞保護者7名・保育6名、＜後期＞保護者8名・保育7名

４）講師又は実施者の概要

- ・大阪府親学習リーダー養成講座を受講した住民

５）実施目的

住民同士が親について相互に学習することを目的に、親たちに、安心して出会い、仲間づくりができる場や、自分たちの生活や子ども、親としての役割について考える機会を提供する。

６）実施内容

- ・テーマにあるエピソードをもとに、グループワークやティータイムを実施し、参加者がエピソードに対する自身の気持ちを語るとともに、プログラムにある参考資料等をもとに意見交換を行い、「親」に対する理解を深めていく。
 - ＜前期＞第1回のテーマ「時間をもつ」
 - 第2回のテーマ「だきしめる」
 - 第3回のテーマ「まじわる」
 - ＜後期＞第1回のテーマ「親を知る」
 - 第2回のテーマ「ほめる」
 - 第3回のテーマ「信じる」

7) 参加者の申し込み方法

- ・町広報や、小学校にて1～3年生全員へチラシを配布し、保護者の参加を募集した。
- ・電話にて、参加申込の受付を行った。

8) その他特記事項

- ・平成21年7月15日、9月16日に親学習リーダー養成講座を開催した。

(2) 成果と課題

1) 物理的条件（場所、実施期間、対象者人数など）について

熊取交流センター（煉瓦館）は、生涯学習を中心に芸術活動や歴史体験学習等の拠点であること、加えてプログラム実施中の保育体制も確保されていることから、親子が安心して参加することができる物理的条件が整っていると考ええる。

実施体制やプログラムの効果を考慮すると、実施期間は年2クール（3回で1クール）の実施、対象者人数は15名前後がそれぞれ適当だと考える。

2) 対象者の設定について（募集の方法、メンバーの構成など）

小学校の協力で、1年生～3年生の子どもの保護者全員へ周知することが可能である。広く住民全体へのPRを行う方法としては、町広報が適当と考える。

3) 支援者、講師について（人数、人材の育成、報酬など）

プログラムのリーダーは、大阪府の親学習リーダー養成講座を受講した住民であり、リーダーと参加者の目線が近く、リーダーと参加者がその関係を取り払い「育ちあう」という点が大きな特徴である。

なお、1日あたり3～4名のリーダーが参加し、報酬は1日あたり、合計で1万円である。

4) 支援プログラムの内容に関して

プログラム終了後、子育てサークル等の仲間づくりにつながっていることから、プログラムの内容は、子育て中の親に広く受け入れられていると考える。

本町では、子育て支援は「子どもを育てる親」としての成長を支えることに留まらず、親自身が人生を振り返り、人間として成長することを支援することと位置づけているため、プログラムは、その目的の導入部分として成果を上げていると考えている。

5) 支援プログラムを実施するにあたっての各組織、各機関との連携について

次世代育成支援対策地域行動計画における「親としての経験や成長ができる条件整備」の一事業という位置づけで実施している。

6) 利用者評価（利用者アンケート、苦情、問い合わせ等も含む）の把握とその後の扱いについて

プログラム参加者にアンケートを実施している。また、アンケート等を基にプログラムの実施方法などの検討を行うとともに、事業評価を行っている。

7) 成果

親にとっては、子どもを理解し、子育てについて学ぶ機会となっている。また、子育ての悩みを共有できる仲間に出会うことができる場となっており、自分自身の価値観やそれが子育てにどう影響しているか考える機会となっている。さらに地域における身近な相談者としての「親学習リーダー」との出会いの場となっている。

(3) 支援プログラムの調査結果

1) 支援プログラムの効果測定結果

今回の調査では、有意差はみられなかった。

図表 3-16 支援プログラム実施前後の平均値の比較

質問項目		度数	平均値
毎日くたくたに疲れる	実施前	5	3.00
	実施後	5	3.00
朝、目ざめがさわやかである	実施前	5	1.80
	実施後	5	2.00
考えごとがおっくうでいやになる	実施前	5	2.80
	実施後	5	2.40
毎日、はりつめた緊張感がある	実施前	5	1.60
	実施後	5	2.20
生活にゆとりを感じる	実施前	4	1.75
	実施後	4	1.25
子どもがわずらわしくてイライラしてしまう	実施前	5	2.40
	実施後	5	2.60
自分は子どもをうまく育てていると思う	実施前	5	2.00
	実施後	5	2.00
子どものことで、どうしたらよいかわからなくなることがある	実施前	5	3.00
	実施後	5	3.40
子どもは結構一人で育っていくものだと思う	実施前	5	2.60
	実施後	5	2.20
子どもをおいて外出するのは心配で仕方がない	実施前	5	2.40
	実施後	5	2.80
自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう	実施前	5	1.80
	実施後	5	1.80
育児によって自分が成長していると感じられる	実施前	5	3.80
	実施後	5	3.80
毎日毎日、同じことの繰り返ししかしていないと思う	実施前	5	2.40
	実施後	5	2.20
子どもを育てるためにがまんばかりしていると思う	実施前	5	2.20
	実施後	5	2.20
合計得点	実施前	4	35.50
	実施後	4	35.75

2) 自由記述にみる支援プログラムの特徴

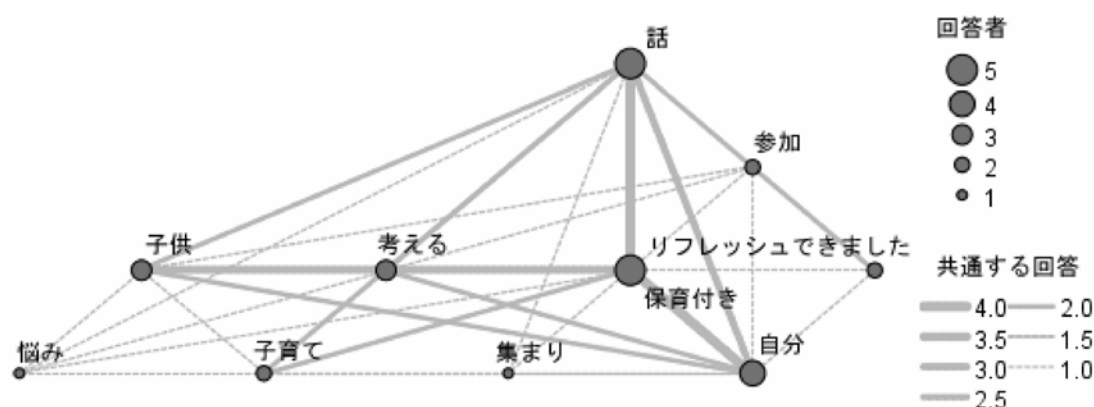
子どもを「保育付き」で預かってもらえることへの安心感と、そのおかげで「子どものことを気にせずに自分のための時間」を持つことができ、「リフレッシュできて良かった」とする記載がみられた。

「普段考えないようなことをじっくり考える」ことができ、「自分が子どもの頃、親に対して持っていた気持ちをあらためて考えることができた」と、自分の子ども時代の姿とわが子を重ねて現在の自分の子育てを客観的に考える様子もみられた。

「子育ての時代は色々な悩みや不安」があり、この講座では「親に必要な話題」が多く、「様々な人の話や意見を聞くことができた」ことが役立ったという記載が多く、「このような問題を色々な人と話す機会」を得て、「子育てのことでゆっくり考えたり話し合う」ために「次回も参加したい」という意欲が記載された。

今後「このような話ができる環境があれば参加」したく、「これからもそういう場を増やしていってほしい」との要望がみられた。

図表 3-17 テキストマイニングによるWebグラフ



(有効回答数：7)

第4章

地域における子育て支援

－「つながり」を中心にした取り組み－

第4章 地域における子育て支援 —「つながり」を中心にした取り組み—

第1節 調査の目的と概要

本章では、本プロジェクトのモデル地区における地域の連携や協働など、「つながり」を中心とした子育て支援の取り組みを紹介する。

なお、ここで言う「連携」とは、互いに連絡をとり、協力して物事を行うことを意味するが、例えば、活動資金の一部を助成する、援助活動にボランティアを派遣するなど、その活動の一部に関わるという意味も含んでいる。一方、「協働」とは、共通の目標を達成するために複数の組織や個人が対等の立場でお互いに協力しあうことを意味する。このことから、「協働」の方が「対等」「協力」「共に」という趣旨が「連携」より強いと思われ、今日においてより求められている「つながり」の形態だと思われる。

1. 調査の目的

社会状況がより複雑化、多様化している中、家庭が抱える子育ての問題も、より複雑に、より多様になっている。家庭が社会の一単位であり、社会と相互に作用しながら生活を営んでいる以上、社会の流れに家庭が組み込まれるのは必然でもある。そのような中、子育ての問題に対する援助は、より高度な専門性が要求されるようになってきており、かつてのように、一つの機関や組織だけで対応することが困難になりつつある。例えば、今日的な課題である虐待や不登校、DVなど、社会的環境や要因が複雑に絡み合った事象に対しては、福祉や教育、心理など、多様な側面からのアプローチが必要とされている。また、子育て家庭が虐待等を行うような状況に陥らないための見守りや予防策については、保育所や学校など地域の様々な機関や、地域で生活している市民の協力は特に欠かせない要素になっている。地域において「安心した子育て」「健全な子どもの育ち」を実現するには、各機関や組織、市民活動など地域一丸となった「つながり」による支援体制が欠かせない課題であり、本プロジェクトの重要な目的の一つでもある。

そこで、本章では、それぞれの地域が相互に学び合い、地域の子育て支援環境が充実するよう、モデル地区の子育て支援の「つながり」の実践事例を紹介する。

2. 調査の概要

予め、本プロジェクトメンバーで以下のように6つの質問項目を設定し、その項目に従って調査研究チームがヒアリングを行った。

なお、それぞれの地域には独自の文化や歴史、風土があるため、質問項目に対して画一的な回答ではなく、それぞれの地域ごとの特質的な実践事例を中心に回答を求めた。

- (1) 現在、つながりのある組織、団体
- (2) つながっている形態
- (3) つながっていったきっかけ
- (4) 関係やつながりをつくるために行っている工夫
- (5) 関係やつながりをつくる上での課題
- (6) 今後つながっていきたい組織、団体

第2節 ヒアリングの結果

1. 摂津市

(1) 現在、つながりのある組織、団体

摂津市では、子どもの健全育成や子育て支援の側面から「子育て支援ネットワーク推進会議」を、また、子どもの虐待予防や虐待事例への対応及び虐待以外のハイリスク家族への支援という側面から「要保護児童対策地域協議会」を設置し、関係機関との連携を図っている。

1) 摂津市子育て支援ネットワーク推進会議

ネットワークには、「地域子育て連絡会」「障害児相談連絡会」「子ども家庭サポート連絡会」の3つの部会を持って活動している。

《行政内》①こども育成課・家庭児童相談室・保育所・地域子育て支援センター・保育係 ②健康推進課 ③障害福祉課 ④地域福祉課 ⑤女性政策課・男女共同参画センター ⑥学校教育課・幼稚園・小学校・中学校 ⑦人権教育室 ⑧教育研究所 ⑨生涯学習スポーツ課・公民館 ⑩青少年課 ⑪社会福祉事業団・第1児童センター・障害児童センター ⑫保健センター ⑬大阪府子ども家庭センター ⑭大阪府保健所

《行政外》⑮社会福祉協議会 ⑯PTA協議会 ⑰NPO法人キッズぽてと

2) 摂津市要保護児童対策地域協議会

協議会には、「児童虐待防止連絡部会」と「専門相談部会」がある。

《行政内》①大阪法務局 ②大阪府吹田子ども家庭センター ③大阪府茨木保健所 ④大阪府摂津警察署 ⑤摂津市教育委員会（学校教育課・人権教育室・教育研究所） ⑥摂津市消防署 ⑦摂津市市長公室人権室（人権推進課） ⑧摂津市保健福祉部健康推進課 ⑨摂津市福祉事務所（こども育成課／家庭児童相談室・地域福祉課・障害福祉課・生活支援課）

※「家庭児童相談室」は、調整機関

《行政外》⑩摂津市医師会 ⑪摂津市民生委員児童委員協議会 ⑫摂津市社会福祉協議会 ⑬摂津市人権協会

(2) つながっている形態

それぞれの会が会議体としてつながっている。その特徴は、代表者会議、実務者会議、事例検討会議以外に、事務局会議（上記（1）下線の機関）を形成し、4層構造でより密な連携を図っている点にある。また、「子育て支援ネットワーク推進会議」については、いくつかの連絡会を組織しており、講座やイベントの開催、情報誌の発行などの事業を通して、関係機関とのつながりをさらに深めている。

（３）つながっていったきっかけ

昭和50年代後半に児童福祉課・家庭児童相談室・府児童相談所・府保健所の４者で障害児問題連絡会を設置したが、この４者が協働したことにより、子どもに関わる様々な問題が提起されるようになった。

その後、子育て不安など子育て支援に関する相談が増えてきたこともあり、平成７年、この４者で市内各所にある公園を歩いて、どこの公園で子どもが遊んでいるか、子育てグループや子育て情報を調査し、それを取りまとめた「子育てマップ」を作成した。このマップを作成する中で連携する組織が増えていき、女性センターから誕生したＮＰＯ法人「キッズぽてと」もその一つである。このほか民間組織の参加も受け、組織的に広がり平成１１年に「摂津市子育て支援ネットワーク推進会議」に組織改変した。

一方、単独の組織であった「思春期問題連絡会」（学校・教育研究所・家児相・府児相・府保健所）も、子育てネットに統合し、摂津市全体で官民合同の組織体になっていった。

（４）関係やつながりをつくるために行っている工夫

組織ができたからといって、それだけでは本当のつながりにはなっていない。つながりを作っていくためには仕掛けが必要である。摂津市子育て支援ネットワーク推進会議では、いじめや不登校が激増してきた平成10年頃、顔の見える地域作りということで、中学校区ごとに地域連携事業が始まり、この事業への参加団体を募るために公私立保育所や小学校、中学校、子ども会など色々な所を訪問し、多くの関係者と直接顔を合わせることができた。なお、本推進会議の事務局は関係団体で順番に担っており、現在では民間の方に運営していただいている。

毎年事業を実施していると、前例踏襲になりがちで、うまくいかない場合も多くなることから、面倒でも関係者全員が集まって、意見を出しながら進めていくことが、組織の形骸化を防ぐことにもつながる。トップダウンでない、ボトムアップの姿勢が、時間がかかっても大切である。また、事業を継続させていくためには、財源の確保も重要であるので、国の補助金だけでなく、様々な助成金の確保にも努めている。

「気になる」子育て家庭への支援のために、市の養成講座を修了した「子育てアドバイザー」の派遣を積極的に行っているが、この「子育てアドバイザー」は、地域の中で家庭と直接につながっており、行政では手が届かないような事案にも対応していただいている。

学校や幼稚園、保育所、各関係機関とは、様々な事例を通して深く関わるようになってきているが、これは、困難な事例であっても「要保護児童対策地域協議会」において検討した結果、成果があり、つながることのメリットを実感できたからである。また、非行やネグレクト傾向にある不登校といった虐待以外の事例についても、この協議会に「専門相談部会」を置いて対応している。

（５）関係やつながりをつくる上での課題

組織を形骸化させないことが大きな課題である。トップダウンになるとやらされているという気持ちが強くなり、それぞれがやる気をなくしていくこともあるので、みんなで作っているという意識を持ってもらうための工夫が必要である。特に、会議の進め方には、多くの留意点が必要となる。また、日常の業務が忙しくなると、どうしても相互の関係が疎遠になってきて、組織の形骸化につながるので、何らかの行事をするなど刺激をつくることも必要である。

また、要保護児童対策地域協議会の実務者会議には、多くの関係者に参加してもらいたい、広げすぎると、会議が報告型になり、実働性が低くなってしまうジレンマがある。そうすると事例について細かな話ができにくくなるという面から構成メンバーを広げられないのが課題である。

（６）今後つながっていきたい組織、団体

対応事例を通して、大半の組織、団体とつながっている。しかし、私立幼稚園・保育所については、個別の対応事例で職員とのつながりはあるものの、要保護児童対策地域協議会には参加していないことから、その点の検討が求められている。

2. 枚方市

(1) 現在、つながりのある組織、団体

枚方市では、平成20年度に児童家庭相談と児童虐待対応の担当部署として、課組織の「家庭児童相談所」を設置した。家庭児童相談所では、「枚方市児童虐待問題連絡会議」「枚方市障害児等関係機関連絡会議」の事務局を行い、NPO法人等への委託契約による「子育て短期支援事業」や「養育支援訪問事業」を行っている。

1) 枚方市児童虐待問題連絡会議（要保護児童対策地域協議会）

平成11年2月に市町村児童虐待防止ネットワークとして「枚方市児童虐待問題連絡会議」を設置し、平成17年4月の児童福祉法の改正と同時に「要保護児童対策地域協議会」として位置づけて、現在に至っている。

《行政内》①枚方市家庭児童相談所 ②大阪府中央子ども家庭センター ③大阪府枚方保健所
④枚方市立保健センター ⑤枚方市子育て支援室、枚方市保護課 ⑥枚方市障害福祉室 ⑦枚方市教育委員会 ⑧市立枚方市民病院 ⑨大阪府立精神医療センター 松心園 ⑩枚方警察署
《行政外》⑪枚方市医師会 ⑫枚方市民生委員児童委員協議会 ⑬枚方寝屋川消防組合 ⑭枚方市私立保育連絡協議会 ⑮枚方市私立幼稚園園長会 ⑯弁護士

2) 枚方市障害児等関係機関連絡会議

①枚方市家庭児童相談所 ②大阪府中央子ども家庭センター ③大阪府枚方保健所 ④枚方市立保健センター ⑤枚方市子育て支援室 ⑥枚方市障害福祉室 ⑦枚方市教育委員会 ⑧市立枚方市民病院 ⑨大阪府立精神医療センター 松心園 ⑩知的障害児通園施設 ⑪肢体不自由児通園施設 ⑫府立支援学校

3) NPO法人・民間ネット

NPO法人への事業委託のほか、親の会、サークル活動などによる民間のネットワークがある。

(2) つながっている形態

「枚方市児童虐待問題連絡会議」では、月1回の実務者会議と年2回の代表者会議、そして個別ケース検討会議（随時）を行い、ネットワークによる児童虐待の予防、防止のための情報の共有化やケース管理、啓発活動を行っている。

「枚方市障害児等関係機関連絡会議」では、月1回の実務者会議と年1回の代表者会議を行い、事務局会議を月1回別に行っている。このほか、事業を委託しているNPO法人については、各事業の委託を行う中で、定期的な会議を行い、情報の共有を行っている。また、障害児

とその家族の福祉の向上のため、親の会やサークル活動、制度の紹介等をまとめた情報誌「えんじょい」を平成18年度、20年度に作成した。作成にあたっては、ワークショップ形式で行い、障害児支援や子育てに関わるサークル等の交流・連携を深めるように取り組んだ。

（３）つながっていったきっかけ

平成10年４月に「子ども育成計画～子どもえがおいきいきビジョン」として地域版エンゼルプランを策定し、平成11年２月には、最重要課題を児童虐待防止として、「枚方市児童虐待問題連絡会議」を設置した。また、平成17年４月の児童福祉法の改正により、「要保護児童対策地域協議会」として要綱改正を行い、協議会発足以降、枚方市民病院や私立幼稚園・保育園園長会代表、枚方市障害福祉室、保護課、障害者福祉室などをメンバーとして加えてきた。

（４）関係やつながりをつくるためにやっている工夫

委託事業については、事業者と定期的な会議を開催して情報を共有し、有効的な活動につながるように配慮している。

家庭児童相談所の相談員は異動がないため、相談に来る市民に対して長期的に関わり、成長の様々なステージで相談を受けることができる。このため、関係機関とも、子どもに関わる様々な出来事について連携をとれることとなり、信頼関係を築ける要因となっている。

（５）関係やつながりをつくる上での課題

《行政内》それぞれの役割を明確にしながらも、協力して行き届いた連携が大切である。

《行政外》お互いを尊重した協働体制と、個人情報保護や守秘義務に配慮した情報の共有化や連携のあり方が課題である。

（６）今後つながっていきたい組織、団体

子どもの全般的な相談に関するネットワークが未設置であるため、今後、幅の広いネットワークの整備が望まれる。

3. 富田林市

(1) 現在、つながりのある組織、団体 (2) つながっている形態

富田林市子育て支援課では、平成20年度から新たに子育て支援係と児童相談係を設置し、

①児童相談体制の整備、②児童虐待の防止対策の強化、③地域の子育て支援体制の整備等、④学童クラブの充実などを目指し、事業を実施している。

現在、特につながりのある事業としては以下のような状況である。

1) 要保護児童対策地域協議会

子育て支援課が事務局（調整機関）として、子ども家庭センターと密接に連携をとりながら、「受理会議→調査→安全確認→リスク判定→支援計画」などをその業務としている。

本協議会の組織は、協議会全体のことを協議する代表者会議、児童虐待の情報交換等を担う実務者会議、個々のケースについて検討するケース検討会議によって構成されている。年間約200件のケースを抱え、ケース検討会議は年に40回にも及ぶが、効果的に機能しており、予防、対策等一定の成果をあげている。

構成機関は、富田林市の関係機関では、子育て支援課、保育課、障害福祉課、地域福祉課、保健センター、教育指導室、人権文化センター、人権政策課、市民協働課、児童館、消防本部が関わっている。また、他の構成関係機関は、子ども家庭センター、保健所、警察署、支援学校、医師会、P L病院、富田林病院、新堂診療所、法務局富田林支局、人権教育推進協議会、民生委員児童委員協議会、子ども家庭サポーター、児童養護施設、私立幼稚園連絡協議会、人権協議会、弁護士など多岐にわたっている。

2) 育児支援家庭訪問事業

保健センターと連携し、子ども家庭サポーター（約20名）を家庭に派遣し、家事など保護者へのサポートを行っている。

3) 親子ふれあい事業（親子わくわくフェスタ）

すばるホールとの共催事業であり、市民団体の協力を得てイベント、子育て相談などを実施している。

4) つどいの広場事業

NPO法人に委託し、現在6ヵ所を設置している。

（３）つながっていったきっかけ

行政外については、「質の確保」が最も大きな理由である。例えば、「つどいの広場事業」では、複数の市民団体や民間が関わっているため、行政が「つなぎ」の役割を主導的に果たすことで交流が図れ、質を確保することができる。

また、行政内、行政外を問わず言えることは、具体的な問題を解決するために、結果としてつながらざるを得ない状況にあるということである。特に虐待に関しては、深刻なケースもあり、子どもの最善の利益に立って、他機関と連携して共通の課題意識を持たなくては、とても現状に対応できるような状態ではない。

（４）関係やつながりをつくるために行っている工夫

ネットワークをつくることが目的ではなく、課題を解決するためのネットワークが必要である。また、より質の高いサービスを市民に提供するためにつなぐりは必要不可欠である。市民団体やNPO法人などの民間組織との連携も積極的に行っているが、そのかかわり方は、「つながる仕掛けづくり」である。例えば、「子育てサークル活動支援事業」では、地域の20ヵ所前後の子育てサークルに対して1ヵ所あたり2万円の助成金を支給している。助成金申請の事務手続きを通して、これらの子育てサークルに行政とのつながりのきっかけにしてもらったり、また、市主催でサークル間の研修会も行い、他のサークルとのつながりがもてるような仕掛けづくりをしている。

「つどいのひろば事業」は、数ヵ所のNPO法人に委託しているが、定期的な巡回を通して事業の運営が円滑に行われているか、市民へのサービスの質が確保されているかなどを確認することによって行政が関わっている。また、定期的な研修会を実施し、NPO法人間の連携ができるように企画している。

（５）関係やつながりをつくる上での課題

「ものづくり」ではない手法が求められる。つまり、組織や制度を作って終わりというのではなく、継続して維持していくために何が求められているかということが重要である。そのための基盤となる認識、姿勢として、現実の問題、課題が何なのか、解決するためにどのような人・物・金が必要なのか、計画を立て実践し、その成果を検討することが常に求められている。実質的な成果のある関係、つながりを継続し、維持していくことが課題である。

（６）今後つながっていきたい組織、団体

子育て支援課としての今後に向けた子育て支援の重点課題は、以下の通りである。

- ①サービスの量的拡大（多元化）と質の維持、向上（専門性の確保）
- ②親への支援と子どもの利益のバランス
- ③支援者の育成と支援者の支援（協働）
- ④支援者のネットワークの強化
- ⑤「子育ての社会化」の情報発信

これらの課題に照らして、現在連携したり、協働している機関や団体との関係を維持、継続し、さらに「子どもにとっての最善の利益」を基盤に据えた組織、機関、団体との実質的な連携体制をつくっていきたいと考えている。

4. 河内長野市

(1) 現在、つながりのある組織、団体

河内長野市保健福祉部には二つの政策室が設置され、福祉事務所として機能している。その一つは「福祉政策室」であり、「地域福祉課」と「子育て支援課」が設置されている。「子育て支援課」には「子育て支援センター」が置かれ、子育てに関することを総合的に支援している。もう一つは「保健政策室」であり、「障害福祉課」と「介護高齢課」が設置されている。

1) 河内長野市要保護児童対策地域協議会

①河内長野市子育て支援課 ②河内長野市健康推進課 ③河内長野市学校教育課 ④河内長野市消防本部 ⑤人権推進室 ⑥河内長野市子育て支援センター ⑦富田林子ども家庭センター ⑧富田林保健所 ⑨河内長野警察署 ⑩河内長野市医師会 ⑪河内長野市歯科医師会 ⑫私立幼稚園連絡協議会 ⑬民間保育園連絡協議会 ⑭民生・児童委員協議会 ⑮主任児童委員

2) 次世代育成支援対策協議会

①民間保育園連絡協議会 ②私立幼稚園連絡協議会 ③社会福祉協議会 ④民生委員・児童委員協議会 ⑤市立小中学校校長会 ⑥PTA連絡協議会 ⑦一般市民 ⑧民間企業 ⑨学識経験者 ⑩庁内関係課

3) 子育て支援関係機関

①子育て支援センターかわちながの・ちよだだい ②保健所 ③保健センター ④家庭児童相談室 ⑤子ども家庭センター ⑥地区福祉委員会 ⑦関係各課 ⑧地域子育て支援センター（民間保育園内） ⑨NPOつどいの広場 ⑩公立・民間幼稚園 ⑪公立・民間保育所（園） ⑫民生委員・児童委員協議会 ⑬社会福祉協議会 ⑭聖徳園 ⑮大阪千代田短期大学 ⑯市内の産婦人科、小児科

(2) つながっている形態

1) 河内長野市要保護児童対策地域協議会

「代表者会議」では、(1) 1) の①～⑮の機関の代表者が協議する。また「実務者会議」では、同じく(1) 1) の①②③⑥⑦⑧に加え、その他関係機関及び関係者により会議を開催する。「事例検討会議」では、個別のケースについて関係機関で随時構成して論議する。また、この検討会議の結果、必要が生じた場合は、「要保護児童対策調整機関」（子育て支援課・家庭児童相談室）が「緊急度判定会議」を招集し、その判定により、緊急を要する場合には「富田林子ども家庭センター」または「河内長野警察署」に通告をして、子どもの安全確保を行う。このほか、市民、保健所、学校、幼稚園、医療機関、民生委員・児童委員からの児童虐待の疑いや発見や相談、また「教育委員会」「保健センター」「保健所」など関係機関への相談があった場

合には「要保護児童対策機関」ネットワークによる見守り・支援を行っている。

2) 次世代育成支援対策協議会

河内長野市では、平成10年3月に策定した「河内長野市子育て支援計画-のびのび子育てゆめプラン」を改定し、新たな理念を加えつつ、次世代を担う子どもの育成支援の方向を示すものとして、平成17年3月に「次世代育成支援対策行動計画」（前期）を策定し、『子どもが尊重され、子育て・子育てに夢が持てるまち・河内長野市』を基本理念として、次世代育成支援の取り組みを進めてきた。

このたび、前期5年の計画期間の経過にあたり、行動計画の進捗状況を点検・評価し、さらに施策の改善につながるよう、行動計画（後期）を策定するために本協議会が構成された。

3) 子育て支援関係機関

子育て支援センターの運営を運営委員会形式とし、年に1回の会議で事業報告及び事業計画承認のもとに、子育て支援に関する具体的な活動・事業を行っている。運営委員会の構成メンバーは（1）3）の②⑩⑪⑫⑬⑭と学識経験者である。

子育て支援センターかわちながの内では、i) 地域子育て支援事業 ii) 幼児健全発達支援事業 iii) 家庭児童相談室事業 iv) ファミリー・サポート・センターの4つの事業が連携をとり、支援を行なっている。

i) の地域子育て支援事業では、センター内での子育て支援事業以外に、「地区福祉委員会との連携」「主任児童委員・民生委員・福祉委員」「教育委員会」による子育てサロン等の運営や活動のサポートを行っている。また、訪問型支援事業として保育士による「子育て家庭ほっと支援事業」を保健センターと連携をとりながら行っている。また、市内の小児科、産婦人科に子育て支援に関する情報誌を配置し、連携を図っている。

（3）つながっていったきっかけ

平成8年4月に市立千代田台保育所内に「子育て支援センター」を設置し、平成10年には「河内長野市子育て支援計画-のびのび子育てゆめプラン」を策定した。平成13年5月に子育て支援センターの中核として、独立型の「子育てセンターかわちながの」を設置。既設の「子育て支援センター」はサブセンターと位置付け、「子育て支援センターちよだだい」と名称を変更した。

また、運営委員会委員に社会福祉協議会の代表者が就任していることにより、社会福祉協議会とのつながりができ、地区福祉委員会による子育てサロン立ち上げなどの連携がとれるようになった。また教育委員会とは、社会教育課の公民館事業で、子育て世代にも公民館の利用を促すために、「子育てわいわいルーム」を開催することにより、お互いのニーズが一致し、共催している。

平成18年9月より、保健センターの4ヵ月健診に参加して、子育て支援事業の紹介を行っている。平成19年7月より「子育て家庭ほっと支援事業」を開始するにあたり、保健師に保育士が同行して訪問の仕方を学び、その後は保育士のみで育児不安を抱えたり、なかなか外に出ることが困難な家庭への訪問を実施している。

このほか、市内の小児科・産婦人科への子育て支援センターのパンフレットや情報誌の配置を医師会に依頼し、平成19年2月より毎月配置している。また、大阪南医療センターの産婦人科開催の母親教室にも参加して、妊婦に子育て支援情報を提供し、出産前からの子育て支援に取り組んでいる。

このように、活動の中での多くの人とのつながりを大切にして、積極的に組織を拡充して連携を図っている。

（４）関係やつながりをつくるためにやっている工夫

教育委員会との連携による「子育てわいわいルーム」の開催、生涯学習講座、社会福祉協議会の講座、子育て講座、おもちゃ作り講習会など、講演・講習会の依頼にも積極的に関わるように努めている。また、社会福祉協議会の地区福祉委員会と連携し、8ヵ所の地域において毎月定期的に開催している。加えて、年に数回子育てサロンを実施している地区も2ヵ所ある。子育てサロン開催時には、できるだけ参加することにしており、地区福祉委員会からの子育てサロンの運営に関する相談には随時対応している。また、サロン立ち上げ時の相談にも応じている。

「市民との協働」を大切に考え、行政側から地域交流や自治会イベントに参加しているほか、子育てに関する要請があれば足を運び、電話対応にも応じている。1年に2回は市内の公共施設を借りて遊びの広場を開催し、また地域の親子が出会える場「ともだちあつまれ」では、自治会館で親子参加のプログラムを実施している。その際には、地域の自治会に開催のチラシを配り、各自治会から家庭への回覧を依頼している。主任児童委員、民生委員、福祉委員とは会議を通してつながりができ、要請があれば子育て支援の現状や情報の提供にも応じている。また、産科、小児科にも子育て支援センターだより「キラ☆キラ」を配置し、情報提供に努めている。保健センターの定期健診（4ヵ月健診）に同行することにより、参加者に対して子育て支援センターの活動や、子育てに関する情報提供を行っている。

（５）関係やつながりをつくる上での課題

《行政内》教育委員会は、小・中学校で次世代育成支援に力を入れているものの、「いのちのふれあい事業」を行うには授業数が過密であることから、時間の確保が困難であり、今後の実施に向けての課題解決が必要である。

《行政外》情報の共有化や連携が大切であるが、個人情報保護に配慮することが必要である。

（６）今後つながっていきたい組織、団体

小学校・中学校と連携して情報の共有を図りサポートすることは、次世代育成支援対策施策の観点からも必要である。また、協働の観点からは、市民のニーズに応じて、民間企業や市民団体などと共に、子育て支援事業の共催に取り組みたい。

5. 熊取町

（１）現在、つながりのある組織、団体

熊取町では子ども施策を総合的かつ効果的に推進する組織として、健康福祉部と教育委員会の協働組織である「子ども家庭課」を設置している。そして、地域子育て支援体制の中核として「次世代育成支援対策協議会」を組織し、児童相談体制の中核として「子ども相談ネットワーク会議（要保護児童対策地域協議会）」を組織している。それぞれの構成団体は以下の通りである。

１）次世代育成支援対策協議会

協議会の特徴として「0歳～18歳の全ての子どもの育ち」をテーマとした「熊取豊かな子どもの育ちネットワーク会議」を設け、子ども家庭課、教育委員会、健康課、公立保育所、民間保育所、小学校、中学校、学童保育所など関係機関とつながっている。事業等の実施にあたっては、ボランティアで活動する住民組織とも深くつながっている。

２）子ども相談ネットワーク会議（熊取町要保護児童対策地域協議会）

子ども家庭課、健康課、学校教育課、保育所、幼稚園、小学校、中学校、学童保育所、岸和田子ども家庭センター、泉佐野保健所、泉佐野警察署、施設関係 等

（２）つながっている形態

子ども施策を統括する組織体「子ども家庭課」の設置（児童福祉主管課である「子ども家庭課」に学校指導参事と健康係長が兼務）により福祉分野と教育分野がつながっており、事業等も一緒に行っている。

また、学校や保育所等とは会議体としてつながっており、事業も一緒に行っている。

（３）つながっていったきっかけ

１）関係機関とのつながり

①課の再編

「児童虐待」等子どもの相談内容が複雑化・多様化する中、また、児童相談業務について法的に市町村の責務が明確化される中、子どもの相談業務を柱として子ども施策全体をコーディネートできる組織を作っていこうと、平成17年に福祉課児童福祉係から子育て支援課（児童福祉係と子育て支援係）に課が再編され、子育て支援係に保健師とスーパーバイザー（児童相談OB）が配属された。

②子ども相談ネットワーク会議

平成17年度の児童福祉法の改正で、児童相談体制の充実が大きなテーマとなった。一方、子

育て支援事業の実施や、学校との連携、長年活動が続けている子育て支援の住民組織との連携などの課題を含めて、どういった推進体制（組織）を作っていくか「子どもの相談体制検討会議」において議論された。その結果、平成18年度から、教育委員会と健康福祉部の兼務体制として「子ども家庭課」が設置された。

同時に要保護児童対策地域協議会の取組みとして、町内すべての小中学校、保育所、幼稚園、学童保育所等を巡回し、虐待や障がい、不登校など気になる子について個別ケース検討会議を積極的に持つように努めた。要保護児童対策地域協議会において、子どもや家庭の情報を共有し支援方法を協議することで、学校や保育所の抱え込んでいた課題が解決され、学校の門が一気に開かれた。かなり重篤な相談業務を通して、学校とのつながりがより深くなっていった。

③熊取豊かな育ちネットワーク会議

子どもの育ちを0歳から18歳までトータルに捉えることで、乳幼児期には何が必要なのか、学童期には何が必要なのかと考える視点がある。小学校や中学校の先生が、問題を起こした子を見たときに、この子の小さいときはどうだったのかということを知りたい、反対に保育士は担任した子はどんな風に成長しているのかということを知りたいという自然な思いから、保育所から小学校、学童保育、中学校までがネットワーク会議を通してつながった。

2) 住民組織とのつながり

平成13年に母子保健計画を住民参加で作し、健康課とお母さんたちの共同企画で子育て講座を開いたことから発展して子育てパークの事業になった。一方、生涯学習課の「地域教育協議会」が「よっちょーえ」という事業を開催していた。17年度からは両方を合わせて「子育てパークよっちょーえ」となった。親子劇場や子育てネットワーク、文庫活動など住民組織が緩やかにつながる機会となり、その後、新しいNPO団体へと発展し、地域の子育て支援の一端を担ってくれている。

(4) 関係やつながりをつくるために行っている工夫

18年度と19年度に一人ずつ社会福祉士を配置し、また、教育委員会や健康課との兼務体制を敷くなど、町はこの施策を重要なことだと認識し実施した。町内20ヵ所の小中学校、保育所、幼稚園を巡回することは恒例となり、それ以外にも困ったことがあればすぐに駆けつけるという体制を作っている。かなり根付いてきているが、根付かせるための努力を日々続けているというのが現状である。

要保護児童対策地域協議会におけるケース検討会議が年間100回にものぼるのは、少しの時間でも調整して会議を開いてきた結果で、重篤なケースになる前に軽症で済んでいることにつながっている。

「きずなシートによるつながり」

支援の必要な子どもについて、その子の就学前に、親と保育士、保健師が一緒になって「きずなシート」を作成し、小学校そして中学校へと引き継いでいる。虐待などで親の了解が得られない場合は、要保護児童対策地域協議会の関係者の中で引き継いでいく。「きずなシート」を作る際、福祉からの流れと、支援教育とが別々にならないようにと教育委員会でも福祉部局でも使えるものにした。

（５）関係やつながりをつくる上での課題

義務教育終了後の青年期となるとなかなか接点がなく、中高生の居場所づくりや不登校の子どもへの支援についても、学校やNPO等が通常業務の中の可能な範囲で取り組んでいるのが現状である。しかし、「気になる」子育て家庭が増加する中、組織や団体とつながるだけではすくい上げられない子どもたちに、どうつながりを作っていくかが課題である。

（６）今後つながっていききたい組織、団体

中高生など、次に親になる世代とつながっていききたいと思うが、学校からの依頼を受け、「職業体験」や「性教育」の話をしに行く程度である。これらの取り組みについては、社会教育の視点が重要であり、学校教育・社会教育・児童福祉分野の行政やNPO団体と協働体制を模索している。

第5章

地域における子育て支援のあり方に関する課題

第5章 地域における子育て支援のあり方に関する課題

本章においては、プロジェクトのまとめを示すとともに、地域における子育て支援の今後の課題について検討を行う。

プロジェクトの主な取り組みについては、以下のように整理される。

- ① 子育て支援者が「気になる」と感じる子育て家庭について、統計的手法により客観化する。
- ② モデル地区で取り組まれている支援プログラムを紹介するとともに、その効果について分析・評価を行う。
- ③ モデル地区における地域の連携や協働など「つながり」を中心にした子育て支援の取り組みを紹介し、「安心した子育て」「健全な子どもの育ち」を実現するための地域における支援体制のあり方について検討を行う。

これらの取り組みに対する、分析や考察を行うとともに、プロジェクトの調査・研究の成果を踏まえつつ、地域の「子育て支援」における今後の課題について検討を加える。

第1節 支援を必要とする家庭の把握

子育て支援者が「気になる」と感じる子育て家庭に関する調査を行った結果、支援者の職種や所属機関・組織、子育て経験の違いにより「気になる」感じ方に違いが見られた。この「気になる」感じ方の違いを、支援を必要とする家庭の把握につなげるため考察を行う。

1. 支援者自身の自己覚知

本調査で見られた「気になる」感じ方の違いは、子育て支援者の主観が反映されているものであり、支援者の価値観の影響を受けていると思われる。支援者の価値観を形づくる要素として、「当事者性」と「専門性」の2点に着目をした。

まず、「当事者性」（本調査では、「子どもの有無」「未就学児の有無」「子育ての楽しさ感、つらさ感」で規定）についてであるが、支援者自身の子育て経験との関係で見ると、子育てをしたことがある支援者の方が、各項目において「気になる」とする割合が高くなった。また、子育てが「楽しかった」とする支援者の「気になる」とする割合が、「つらかった」とする支援者に比べて、高い結果がみられた。

子育ては日常的な行為であり、支援対象者に対しても、支援者自身の経験を反映してしまいやすいため、支援者は自身で、どのような家庭を「気になる」と感じるのか、その傾向を知っておくことが求められる。

次に、「専門性」（本調査では、「資格」で規定）についてであるが、「看護師」、「保健師」、「小学校教諭」の有資格者の平均値は、無資格者の平均値を上回っているのに対し、「保育士」、「幼

稚園教諭」の有資格者の平均値は、無資格者の平均値より下回っており、資格の有無による傾向の違いが見られた。

様々な資格を有する支援者についても、その資格による傾向の違いを自覚することが求められる。

2. 子育て家庭からの「気づいて」サイン

～支援者相互での「気になる」感じ方の把握～

調査結果をみると、所属している機関・組織による「気になる」感じ方に違いがあり、「行政福祉部門」「行政保健部門」などの所属者の平均値は、非所属者の平均値を上回っているのに対して、「保育所」「幼稚園」「NPO・ボランティア」では、所属者の平均値は非所属者の平均値より下回っていた。

これらの違いは、それぞれの機関・組織に求められる役割と、直面している状況の違いであると考えられる。つまり、問題発見が求められるスクリーニング型の機関・組織で、比較的高いリスクの家庭に対応している「行政福祉部門」「行政保健部門」と、日常の支援を求められる寄り添い型の機関・組織で、比較的低リスクが低い家庭に対応している「保育所」「幼稚園」「NPO・ボランティア」の違いであるといえる。

子育て支援者が、どのような家庭を「気になる」と感じ、あるいは「気にならない」と感じるのかを相互に知ることは、自身の「気になる感じ方」を客観的に把握し、また他者の「気になる感じ方」を学ぶ上で必要なことであり、何よりも問題を抱える家庭への支援全体の質を高める上で重要なことである。子育て支援の質は、時として専門性が求められたり、当事者性が求められたり、共感する場が求められたりなど、支援の対象となる家庭によって異なる。子育て支援者と支援を必要とする家庭が相互に関わりあう中で、最も適切な支援を提供するためには、支援者が地域における連携や協働などの「つながり」をもち、相互に「気になる」感じ方を共有することが求められる。

今回の調査で作成した項目は、あくまで子育て支援者が「気になる」と感じたものであるが、子育て家庭を主体としてみると、これらの項目は子育て家庭からの「気づいて」サインとして捉えることができる。

なお、個々の子育て家庭を取り巻く状況や環境により、外部からは同じように見える子育て家庭でも、異なるサインを出すことが考えられるため、そのような家庭をチェックするためのリストとして、作成した項目を使用することは、控えなければならない。

本プロジェクトでは、リスクが一定程度ある家庭から、多少の問題は抱えていても自己解決能力のある家庭まで、幅広い家庭を対象としている。また、地域や社会との関わりや支援の方法、度合いにより、どの家庭もリスクや状態が変化する可能性をもっている。

このような状況に対応するためには、以上の点に留意し、一つの家庭に対して、様々な視点を持った職種や機関・組織が見守り、関わることを求められる。

第2節 支援を必要とする家庭への対応

支援プログラムに関する調査を行った結果を基に、プログラムが参加者にどのような効果を及ぼしたのかを考察する。

1. 支援プログラムの分析・評価

ここでは、モデル地区の支援プログラムについて、その効果を分析し、評価を行う。プログラムの概要は、第3章 第2節に示している。これらのプログラムについては、「親」「親と子ども」「子ども」を対象者とする「拠点型」と、「親と子ども」を対象とする「訪問型」に分類できる。図表5-1はプログラムの対象者別の効果測定の結果を示したものである。測定の結果や第3章 第2節の内容を基に、プログラムの効果を分析し、評価する。

なお、今回の調査においては、測定結果の母数となる調査対象者数が少ないプログラムがあることを、断っておく。

図表 5 - 1 プログラムの対象者別効果測定一覧表

項目	アンケート 調査時期	プログラム全体		拠点型						訪問型	
				親		親と子ども		子ども		親と子ども	
		度数	平均値	度数	平均値	度数	平均値	度数	平均値	度数	平均値
毎日くたくたに疲れる	実施前	125	2.56	40	2.80	21	2.38	59	2.49	5	2.20
	実施後	125	2.52	40	2.63	21	2.29	59	2.53	5	2.60
朝、目ざめがさわやかである	実施前	126	2.44	41	2.34	21	2.67	59	2.47	5	2.00
	実施後	126	2.44	41	2.29	21	2.67	59	2.49	5	2.20
考えごとがおっくうでいやになる	実施前	123	2.23	39	2.51	21	1.81	58	2.17	5	2.40
	実施後	123	2.20	39	2.59	21	1.76	58	2.14	5	1.60
毎日、はりつめた緊張感がある	実施前	122	1.79	41	2.00	20	1.50	57	1.70	4	2.25
	実施後	122	1.81	41	2.07	20	1.35	57	1.79	4	1.75
生活にゆとりを感じる	実施前	123	2.28	39	2.15	20	2.65	59	2.29	5	1.80
	実施後	123	2.37	39	2.15	20	2.75	59	2.41	5	2.00
子どもがわずらわしくてイライラしてしまう	実施前	121	2.15	*	40	2.63	20	1.55	56	2.05	*
	実施後	121	2.01		40	2.43	20	1.65	56	1.88	
自分は子どもをうまく育てていると思う	実施前	122	2.27		40	2.10	20	2.45	57	2.35	5
	実施後	122	2.31		40	2.18	20	2.60	57	2.35	5
子どものことで、どうしたらよいかわからなくなることがある	実施前	125	2.55		41	3.00	21	2.19	59	2.36	4
	実施後	125	2.58		41	2.95	21	2.29	59	2.41	4
子どもは結構一人で育っていくものだと思う	実施前	126	2.33	*	41	2.44	21	2.62	59	2.15	*
	実施後	126	2.57		41	2.46	21	3.14	59	2.42	
子どもをおいて外出するのは心配で仕方がない	実施前	125	2.89		41	2.63	20	3.00	59	3.05	5
	実施後	125	2.90		41	2.73	20	3.10	59	2.93	5
自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう	実施前	125	1.81		41	2.00	21	1.52	58	1.72	5
	実施後	125	1.80		41	2.27	21	1.38	58	1.60	5
育児によって自分が成長していると感じられる	実施前	125	3.18		41	3.15	21	3.52	59	3.08	4
	実施後	125	3.28		41	3.37	21	3.38	59	3.17	4
毎日毎日、同じことのくり返ししかしていないと思う	実施前	124	2.39		41	2.68	20	2.35	58	2.14	5
	実施後	124	2.37		41	2.63	20	2.15	58	2.22	5
子どもを育てるためにがまんばかりしていると思う	実施前	124	2.09		40	2.43	21	1.90	58	1.86	5
	実施後	124	2.13		40	2.45	21	1.95	58	1.97	5
合計得点	実施前	108	34.53	*	35	36.94	19	31.11	52	34.06	2
後得点まとめ	実施後	108	33.90		35	36.77	19	30.58	52	33.23	2

* 5 %水準の有意差あり

(1) 拠点型の支援プログラム

1) 「親」を対象とした支援プログラム

4つのプログラムを合算した効果測定の結果では、有意差が認められる項目はなかった。

しかし、子どもへの関わり方についてのスキルを実践することにより親子関係に良い効果が表れている傾向が見られる。また、「自分自身をみつめなおす」「自身や自己肯定感を持つ」など子育てだけに限らない、親のこれからの生き方に影響を及ぼす効果もうかがえる。これらの効果は、すべてのプログラムが保育付きでゆったりと安心した環境で行われていることにも関係があると考えられる。

一部のプログラムでは、実施後に育児についてのネガティブな意識を尋ねる項目の平均値が上昇するという結果がみられた。この結果は、プログラムが意図する効果と逆の効果を及ぼしているというわけではなく、これまでの自らの思いに初めて明確に気づく「自己覚知」があったと考えられ、プログラムを実施する目的に合致していると推察される。

2) 「親と子ども」を対象とした支援プログラム

有意差が認められる項目は1項目で、「子どもは結構一人で育っていくものだと思う」は、プログラム実施前に2.62であった平均値が、プログラム実施後に3.14と、0.52増加した。

このことから、ある親子が他の親子と触れ合う中で、一緒に遊びながら友だちができ、親は、子どもが他の子どもたちとの遊びや関わりを通して社会性を身につけ、成長していく様子を客観的にみつめることなどで、みんな同じように子育てをしているという共通認識や、多様な子どもたちの存在や状況を知ることにより、気持ちの上でゆとりが生まれ、このような結果が表れていると考えられる。

3) 「子ども」を対象とした支援プログラム

有意差が認められる項目は2項目で、「子どもがわずらわしくてイライラしてしまう」は、プログラム実施前に2.05であった平均値が、プログラム実施後に1.88と、0.17減少しており、「子どもは結構一人で育っていくものだと思う」は、プログラム実施前に2.15であった平均値が、プログラム実施後に2.42と、0.27増加した。

このことから、子ども向けの理解しやすいプログラムで、楽しく遊びの感覚で学ぶことができ、子どもが学びを通して成長していく様子に対する親の驚きには大きなものがあり、家庭における子どもの変容に対する親の評価が、結果に反映されていると考えられる。

(2) 訪問型の支援プログラム

効果測定の結果では、有意差が認められる項目はなかった。

しかし、実施前と実施後の効果測定を見ると、多くの項目で平均値に大きな差がみられた。個別対応により、じっくりと話が出来ることや、外に出られない状態の時に、訪問を受けて相

談を行い、確かな情報を得られることは、利用者の不安感や疑問を解消し、大きな安心感につながっていることがうかがえる。

また、訪問をきっかけとした支援センターへの来所や、ファミリー・サポート・センターやイベントの紹介を通して他の子育て中の親と話す機会を持つなど、親の気持ちが外に向き、ストレス解消につながるという効果もみられた。

2. まとめ

以上、対象者別に支援プログラムの分析・評価を行ったが、それぞれに特徴があり、効果が認められる。プログラムを必要としている家庭に適切なタイミングでプログラムを提供するためには、様々な機関や組織で、より一層、多様なプログラムを実施することが重要である。

また、外に出られない状態、あるいは外に出ることがためられる状態の時には、訪問型のプログラムが大きな意味を持つ。訪問を受けたことが、外に出るきっかけになった事例もみられることから、多様な家庭への支援のためには、今後、訪問型のプログラムの充実や、訪問型と拠点型のプログラムの連携がさらに重要になるであろう。

第3節 地域の連携

地域という範囲を市域全域、小学校区、中学校区、町会単位など、どうとらえるかは様々な考えがある。しかし、子どもの健全な発達や、支援を必要とする子育て家庭のために、地域の人々や機関がつながることについては、多くの人がその意義を感じているところである。

本節では、支援プログラムを実施した5市町に、「地域の連携」についてヒアリングを行った結果をもとに、望ましい「地域の連携」とは何かについて、考察を行う。

1. 目的に応じた連携

5市町における「地域の連携」を目的別に見た場合、一つは虐待等要保護の児童に対する個別支援を目的とした連携、もう一つは子育て支援や子どもの健全育成を目的とした連携と、大きく二つに分けることができる。

(1) 要保護児童に対する個別援助を目的とした地域の関係機関との連携

平成16年度の児童福祉法の改正により、市町村における要保護児童対策地域協議会の設置が規定され、平成17年4月1日より施行された。図表5-2のように平成17年度当時、要保護児童対策地域協議会又は児童虐待ネットワークの設置率が全国平均で50.7%と半数程度であったことに比べ、大阪府での設置率は100%であった。

第1章 第2節の図表1-1にある児童虐待相談件数における大阪府の突出した数字の要因は、児童虐待の実数が多いというよりも、要保護児童対策地域協議会の設置を始めとして、早くから児童虐待に取り組んできた結果であるとも考えられる。

図表 5－2 要保護児童対策地域協議会又は虐待防止ネットワークの都府県別設置状況

	平成17年 6月1日現在	平成18年 4月1日現在	平成20年 4月1日現在	平成21年 4月1日現在
大阪府	100%	100%	100%	100%
東京都	64.5%	69.4%	91.9%	93.5%
兵庫県	45.8%	85.4%	100%	100%
神奈川県	100%	100%	100%	100%
全国合計	50.7%	69.0%	94.1%	97.6%

出典：厚生労働省「市町村の児童家庭相談業務の状況及び要保護児童対策地域協議会の設置状況等について（平成21年4月現在）」、
「市町村の児童家庭相談業務の状況及び要保護児童対策地域協議会の設置状況等について（平成20年4月現在）」、
「市町村域での要保護児童対策地域協議会及び児童虐待防止を目的とするネットワークの設置状況調査の結果について（平成18年4月調査）」、
「市町村域での要保護児童対策地域協議会及び児童虐待防止を目的とするネットワークの設置状況調査の結果について（平成17年6月調査）」から作成。ただし、平成17年度は指定都市を除いている

5市町に対するヒアリングでは、困難な対応事例を通して関係機関が連携してきたという声を多く聞いた。虐待等の困難事例への対応が、連携せざるをえない状況を作ってきたと言える。現在、各市町においては、要保護児童対策地域協議会が、児童虐待を重症化させないためにも、また、関係機関をつなぐかなめとしても、有効に機能している。

一方で、学校、教育委員会など教育部門との連携が難しいという声も聞かれた。現在、スムーズに連携できている各市町も、当初は大変な労力を要したという。児童本人への支援を中心に取り組む学校や教育委員会と、親や家族など児童をとりまく環境への支援を中心に考える福祉の部局では、その対応に違いが生じて当然である。しかし、連携することのメリットをそれぞれの機関が体得することで、それぞれの強みを生かして両面から支援することの意義が定着しつつあると考えられる。

また、事例に円滑に対応するためには、学校を定期的に巡回したり、他の機関からのSOSに対して即座に行動するなど、各機関と日常的かつ継続的な連携を行うことが求められるが、個別対応を行う際の情報の共有や連携において、個人情報保護や守秘義務に格別の配慮が必要であることはいうまでもない。

（２）子育て支援や子どもの健全育成を目的とした地域の関係機関との連携

各市町が、子育て支援や子どもの健全育成を目的として、次世代育成支援対策に関連する協議会や子育て支援のネットワークなど、連携するための機関や組織を作っていることも、注目すべき点である。

前述した地域協議会では、要保護の児童や家庭という限られた範囲内で、事例が発見された後にしか支援できない。これに対し、子育て支援や子どもの健全育成を目的とした地域の機関

や組織では、すべての児童、家庭を対象に予防的に支援することが可能となる。また、公的機関だけでなく、PTAや子ども会、NPO法人など地域の多様な団体によって組織されるため、地域づくりの一翼を担うこともできる。

しかし、各市町に対するヒアリングによると、組織を構成する団体の間に力関係が生じたり、目的とは異なることに利用されることもあり、組織が形骸化しないように維持するためには、かなりの工夫や努力が必要とされることも報告されている。

2. 地域住民や地域で活動する団体との連携

(1) 地域住民による個別援助

大阪府内D市の子育てアドバイザー、E市の子ども家庭サポーターなど、それぞれ養成講座の研修を受講した地域住民が、「気になる」家庭を訪問して相談に応じ、家事をサポートして個別援助を行っている実践例がある。

公的機関では手が届かない部分を補完するだけでなく、同じ地域の住民として、児童や家庭に対して長期にわたり継続的に関わっていけるメリットは計り知れない。

(2) 事業委託による地域で活動する団体との連携

近年、「つどいの広場事業」など子育て関連の事業において、NPO法人や地域で活動する団体が行政から事業を委託される場面が増えてきた。大阪府内F市ではNPO法人などへの事業委託に対して、定期的に巡回を行いサービスの質を確保している。

これらの団体は当事者性が高く、より親密に子育て家庭に寄り添うことができるメリットがあることから、行政もこれらの団体との連携を積極的に行いつつある。

(3) 地域住民や地域で活動する団体のネットワーク

行政が住民にサービスを提供し、住民はそれを受けるという従来の関係だけではなく、例えば、子育てサークルに助成する、子育てサークルの連絡会を組織する、NPO法人間の連携を企画するといった、住民間の顔の見える関係づくりを積極的に行ったり、住民相互が助け合い、育ちあう場を提供するなど、行政は地域の連携を側面から支援しているということにも注目したい。住民同士のつながりの中から、子育てや生活の課題を解決していくという経験は、とりもなおさず住民の主体性を育てていくことにつながる。

3. まとめ

本プロジェクトでは、子育て支援者が「気になる」と感じる子育て家庭の調査にしても、支援プログラムの実施にしても、主に乳幼児期の子どもとその親を対象にしたものであった。

しかし、地域の連携による子育て支援についての各市町へのヒアリングでは、むしろ学童期の子どもたちへの支援における連携事例が多く出された。これまでは、行政の区分によって乳幼児・幼稚園児・保育園児・小学生・中学生と細切れにされていた支援が、事例を通して連携していく中から、0歳から18歳までの子どもの育ちを縦軸として、関連機関や地域が横につながっていくという方向が示されてきたと考えられる。さらに、次世代育成の視点から、その子どもが親になる将来までを見通した支援を加えると、生まれてから親になるまでの子どもの育ちが一本につながってくる。

このことから、今、支援者に求められていることの一つは、乳幼児期、学童期と区切ってしまうのではなく、長期間にわたる人の育ちを見ながら、時期に応じた必要な支援とは何かということについて考える視点であるといえる。

また、地域の連携を深めるために地域の子育て支援者が日々努力していることは、数々の実践例からうかがい知ることができる。人との関係の希薄さが言われて久しいが、地域をよりよくしたいと考えている人たちは少なからず存在する。組織づくりであれ、協働による事業であれ、積極的に仕掛けづくりを行うことで顔の見える関係をつくり、そのつながりを深めるためにさらなる仕掛けづくりを行う、この繰り返しを通して信頼関係が培われていくと考えられる。

地域でのつながりを子育て支援だけに終わらせるのではなく、住民との協働による地域づくりという広い視野で活用する姿勢が、支援者に求められている。

第4節 地域で取り組む子育て支援に求められる課題

1. 「社会的包摂」(social inclusion)と子育て支援

失業、ホームレス、若者のひきこもり、単身高齢者の閉じこもり、孤独死、など現代における社会問題については、「社会的排除」(social exclusion)というキーワードによって語られることが多くなった。フランスの社会学者A. トゥレーヌ (A. Touraine) は、1991年の論文の中で、人々の「上層一下層」による階級関係に依拠したかつての社会を「垂直社会」とするなら、現代は、社会との関係における「内一外」を基本原理とした「水平社会」だとしている。「水平社会」では、人々は社会とのあいだに何らかの関係を保っているということが重要で、社会との関係を保てなくなった場合には、社会から「排除されている」ということになる。

子育ての現状に目を移すと、「社会や地域の見守りが行き届かず、子どもが親に虐待行為を受ける」「地域で孤立しており、子育ての仲間がいない」「生活保護の申請方法がわからず、経済的に困窮している」「育児方法で悩んでいるが、子育て支援サービスの存在を知らない」などの状態にある子育て家庭が見受けられる。下線部分のような状況にある家庭は、社会との関係を保てなくなっており、子育てに関して社会から何らかの形で「排除されている」家庭として位

置づけることができるであろう。このような子育て家庭に対して「社会的排除」が行われる要因を分析すると、「社会的排除」を生み出しているリスクに対して、既存の子育て支援の施策やサービス、地域の見守りが有効に機能しなかった、と考えることができる。子育て支援の施策やサービス、地域の見守りから排除されることは、単にサービスが届かなかったという事態に治まらず、その家庭のリスクをより高いものにしていく。本プロジェクトにおいても、しばしばその悪循環を問題視する意見が出された。

このような悪循環を断ち切るためには、「社会的排除」と対局にある「社会的包摂」を目指した子育て支援のあり方を検討していくことが求められる。社会から何らかの形で「排除されている」家庭と社会や地域との関係を結び直し、どの子育て家庭にも子育て支援の施策やサービス、地域の見守りが行き届くような環境の整備が必要である。

2. 「社会的包摂」の視点から捉える子育て支援の課題

(1) 支援プログラムにおける「社会的包摂」の視点

1) 子育て支援における「視点の変革」

これまで、市町村では様々な支援プログラムが実施されてきたが、そのほとんどは、「親」または「親と子ども」を対象者とするものであった。本プロジェクトにおけるプログラムの新しい試みとして、「子ども」を対象者としてプログラムを実施した。これまで、子ども自身が家庭の状況を第三者に伝えることは難しかったが、プログラムを習得することによって、それが可能になったケースがあるという。また、プログラムの実施を通して、何らかの問題を抱える家庭を把握する上で成果があったという報告もなされている。さらに、本プロジェクトにおける調査結果からも一定の成果が明らかにされている。

一般的に、以下のような状況があれば、子育て支援の施策やサービスなどは、何らかの問題を抱える家庭には届かないと考えられる。

- ①支援の情報が行き届かない。
- ②居住地域に利用できる支援がないので利用できない。
- ③支援が必要な状況だと家庭は認識しているが、家庭が支援を利用していない。
- ④支援が必要な状況だと家庭が認識していない。

上記③④の場合において、困難な状況を抱えている親にプログラムを実施することは極めて難しく、その家庭は結果として「排除されている」家庭となってしまう。このような家庭に「社会的包摂」を可能にする支援を行うには、「子ども」を対象にしたプログラムの実施が効果的だ考えられる。「社会的包摂」を可能にする支援を行うために「視点の変革」を試み、子どもをプログラムの対象にしたことは、子どもが自らの置かれた状況を第三者に伝えるという意味にお

いて、児童の権利に関する条約第12条子どもの「意見表明権」の保障にもつながり、「社会的包摂」を可能にするスキルを子ども自らが身につけるという点においても、斬新な試みであると考えられる。

今回の取り組み例のように、「排除されている」家庭について、いかにして社会や地域との関係に参入、参加してもらうのかという視点から、子育て支援の施策やサービスを再検討し、「視点の変革」を試みることは、今後の子育て支援に求められる課題の一つになると考えられる。

2) 訪問型支援というアプローチ

前述の状況の③④については、従来のような拠点型の支援では限界があり、リスクが高くなる可能性のある家庭については、必要だと思われる施策やサービスへのアクセスを保障できるような取り組みを行わなければならない。そのためには、家庭の意志に関係なく、「社会的排除」という事態を避けるために訪問型支援というアプローチが求められる。本プロジェクトにおいても訪問型の支援プログラムが実践され、一定の成果が明らかにされている。

地域や社会との関係性を取り結ぶことを目的とする「社会的包摂」では、社会関係の中に家庭を取り結ぶような働きかけを行うとともに、排除された家庭を再び社会に参入、参加させる仕掛けづくりを行うことが必要である。地域で孤立している家庭については、子育て支援の手を直接差し伸べることによって、その家庭が地域に参入、参加することを可能にする。訪問型支援というアプローチは、「社会的包摂」の理念を具現化する今日的な支援方法だと考えられる。

(2) 「つながり」と「社会的包摂」

大阪府内G町で、子育て中の親2,132名にアンケート調査をしたところ、「子どもに一番身につけさせたいと思うものは何ですか」との問いに対する回答は、「基本的な生活習慣」(31.0%)や「学力」(8.4%)を押さえて「人と関わる力」が55.1%でトップであった。「人と関わる力」は、親自身が最も苦勞し、最も大切だと思っているからこそ、自分の子どもには「人と関わる力」をぜひ身につけてもらいたいと願っていることが考えられる。

本プロジェクトでは、連携や協働を「つながり」と定義し、各市町の「つながり」の事例を紹介した。組織や機関の「つながり」は、そこに所属している人と人のつながりに他ならず、また、組織と地域、機関と地域、地域の人と人のつながりなど、社会や地域は、まさに人と人が網目状につながり、相互に影響し合って構成している。G町アンケートで回答された「人と関わる力」は、現代の「水平社会」における人と人の関係性の重要さを、親自身が体得していることを物語っているといえよう。

地域の子育て支援における「社会的包摂」を可能にする「つながり」には、行政だけでなく、NPO法人や市民活動、町会の隣組など、社会全体、地域全体のネットワークを有機的に結び、コーディネートを行う人材が必要である。本プロジェクトでは、それぞれのモデル地区にコーディネートの役割を担う人材がおり、「つながり」を取り結ぶだけではなく、有機的に機

能させるために「仕掛けづくり」をしたり、子育て家庭に直接サービスを提供したり、より有効なサービスの開発をしたりと子育て支援サービスを充実させるために日々奮闘していた。

地域における子育て支援の総合的かつ重層的な実施に向けては、子どもの育ちを見通し、自立までの経緯を見守る子育て支援システムの構築や、そのシステムを統括し、コーディネートする役割を担う人材の育成と登用が必要である。

参考文献：

樋口昭彦「現代日本における社会的排除—格差社会へのアプローチ」『教育』12月号（vol.731）、2006。

福原宏幸著『社会的排除・包摂と社会政策』（シリーズ・新しい社会政策の課題と挑戦）法律文化社、2008。

岩田正美著『社会的排除—参加の欠如・不確かな帰属』（有斐閣Insight）、有斐閣、2007。

卷末資料

資料 1

子育て支援者から見た「気になる子育て家庭」に関するアンケート調査

■ご記入にあたってのお願い

1. 回答にあたっては、各設問の指示に従い、該当する選択肢の番号に○印をご記入ください。
2. 「その他」の自由記述については、できるだけ具体的にご記入ください。

I. ご自身のことについてお聞きします。

1. あなたの性別をお答えください。
1. 男性 2. 女性
2. あなたの年齢をお答えください。
1. 10歳代 2. 20歳代 3. 30歳代 4. 40歳代
5. 50歳代 6. 60歳代 7. 70歳代 8. 80歳代
3. 勤務・活動されている市町村名をお答えください。()市・町・村
4. あなたの所属する機関・組織について、あてはまるものを1つ選んで○印をご記入ください。
1. 行政福祉部門（子育て支援担当課等） 2. 行政保健部門（保健センター等）
3. 公立保育所 4. 私立保育園 5. 公立幼稚園 6. 私立幼稚園
7. 家庭児童相談室 8. 子育て支援センター 9. NPO・ボランティアグループ
10. 公民館 11. その他()
5. あなたがお持ちの資格について、あてはまるものをすべて選んで○印をご記入ください。
1. 保育士 2. 看護師 3. 保健師 4. 社会福祉士
5. 臨床心理士 6. 幼稚園教諭 7. 小学校教諭 8. 中・高校教諭
9. その他()
6. あなたはお子さんがいらっしゃいますか。
1. いる 2. いらない
7. 問6で「1. いる」と答えた方にお尋ねします。あなたは現在、未就学のお子さんの子育てを
していらっしゃいますか。
1. している 2. していない

8. 問6で「1. いる」と答えた方にお尋ねします。あなた自身の子育ての経験についてあてはまるものを1つ選んで○印をご記入ください。

- | | | |
|-------------|----------|-------------|
| 1. とても楽しかった | 2. 楽しかった | 3. 少し楽しかった |
| 4. 少しつらかった | 5. つらかった | 6. とてもつらかった |

9. あなた自身の子育て支援の活動について、あなた自身はどのように感じていますか。あてはまるものを1つ選んで○印をご記入ください。

- | | | | |
|--------------|-----------|---------------|------------|
| 1. とても充実している | 2. 充実している | 3. あまり充実していない | 4. 充実していない |
|--------------|-----------|---------------|------------|

10. 子育て支援者として、あなた自身の活動についてあてはまるものをすべて選んで○印をご記入ください。

- | | | |
|----------------------|--------------------------|----------------|
| 1. 地域に貢献している | 2. 地域にあまり貢献していない | |
| 3. 自分自身のスキルや力量不足を感じる | 4. 支援対象者の態度や反応にがっかりする | |
| 5. 相談できる人がいない | 6. 仲間との連帯感がある | 7. 支援対象者に感謝される |
| 8. 支援対象者の課題が緩和、解決する | 9. 支援対象者の課題がなかなか緩和、解決しない | |
| 10. その他（ | ） | |

Ⅱ. 地域における連携についてお聞きします。

1. あなたにとって「地域」とは、どの範囲だと考えていますか。あてはまるものを1つ選んで○印をご記入ください。

- | | | | | |
|-------------------------|------------|------------|---------|---|
| 1. 隣近所（10世帯程度の最も身近な集まり） | 2. 自治会・町内会 | 3. 小学校区 | | |
| 4. 中学校区 | 5. 市町全域 | 6. よくわからない | 7. その他（ | ） |

2. あなたが経験した地域活動について、あてはまるものをすべて選んで○印をご記入ください。

- | | | |
|------------|--------|--------|
| 1. 自治会・町内会 | 2. 婦人会 | 3. PTA |
| 4. その他（ | ） | |

3. あなたが「気になる子育て家庭」を支援する時に、連携が必要だと思う地域の機関・組織等はどこですか。あてはまるものをすべて選んで○印をご記入ください。

- | | | | |
|----------------------|--------------------|------------|--------------|
| 1. 行政福祉部門（子育て支援担当課等） | 2. 行政保健部門（保健センター等） | | |
| 3. 保育所 | 4. 幼稚園 | 5. 家庭児童相談室 | 6. 子育て支援センター |
| 7. NPO・ボランティアグループ | 8. 公民館 | 9. 教育委員会 | |
| 10. 小学校 | 11. 中学校 | 12. 病院、医院 | 13. 自治会・町内会 |
| 14. 民生委員・児童委員・主任児童委員 | 15. 社会福祉協議会 | 16. 警察 | |
| 17. 子育てサークル等当事者組織 | 18. その他（ | ） | |

4. あなたが「気になる子育て家庭」を支援する時に、実際に連携している地域の機関・組織等はどこですか。あてはまるものをすべて選んで○印をご記入ください。

- | | | | |
|----------------------|--------------------|------------|--------------|
| 1. 行政福祉部門（子育て支援担当課等） | 2. 行政保健部門（保健センター等） | | |
| 3. 保育所 | 4. 幼稚園 | 5. 家庭児童相談室 | 6. 子育て支援センター |
| 7. NPO・ボランティアグループ | 8. 公民館 | 9. 教育委員会 | |
| 10. 小学校 | 11. 中学校 | 12. 病院、医院 | 13. 自治会・町内会 |
| 14. 民生委員・児童委員・主任児童委員 | 15. 社会福祉協議会 | 16. 警察 | |
| 17. 子育てサークル等当事者組織 | 18. その他（ | | ） |

5. 「気になる子育て家庭」を支援する際の地域での連携について、あてはまるものを1つ選んで○印をご記入ください。

- | | | |
|------------------|-----------------|----------|
| 1. とてもうまく連携できている | 2. ややうまく連携できている | |
| 3. あまりうまく連携できてない | 4. うまく連携できていない | 5. わからない |

6. 5で1、2を選んだ方にお聞きします。「うまく連携できている」理由は何だと思われますか。
（以下の空白に、ご自由にお書きください。）

7. 5で3、4を選んだ方にお聞きします。「うまく連携できてない」理由は何だと思われますか。
（以下の空白に、ご自由にお書きください。）

Ⅲ.「気になる子育て家庭」についてお聞きします。

1. 下記のそれぞれの文章は、あなたが思う「気になる子育て家庭」の特徴に、どの程度あてはまるでしょうか。「非常によくあてはまる」場合は6に、「あてはまる」場合は5に、「ややあてはまる」場合は4に、「ややあてはまらない」場合は3に、「あてはまらない」場合は2に、「まったくあてはまらない」場合は1に、それぞれ○印をご記入ください。

	非常によく あてはまる					まったく あてはまらない
1. あいさつなど人とのコミュニケーションがうまくとれない親	6	5	4	3	2	1
2. 子どもに視線を向けていない	6	5	4	3	2	1
3. 相手に直接話すよりも、メールに頼る	6	5	4	3	2	1
4. 夫または妻の親との関係がうまくいっていない	6	5	4	3	2	1
5. 親が体調面で不安定である	6	5	4	3	2	1
6. ギャンブルや薬物・お酒等への依存傾向が強い	6	5	4	3	2	1
7. 経済的に苦しく、生活や子育てに余裕がない	6	5	4	3	2	1
8. 子どもに朝食を食べさせていない	6	5	4	3	2	1
9. 子どもの言動、表情、容姿等に急激な変化が見られる	6	5	4	3	2	1
10. 親の言動、表情、容姿等に急激な変化が見られる	6	5	4	3	2	1
11. 子どもの発達や環境を気にしすぎる	6	5	4	3	2	1
12. 困ったことがあっても自分から相談しない親	6	5	4	3	2	1
13. 親に自信がなさすぎる	6	5	4	3	2	1
14. 子どもが親の所に行かない	6	5	4	3	2	1
15. 多胎あるいは年子で親の負担が大きい	6	5	4	3	2	1
16. 子どもの発達の遅れを気にしながらも目をそらす	6	5	4	3	2	1
17. 地域の中で孤立した親子	6	5	4	3	2	1
18. 父親が子育てに協力的でない	6	5	4	3	2	1
19. 親がDVを受けている	6	5	4	3	2	1
20. 転入や転勤で近所に知り合いがいない	6	5	4	3	2	1
21. 子どもの服がいつも汚れている	6	5	4	3	2	1
22. 自己否定されたという被害妄想を抱きやすい親	6	5	4	3	2	1
23. 子どもが泣いていても抱っこしない	6	5	4	3	2	1
24. 親が精神的に不安定である	6	5	4	3	2	1
25. 人の話を集中して聞けない親	6	5	4	3	2	1

26. よい親になることに縛られる	6	5	4	3	2	1
27. よく泣く、笑わないなど子どもの情緒が不安定である	6	5	4	3	2	1
28. わざわざ問題を起こして支援者の対応を試す親	6	5	4	3	2	1
29. 子どもへの言葉がけが乱暴である	6	5	4	3	2	1
30. 家の中が片付けられていない	6	5	4	3	2	1
31. 苦情や要望が多い	6	5	4	3	2	1
32. 状況に即した臨機応変の対応ができない	6	5	4	3	2	1
33. 子どもに干渉しすぎる	6	5	4	3	2	1
34. 言葉より先に手や足が出る親	6	5	4	3	2	1
35. 子どもがかむ、ひっかく、突くなど問題を起こす	6	5	4	3	2	1
36. 親同士の交流をもちたがらない	6	5	4	3	2	1
37. 子どもが親の目を気にしすぎる	6	5	4	3	2	1
38. 同じ事を何度も確認する親	6	5	4	3	2	1
39. 子どもをでき愛しすぎる	6	5	4	3	2	1
40. 支援が必要な状態なのにそれを認めたがらない	6	5	4	3	2	1
41. 持ってくるもの、行事など忘れる事が多い	6	5	4	3	2	1
42. 自分の子がかわいくないと言う	6	5	4	3	2	1
43. 小さいときからたくさんの習い事をさせる	6	5	4	3	2	1
44. 場にそぐわない身なりをしている	6	5	4	3	2	1
45. 子どもにアレルギーや発達の心配事がある	6	5	4	3	2	1
46. 他人の目を気にしすぎる親	6	5	4	3	2	1
47. 子どもの体調が悪くても仕事や自分の用事を優先する	6	5	4	3	2	1
48. 日中のかなりの時間を子育て支援機関で過ごす	6	5	4	3	2	1
49. 入浴や歯みがきなどの世話が十分でない	6	5	4	3	2	1
50. 主体性に乏しく人に合わせすぎる親	6	5	4	3	2	1
51. 子どもをお人形のように着飾る	6	5	4	3	2	1
52. 年齢に応じた子どもとの関わり方・遊び方が分からない	6	5	4	3	2	1
53. 夫婦関係が上手くいっていない	6	5	4	3	2	1
54. 夜遅くなっても子どもを寝かしつけない	6	5	4	3	2	1
55. 連絡なしで欠席する	6	5	4	3	2	1

2. 「気になる子育て家庭」への支援について、うまく支援できた例をお聞かせください。

（以下の空白に、ご自由にお書きください。）

3. 「気になる子育て家庭」への支援について、うまく支援できなかった例をお聞かせください。

（以下の空白に、ご自由にお書きください。）

アンケートは以上で終了です。ご協力ありがとうございました。

資料 2

効果測定事前調査

子育てに関するアンケート

I. ご自身のことについておたずねします。

1. あなたの性別をお答えください。あてはまるものに○印をご記入ください。

1. 男性 2. 女性

2. あなたの年齢を教えてください。 () 歳

3. 現在のあなたの職業について、あてはまるものを1つ選んで○印をご記入ください。

1. 専業主婦 2. フルタイム 3. パート・アルバイト 4. 育児休業中
5. 自営業 6. 学生 7. その他（ ）

4. 現在同居している人はどなたですか。あてはまるものすべてに○印をご記入ください。

1. パートナー 2. 子ども（ 人） 3. パートナーの母親
4. パートナーの父親 5. 自分の母親 6. 自分の父親
7. その他（ ）

5. お子さまの年齢、性別についておたずねします。年齢をご記入の上、あてはまる性別に○印をご記入ください。

- (歳 か月 男・女) (歳 か月 男・女)
- (歳 か月 男・女) (歳 か月 男・女)
- (歳 か月 男・女) (歳 か月 男・女)

6. 身近に子育てについて相談したり、協力してもらえる人はいますか。

1. はい 2. いいえ

7. 問6で1. いるとお答えになった方のみ回答ください。

子育てについて相談にのってくれたり、助けてくれるのはどのような人ですか。

()

1. 6か月未満 2. 6か月から1年未満 3. 1年から3年未満
4. 3年から5年未満 5. 5年以上

「あてはまる」場合は4に、「ややあてはまる」場合は3に、「あまりあてはまらない」場合は2に、「あてはまらない」場合は1に、それぞれ○印をご記入ください。

	あて はまる	あて はまらない
1. 毎日くたくたに疲れる	4—3—2—1	
2. 朝、目ざめがさわやかである	4—3—2—1	
3. 考えごとがおっくうでいやになる	4—3—2—1	
4. 毎日、はりつめた緊張感がある	4—3—2—1	
5. 生活にゆとりを感じる	4—3—2—1	
6. 子どもがわずらわしくてイライラしてしまう	4—3—2—1	
7. 自分は子どもをうまく育てていると思う	4—3—2—1	
8. 子どものことで、どうしたらよいかわからなくなることがある	4—3—2—1	
9. 子どもは結構一人で育っていくものだと思う	4—3—2—1	
10. 子どもをおいて外出するのは心配で仕方がない	4—3—2—1	
11. 自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう	4—3—2—1	
12. 育児によって自分が成長していると感じられる	4—3—2—1	
13. 毎日毎日、同じことのくり返ししかしていないと思う	4—3—2—1	
14. 子どもを育てるためにがまんばかりしていると思う	4—3—2—1	

1. 子どもの仲間づくり
2. 自分の仲間づくり
3. 子育ての具体的な方法を知りたい
4. 子育てに対する知識や考え方を深めたい
5. 子育てについてのサービス情報を得たい
6. 子育ての悩みを解決したい
7. 自分の話を聞いてもらいたい
8. 他の親と情報交換をしたい
9. 子どもの成長
10. 特に期待していない
11. その他（ ）

アンケートは以上で終了です。ご協力ありがとうございました。

効果測定事後調査

子育てに関するアンケート

I. ご自身のことについておたずねします。

1. あなたの性別をお答えください。あてはまるものに○印をご記入ください。

1. 男性 2. 女性

2. あなたの年齢を教えてください。 () 歳

3. 現在のあなたの職業について、あてはまるものを1つ選んで○印をご記入ください。

1. 専業主婦 2. フルタイム 3. パート・アルバイト 4. 育児休業中
5. 自営業 6. 学生 7. その他（ ）

4. 現在同居している人はどなたですか。あてはまるものすべてに○印をご記入ください。

1. パートナー 2. 子ども（ 人） 3. パートナーの母親
4. パートナーの父親 5. 自分の母親 6. 自分の父親
7. その他（ ）

5. お子さまの年齢、性別についておたずねします。年齢をご記入の上、あてはまる性別に○印をご記入ください。

(歳 か月 男・女) (歳 か月 男・女)

(歳 か月 男・女) (歳 か月 男・女)

(歳 か月 男・女) (歳 か月 男・女)

6. 身近に子育てについて相談したり、協力してもらえる人はいますか。

1. はい 2. いいえ

7. 問6で1. いるとお答えになった方のみ回答ください。

子育てについて相談にのってくれたり、助けてくれるのはどのような人ですか。

()

8. 現在の住所にどのくらいの期間お住まいになっていますか。あてはまるものを 1 つ選んで○印をご記入ください。

1. 6か月未満
2. 6か月から1年未満
3. 1年から3年未満
4. 3年から5年未満
5. 5年以上

9. それぞれの文章は、あなたが子育てをする中でどの程度あてはまるでしょうか。

「あてはまる」場合は4に、「ややあてはまる」場合は3に、「あまりあてはまらない」場合は2に、「あてはまらない」場合は1に、それぞれ○印をご記入ください。

	あて はまる	あて はまらない
1. 毎日ぐたぐたに疲れる	4—3—2—1	
2. 朝、目ざめがさわやかである	4—3—2—1	
3. 考えごとがおっくうでいやになる	4—3—2—1	
4. 毎日、はりつめた緊張感がある	4—3—2—1	
5. 生活にゆとりを感じる	4—3—2—1	
6. 子どもがわずらわしくてイライラしてしまう	4—3—2—1	
7. 自分は子どもをうまく育てていると思う	4—3—2—1	
8. 子どものことで、どうしたらよいかわからなくなることがある	4—3—2—1	
9. 子どもは結構一人で育っていくものだと思う	4—3—2—1	
10. 子どもをおいて外出するのは心配で仕方がない	4—3—2—1	
11. 自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう	4—3—2—1	
12. 育児によって自分が成長していると感じられる	4—3—2—1	
13. 毎日毎日、同じことのくり返ししかしていないと思う	4—3—2—1	
14. 子どもを育てるためにがまんばかりしていると思う	4—3—2—1	

Ⅱ. 今回の取り組みについておたずねします。

1. この取り組みで良かった点を自由にご記入ください。

2. この取り組みで改善してほしい点を自由にご記入ください。

3. この取り組みに参加することで、あなたやお子さんの考えや行動など変化があった点を自由にご記入ください。

4. その他、気がついた点等がありましたらご自由にご記入ください。

アンケートは以上で終了です。ご協力ありがとうございました。

資料4 アンケート回答者属性集計

1. 子育て支援者から見た「気になる子育て家庭」に関するアンケート

表1 性別

項目	度数	パーセント
男性	20	7.0
女性	261	91.9
無回答	3	1.1
合計	284	100.0

表2 年齢

項目	度数	パーセント
20歳代	27	9.5
30歳代	60	21.1
40歳代	70	24.6
50歳代	89	31.3
60歳代	28	9.9
70歳代	7	2.5
無回答	3	1.1
合計	284	100.0

表3 活動地域

項目	度数	パーセント
摂津	56	19.7
枚方	52	18.3
河内長野	60	21.1
富田林	65	22.9
熊取	41	14.4
無回答	10	3.5
合計	284	100.0

表4 所属機関・組織

項目	度数	パーセント
行政福祉	35	12.3
行政保健	36	12.7
公立保育所	31	10.9
私立保育所	32	11.3
公立幼稚園	9	3.2
私立幼稚園	17	6.0
家庭児童相談室	17	6.0
子育て支援センター	22	7.7
NPO・ボランティア	30	10.6
公民館	6	2.1
その他	39	13.7
無回答	10	3.5
合計	284	100.0

表5 取得している資格

項目	度数	パーセント
保育士	129	45.4
看護師	28	9.9
保健師	33	11.6
社会福祉士	11	3.9
臨床心理士	15	5.3
幼稚園教諭	92	32.4
小学校教諭	23	8.1
中・高校教諭	19	6.7
その他	53	18.7

表6 子どもの有無

項目	度数	パーセント
有	216	76.1
無	66	23.2
無回答	2	0.7
合計	284	100.0

表7 未就学児の養育状況

項目	度数	パーセント
している	31	10.9
していない	185	65.1
合計	216	76.1

表8 自身の子育て経験の認識

項目	度数	パーセント
とても楽しかった	41	19.0
楽しかった	79	36.6
少し楽しかった	29	13.4
少しつらかった	12	5.6
つらかった	3	1.4
無回答	52	24.1
合計	216	100.0

表9 活動充実度合い

項目	度数	パーセント
とても充実している	18	6.3
充実している	173	60.9
あまり充実していない	61	21.5
充実していない	7	2.5
無回答	25	8.8
合計	284	100.0

表10 活動に関する意識

項目	度数	パーセント
地域に貢献している	130	45.8
地域に貢献していない	29	10.2
力量不足	156	54.9
対象者にがっかり	31	10.9
相談相手なし	3	1.1
仲間との連帯感	142	50.0
対象者から感謝	89	31.3
課題の緩和・解決	66	23.2
課題の緩和・解決なし	66	23.2

表11 地域範囲の認識

項目	度数	パーセント
隣近所	4	1.4
自治会・町内会	36	12.7
小学校区	62	21.8
中学校区	45	15.8
市内全域	113	39.8
よくわからない	8	2.8
その他	5	1.8
無回答	11	3.9
合計	284	100.0

表12 地域活動経験

項目	度数	パーセント
自治会・町内会	199	70.1
婦人会	19	6.7
P T A	149	52.5
その他	77	27.1

表13 機関・組織連携

項目	必要性認識		連携済み	
	度数	パーセント	度数	パーセント
行政福祉	244	85.9	190	66.9
行政保健	220	77.5	164	57.7
保育所	221	77.8	154	54.2
幼稚園	182	64.1	83	29.2
家庭児童相談室	214	75.4	143	50.4
子育て支援センター	219	77.1	115	40.5
N P O ・ ボランティア	115	40.5	57	20.1
公民館	49	17.3	18	6.3
教育委員会	144	50.7	79	27.8
小学校	184	64.8	113	39.8
中学校	143	50.4	64	22.5
病院・医院	129	45.4	55	19.4
自治会・町内会	97	34.2	25	8.8
民生児童委員・主任児童委員	189	66.5	108	38.0
社会福祉協議会	82	28.9	36	12.7
警察	86	30.3	20	7.0
当事者組織	102	35.9	37	13.0
その他	17	6.0	15	5.3

表14 地域連携

項目	度数	パーセント
とてもうまく連携できている	12	4.2
ややうまく連携できている	121	42.6
あまりうまく連携できていない	58	20.4
うまく連携できていない	22	7.7
わからない	52	18.3
無回答	19	6.7
合計	284	100.0

2. モデル事業効果測定アンケート

表15 性別

項目	度数	パーセント
男性	2	0.9
女性	232	98.7
無回答	1	0.4
合計	235	100.0

表16 年齢

項目	度数	パーセント
10歳代	1	0.4
20歳代	25	10.6
30歳代	173	73.6
40歳代	35	14.9
無回答	1	0.4
合計	235	100.0

表17 職業

項目	度数	パーセント
専業主婦	179	76.2
フルタイム	12	5.1
パート・アルバイト	32	13.6
育児休業中	8	3.4
自営業	3	1.3
その他	1	0.4
合計	235	100.0

表18 同居者

項目	度数	パーセント
パートナー	219	93.2
子ども	225	95.7
パートナーの母親	10	4.3
パートナーの父親	11	4.7
自分の母親	9	3.8
自分の父親	9	3.8
その他	1	0.4

表19 子どもの人数

項目	度数	パーセント
1人	67	28.5
2人	112	47.7
3人	44	18.7
4人	4	1.7
5人	2	0.9
無回答	6	2.6
合計	235	100.0

表20 子どもの年齢

項目	度数	パーセント
0歳	33	14.0
1歳	53	22.6
2歳	57	24.3
3歳	53	22.6
4歳	24	10.2
5歳	47	20.0
6歳	85	36.2
7歳～12歳	72	30.6
13歳以上	12	5.1

表21 相談・協力相手の有無

項目	度数	パーセント
有り	210	89.4
無し	13	5.5
無回答	12	5.1
合計	235	100.0

表22 居住期間

項目	度数	パーセント
6ヵ月未満	10	4.3
6ヵ月から1年未満	13	5.5
1年から3年未満	44	18.7
3年から5年未満	52	22.1
5年以上	102	43.4
無回答	14	6.0
合計	235	100.0

表23 プログラム参加目的

項目	度数	パーセント
子ども仲間作り	122	51.9
自分の仲間づくり	49	20.9
子育ての具体的な方法を知りたい	57	24.3
子育てに対する知識や考え方を深めたい	121	51.5
子育てについてのサービス情報を得たい	35	14.9
子育ての悩みを解決したい	47	20.0
自分の話を聞いてもらいたい	21	8.9
他の親と情報交換をしたい	58	24.7
子どもの成長	42	17.9
特に期待していない	14	6.0
その他	2	0.9

検討経過

<プロジェクト実施に関する事前勉強会>

■第1回 [平成21年6月2日]

- プロジェクト実施に関する確認について
- 子育て支援者が「気になる」と感じる子育て家庭についての意見交換
- 支援プログラムの選定や効果測定方法等について
- 支援プログラムを実施する人材の養成等について
- 支援プログラムの評価等の委託について
- その他

■第2回 [平成21年6月24日]

- 支援プログラムの実施内容について
- 支援プログラムの効果測定指標について
- 支援プログラムの評価等に関する委託内容や委託先の選定について
- その他

<プロジェクトワーキング>

■第1回 [平成21年9月16日]

- 子育て支援に関する地域の「つながり」について
- 子育て支援者が「気になる」と感じる項目の作成方法について
- 支援プログラムの効果測定指標について
- 支援プログラムの実施スケジュールについて
- その他

■第2回 [平成22年2月16日]

- 支援プログラム等の分析状況について
- 調査・研究報告書の構成について
- 調査・研究報告書の作成スケジュールについて
- 調査・研究成果発表会のスケジュールについて
- プロジェクト等の名称について
- その他

■第3回 [平成22年3月19日]

- 調査・研究報告書の校正について
- 調査・研究成果発表会での発表資料について
- 調査・研究成果発表会当日のスケジュールについて
- その他

親と子のあゆみはぐくむプロジェクト

<ワーキンググループ>

[メンバー]

白山 真知子	摂津市	家庭児童相談室長
田中 篤子	摂津市	鳥飼保育所 所長代理
八木 安理子	枚方市	家庭児童相談所 課長代理
秋山 利恵	枚方市	楠葉野保育所 主任保育士
奥野 時子	富田林市	子育て支援課 参事
岡本 聡子	NPO法人ふらっとスペース金剛	代表理事
吉富 裕子	河内長野市	子育て支援センター 主任保育士
吉川 三幸	河内長野市	子育て支援センター 副主任保育士
瀧本 美子	熊取町	子ども家庭課 係長

[オブザーバー]

岸本 弘子	大阪市	子ども支援部 子育て支援担当 課長代理
堀 道子	大阪府	中央子ども家庭センター 虐待対応課 課長補佐
松園 典子	大阪府	教育委員会 市町村教育室 地域教育振興課 副主査

<調査研究チーム>

寺田 恭子	プール学院大学短期大学部	幼児教育保育学科 准教授（チーム責任者）
近棟 健二	種智院大学	社会福祉学科 助手（作業主担当）
兼房 律子	大阪成蹊短期大学	児童教育学科 教授
梅原 直子	貝塚市社会教育委員会	議長・貝塚市主任児童委員

<事務局>

大阪府福祉部子ども室

<協力団体>

特定非営利活動法人 南大阪地域大学コンソーシアム
プール学院大学
プール学院大学短期大学部

「親と子のあゆみはぐくむプロジェクト」成果報告書

平成22年3月 発行 大阪府福祉部子ども室

このプロジェクトは、厚生労働省の児童環境づくり基盤整備事業費補助金の交付により行ったものです。